352
873

# 福島縣大觀

福島縣師範學校

始

特233
313

## 發刊の趣旨

本冊子は生徒に鄕土福島縣を大觀せしめ更に一層本縣を研究理解せしむる手引とせんが爲めである。もとより大觀で細目は各自の研究に待つのである。

各教科の鄕土化、職員生徒の鄕土研究、總じて鄕土に立脚した教育を目がけて本校が從來努め來りしところのものに本編が更に禪補するところあらば幸慶である。

何としても本校生徒の出發は本縣であり、その活動舞臺は本縣である。本縣を研究し本縣に即して國民教育の實績を擧ぐる心懸が最も必要である。鄕土福島縣の研究は切に望んで止まぬところである。

昭和十一年二月

福島縣師範學校長　及川彌平

帝國圖書館藏

# 目次


一、本縣の概觀……一
二、自然面の區分……六
三、火川と火山型……一二
四、主なる湖沼……一六
五、溫泉と休養帶……二〇
六、氣候型と其特色……二三
七、地質と鑛物……二六
八、動植物……五二
九、產業の概觀……九八
一〇、農業と生產……八二
一一、蠶糸業……八七
一二、畜產……九二
一三、機業……九五

一四、陶冶器と漆器……九六
一五、水産業と漁港……九九
一六、石　炭……一〇〇
一七、交通概觀……一〇一
一八、農村の現狀と施設……一〇四
一九、本縣の行政と財政……一二一
二〇、教育一般……一二四
二一、本縣略史……一三四
二二、本縣の人物……一三九
二三、名勝舊蹟……一五六
二四、本縣と文學……一八六
二五、縣民性の考察……二一〇
附　錄
福島縣師範學校鄕土研究項目……二三五

# 一、本縣の概觀

我縣の地域は、岩代國及び磐城國の大部を包含して、東は太平洋に、北は宮城、山形の二縣、西は新潟、南は群馬、栃木、茨城の諸縣に境し他地域と接觸多き區劃をなしてゐる。

古の陸奥國の南部を占めて、その南門に當り文化移動線上の重要な場所で、勿來、白河の二つの古關によつて、關東八州に接續し、交通上の核的位置をなし、中央日本と東北日本の接壤地帶をつくつてゐる。

西部は阿賀川横谷によつて、北陸地方に向ひ、北陸文化の移入路に當り、前者と共に東北地方並びに本縣地域の二大門戸をなしてゐる。

從つて關東平野に接續する縣南地域及び北陸地方に近き會津地方は、各々關東北陸の影響を受けることが多い。

これに反して縣北地域の宮城、山形兩縣に接する米澤盆地、白石盆地及び北部海岸地方は、本縣の影響を與へること多く、文化的勢力の漸移地帶である。

又これらの接壤地帶は、過去に於ける戰爭地域として、軍事上重要な位置を占めてゐた。縣南の白河口、縣北の厚樫山附近、及び中村附近の駒嶺等はこの好例で、度々軍事上に利用されたものである。

(1) 勿來關趾

勿來關趾は石城郡窪田村大字九面にあつて常磐線勿來譯の西南に當る。小丘上の關趾に古碑があつて源義家の古歌「吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな」を刻してある。

(2) 白河關趾

白河關趾は西白河郡古關村大字旗宿にある。白河町の南約十二粁で、松平樂翁の建立せる「古關趾」の碑がある。附近には藤原清衡が白河の關を起點として外ケ濱までつくりしものと傳へられる「一丁佛」が殘つてゐる。勿來關と共に昔時の交通線の遺跡である。

(3) 經緯上の位置

縣の北端——伊達郡茂庭村の由ケ岳　北緯三十七度五十八分二十八秒
縣の南端——東白川郡豐里村明神西百米　北緯三十六度四十七分十九秒
縣の東端——双葉郡請戸村字請戸　東經百四十一度二分四五秒五
縣の西端——南會津郡伊北村毛猛山西南約三粁　東經百三十九度十分一秒四



地域は東西に廣く、最長約百六十粁で最狹部は米澤、猪苗代、那須の各盆地を連ねる線で七十粁内外である。

面積は一萬三千七百八十一方粁あつて、本邦内地の三六パーセントに當り、大さより觀ると岩手縣に亜ぐ大縣である。

人口は百六十萬に近く性別より觀れば男四九パーセント、女五一パーセントの割合で戸數は約二十七萬である。（昭和十年十月一日現在百五十八萬一千五百四十九人）

人口の分布は、自然的要素の關係から著しく差異があるが、密度は縣平均百十五人で、福島盆地並びに磐城炭田地方が一方粁約二百人で最も多く、西部の會津山地が一方粁十九人で最も少い。東北地方では、宮城縣の次に位し内地の平均密度より著しく低い。

人口動態より見ると工業鑛山地域、主要農業地域及び山地地域の三地域にかけることが出來る。

工業鑛山地域は福島盆地會津盆地、及び炭田地方を含むもので福島盆地は製絲機業の盛んな關係から密度最も多く、一方粁四百二十五人を示し、關東地方の平野面と伯仲してゐる。

會津盆地は製陶、漆器、機業等の行はれることから前者と同樣で、炭田地方は石炭の集散と小工業の勃興により一方粁三百十人内外であるが經濟的影響によつて人の移動も多い。

主要農業地域は濱通及び中通の地方で、一方粁百五十人から百三十人である。

山地地域（阿武隈山地及び會津山地）は住居面が山地平坦面と河谷面に制限されてゐる關係から密度最も少く、一方粁四十三人から十九人である。最近、近代工業の勃興による都市集中の傾向が多く、郡山附近はその好例である。

本縣は比較的山地が多く經濟面は全面積の二〇パーセントで、約五〇パーセントは山地や湖沼地帶である。

經濟面は山地が南北に配列してゐるため自然的に、濱通、中通及び會津の三地方に區劃され、その地域性にそれ〴〵の特色を有してゐる。

交通面も地形の關係から南北の方向に通じ前記三地方は各クロツクスせる數條の峠道によつて結び付げられてゐる。

生産面も各特異相を有し、中通地方の養蠶・製絲・機業・牧馬・葉煙草。會津地方の漆器・陶磁器・木綿織物。濱通地方の牧馬・陶磁器・機業等何れも地方的特色のあるもので夙に名聲を博し、その一部は海外に輸出されてゐる。

川俣羽二重・人絹織・節絹・保原眞綿・會津漆器・會津燒・相馬燒等はその主たるものである。

特に製造工業は、地形的に水準の差がきく水力發電の利用多いことゝ、磐城炭田の石炭利用の爲その發達に便益多く、工業製品は東北六縣中にその首位を示してゐる。

本縣に於ける住居面は、主として三低地帶の平野面であるが、自然要素の影響からその組織及び形態について、種々の特色を有してゐる。

特に積雪の多い會津地方は、家敷利用や家屋構造に特色ある厩と母屋を「」狀に連絡せしめた東屋曲屋型が多い。農村々落の形態には種々の型式があるが、濱通地方は線狀村落型で、中通地方は微扇狀地面の點狀村落型と阿武隈川沿岸の線狀村落型に分れ、福島盆地及び會津盆地は交通線に沿ふ多角狀村落と水田帶に多い點狀村落型より成る。

本縣の村落の發達は交通線に沿ひ發達し、開拓の進むに從つて漸次地方の核的村落に進展せるものでその發達過程は交通線が重要な要素をなしてゐる。而して現在の都市の大部分は戰國時代以後に形成した城下町型で平、中村、白河、棚倉、三春、二本松及び若松等はこれに屬してゐる。若松は純然たる城下町として起つたもので盆地の經濟交通の核になつた好例である。交通線に發達せるものは街道村落型（宿場型）として奥州街道に多く、經濟關係から地方の小核的村落として成長せるものである。

福島は德川時代當初より交通都市として起り明治時代に至り、縣行政及び製絲機業の中心として發達せるものである。

中通地方の須賀川、松川及び會津地方の野澤等は共に街道村落として起れるものである。郡山は明治時代に入り、交通村落として起り工業都市に移化せるもので平附近の植田、湯本、內郷等は炭抗村落と

して起り、漸次工業都市へと移化してゐる。これ等の地域は工業地域として都市の膨脹が著しい。
近年交通機關の發達によつて奥羽山脈を中心とする休養地帶の溫泉村落が發達する傾向がある。

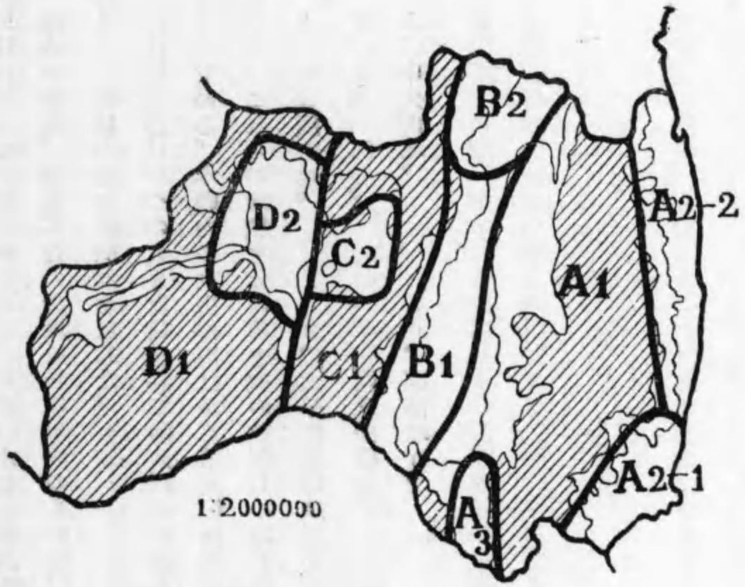
## 二、自然面の區分

本縣の地域は南北の方向に併行する三條の隆起帶とその間に介在する三個の低地帶より成立してゐる
隆起帶は古期山地の阿武隈山地と、新期生成の中央分水嶺山脈並びに越後山脈東緣山地を含む會津山地に分けられる。
阿武隈山地は主として阿武隈層より成り所謂「抽き戸構造」と言はれ、小藤博士、小川博士により斜走地壘と稱せられてゐる。
形狀は南北に長き紡錘狀をなし古生代後靜穩期に入り、中生代白堊紀末に準平原化し、さらに第三紀時代に入り西部からの側壓によつて再び隆起せるものである。
中央分水嶺山脈以西は西方からの側壓によつて褶曲作用が起り、古期山地を一部被覆せしめたもので南北の方向に多くの斷層が生じ高玉・猪苗代及び會津等の地溝が生成し、火山作用が伴うてゐる。
中央分水嶺山脈は東側に、南北の大急崖面をつくり阿武隈縱谷に接し、西は脊炙山地壘山脈の西緣急崖面によつて會津盆地に臨み、本縣を東西に二分する自然の大障壁をなしてゐる。第三紀時代以前は東



の阿隈山地は低平な島嶼をなし、中央分水嶺山脈以西は海面下にあつて海成層の沈積が行はれた。
現在の會津、福島其他の盆地は新期生成のもので、何れも湖沼時代を經過し、漸次隆起して平野面をつくり、本縣主要な經濟面をなした。
阿武隈縱谷は一つの大きな構造谷で阿武隈川が流れ、その流域は新層より成り本縣のみで約一千方粁に及んでゐる。本縣内の火山作用は多く第三紀時代末より第四紀時代に及び、特に中央分水嶺山脈以西に多い。これらの地域を分けると次の數個の小地形區に區劃することが出來る。

1、阿武隈山地。　2、太平洋海岸段丘地方。
3、久慈川河谷。　4、阿武隈縱谷。
5、中央山地。　6、西部地方。




「自然面の區分」（本文參照）

1. A1. A2—1. A2—2. A3 は東部地方
   A1—阿武隈山地
   A2—1. A2—2—太平洋海岸段丘地方
   A3—久慈川河谷
2. B1. B2 は阿武隈縱谷
   B1—阿武隈縱谷面
   B2—福島盆地
3. C1. C2 は中央山地
   C1—中央山地
   C2—猪苗代盆地
4. D1. D2—西部地方
   D1—會津山地
   D2—會津盆地



## 1、阿武隈山地

阿武隈ブラトーの殆んと全部を含む地域で、東は岩沼、久之濱斷層線、西は阿武隈縱谷と接する不連續的な西部構造線によつて、區劃される紡錘狀の山地で北部は荒濱に南部は多賀山脈に及んでゐる。

而して古生代末の山地が、中生代末まで削磨を受け準平原化し　新生代（第三紀時代）に入り再び隆起せるもので、分水嶺は東側の副分水嶺（約九百米）と中央分水嶺（約千米）とに分れ何れも殘丘があつて、複雜な山地をなしてゐる。矢大臣山（九六五米）、大瀧根山（一一九三米）、鎌倉岳（九六七米）矢筈山（七〇七米）、花塚山（九一九米）等は標式的の殘丘である。

兩分水嶺の中間部には、この地域特有の山間盆地がある。川內・古道・津島及び草野はこの例で山地平坦面と共に主たる住居面をなしてゐる。

東部に流出する鮫川・夏井川・木戸川・富岡川・請戸川・新田川・眞野川及び宇多川等は若返り甚しく水力發電に利用され、且海岸段丘面に向ひ、多くの微扇狀地を形成してゐる。

山地は一般に侵蝕面、山地平坦面が住居面經濟面であるが、狹小のため土地利用上著しく不利である。しかし南東季節風による降雨で草本類の叢生をみるため、牧馬が盛んに行はれ、山麓の傾斜面

には葉煙草がつくられてゐる。

## 2、太平洋沿岸段丘地方

平附近の低地と久之濱以北の地域を含む地方で、海岸段丘面は隆起して丘陵をつくり、舌狀の侵蝕面と三角洲面が主たる生産面をなしてゐる。

阿武隈プラトー東麓の微扇狀地は「原」の名を各所にあらはし、丘陵面と共に林地、畑地に利用され侵蝕面に接する崖端には村落を形成してゐる。

海岸は單調で出入りが乏しいが小名濱港が築港され四ツ倉・江名・原釜と共に漁業並びに海上交通に便益を與へてゐる。又これらの地域は海水浴場を兼ね立派な休養帶をなしてゐる。

## 3、久慈川河谷

棚倉盆地以南約十六粁、幅約二粁の狹長な低地面で本縣南部に於ける特色ある地域である。

河谷は低地のため專ら水田に利用され、東西兩側の斷層崖に沿ふ微扇狀地が住居面交通面をなしてゐる。また畑地の少い關係から狹い微扇狀地面には野菜・煙草及び丘陵性の蒟蒻等が耕作されてゐるこの河谷は古來より關東地方との聯絡路に當り文化の移動が行はれた。



## 4、阿武隈縱谷

基底は花崗岩類より成り表層は洪積層沖積層により被はれ撓曲運動により、南にゆくに從ひ漸次臺地面丘陵面をなしてゐる。

白河、須賀川、郡山、本宮、二本松、福島等は主たる中心で水田、桑園が多く分布し、生産及び人口密度の最も多い地域である。

南部の丘陵面、臺地面は林地に利用されてゐるが漸次畑地に移化し、侵蝕面（延長川名殘川）は水田帶阿武隈川氾濫原が桑園帶をなしてゐる。

## 5、中央山地

中央分水嶺山脈を中心とする地域で山地と猪苗代盆地に分けられる。この山地は新生代後半期の水成岩と新期火山岩より成り基底に埋在する古生層塊及び花崗岩類を露出してゐる。

那須火山脈に屬する諸火山は中央分水嶺山脈最後の隆起に伴ひ噴出せるもので、既に相當削剝された基盤の上に被覆して新らしく火山地形をつくり著しく、この山脈の高度を增さしめた。

猪苗代盆地は酸川（長瀨川）の微扇狀地面と三角洲面とより成り、主たる經濟面をつくり磐梯山を背

景として猪苗代湖と共に風景美に富んでゐる。

此地域は火山群・湖沼群・溫泉群及び雄大な森林美を有し本縣の重要な休養帶をなしてゐる。

### 6、西部地方

會津山地と會津盆地に分けられ前者は主として、河谷面及び山地平坦面が經濟面で河谷の侵蝕著しきため交通を妨げ且產業の開發が遲れてゐる。

後者は微扇狀地に圍繞された盆地面を中心に廣汎な生產面を有し、住居、交通、發達して北に喜多方南に若松の二つの核をなしてゐる。微扇狀地面はその自然の傾斜による灌漑用水群により廣い水田帶をなし、氾濫原は畑地として野菜畑、藥用人參畑等が經營されてゐる。

木綿織・造酒・陶磁器・漆器等は此の地域の主たる工業であるが積雪の長い冬季利用の關係から家內工業か・又はそれの移化せるものが多い。

## 三、火山と火山型

本縣の火山は中央分水嶺山脈と會津山地に多く分布し、前者は那須火山脈に屬し後者は內帶系の火山脈と思はれる。何れも第三紀時代末より引續き噴出し、初期に流紋岩、次に酸性安山岩・輝石安山岩等を溢出し著しく山地の高度を高め、周圍の溫泉群と共に本縣の主たる休養帶をなしてゐる。

### 1、那須火山脈の諸火山

A　旭火山群

栃木縣境より北に本縣に連るもので旭岳（一八三五米）足倉山、觀音山等を含み、生成後削剝作用により山體著しく崩壞して早壯年期に近似の地形をなしてゐる。

東麓は山麓に發達した扇狀地がつゞき白河を中心とせる良き牧馬地域をなす。

旭岳山頂の骨沼・澄沼・觀音沼の小湖群は略楕圓形をなしてゐるが、爆裂火口の遺跡である。

B　安達太郎火山

岳山又は沼尻山とも稱されてゐる。吾妻火山、磐梯火山と共に本縣北部の火山地帶をなし、湖沼群と共に風景美の核的地域である。

頂上には明治三十二年より三十三年にかけ爆發せる新火口がある。山頂の周圍には爆裂火口が分布して地形に著しい影響を與へ、岳溫泉、中の澤溫泉等の元湯となり且硫黃が採取されてゐる。

C　吾妻火山群

本縣の北境になる火山で東吾妻山（一九七五米）中吾妻山（一九三一米）西吾妻山（二〇二四米）

等を含むアスピーテの火山群である。

東部に五色火山（火口は五色沼）と吾妻火山の双兒火山があつて、吾妻火山の中央火口丘には吾妻小富士並びに三つの小火口丘がある。一切經山は五色火山と吾妻火山の火口緣で山頂には噴出せる岩屑・石塊等が堆積し下部は輝石富士岩より成る。

最近の火山活動は明治二十六年で、調査のため登山せる三浦技師及び西山技手が尊き犧牲となつた

D　磐梯火山群

安達太郎山と略、東西の方向に噴出せるもので猫魔嶽と双兒火山をなす。磐梯山は大磐梯とも稱せられ、頂上は尖頂をなし倒扇形で會津地方の鑑山である。山麓には扇狀地發達して猪苗代盆地に臨み表面は林地、草地をなしてゐる。

明治二十一年所謂「磐梯式爆裂」の大破裂をなし小磐梯山の三分の二を飛散し、長瀨川を堰止め檜原、小野川、吾妻の諸湖を形成せしめた。附近は風景美よく國立公園候補地である。猫魔嶽は通常東山と云はれ、山頂に火口湖の雄國沼がある。全山草木繁茂して岩石の露出が少く、會津盆地につゞく裾野は碓國沼の灌漑によつて水田に利用されてゐる。

2、西部内帶系の諸火山



會津山地の新生代岩石を貫いて處々に輝石富士岩及び玢岩類を噴出し中央山地の火山同樣高峯をつくつてゐる。博士山（一四八二米）燧岳（二三四六米）及び沼澤火山がその主たるものである。

博士山及び燧岳は安山岩類の噴出せるものでアスピーテの火山型をなし、沼澤火山はコニーデ型で中央火口丘と火口湖がある。火口湖は沼澤沼と云ひ陷落によるカルデラ湖で最深點は九十六米で風光よく沼澤八景あり。

3、火山型

本縣の火山地形をシュナイダーの分類によるとコニーデ。アスピーテ、及びトロイデの三型式に分けることが出來る。

A　コニーデ式火山

所謂「富士型」の山で整然とした圓錐形の層狀火山で緩い裾野の發達せるもので磐梯山、猫魔嶽、安達太郎火山、那須火山、沼澤火山等はこれに屬してゐる。

B　アスピーテ式火山

流動性に富む熔岩で緩傾斜の山體をつくるものであるが、本縣のこの型式に屬するものは基盤の第三紀層を貫いてその上に熔岩が被覆せるもので吾妻山、燧岳等はこれに屬す。燧岳の山頂にはアス

ビーテ型特有の陥落火口がある。

C　トロイデ式火山

流動性に乏しい熔岩で鐘狀に突起してゐる。靈山はこの型式で西側の急崖は玄武岩質集塊岩特有の創剝面である。尙安達太郎山は山姿全體はアスビーテ型の特色を有し、頂上に近き部分がコニーデ型である故アスビ、コニーデ型とも考察される。

## 四、主なる湖沼

湖沼は各地方に分布してゐるが成因上より觀ると火山、構造、潟湖、人工の四つの型に分類することが出來る。

火山作用に依るものは中央分水嶺山脈以西の火山地方に多く、火口湖、堰止湖に分けられ、火口湖には五色沼、桶沼、雄國沼、沼澤沼等がある。

檜原、小野川、吾妻の諸湖は噴火の際の泥流によつて堰止められたもので、尾瀨沼は熔岩流によつて出來た堰止湖である。なほ火山地方には噴出の際生じた凹所に水の溜つたものがある。磐梯山北側の四十餘の小湖沼吾妻山南麓の男沼、女沼等はこれに屬してゐる。

構造湖としては猪苗代湖が代表され潟湖型のものは太平洋沿岸北部に多い。老澤浦、矢澤浦、松川浦



等はこの好例で海流と南東季節風によつて砂礫が生じ外海と境せるもので、一般に深度小で海岸地方の特色である。最近これらの湖沼は漸次干拓され、耕地に利用さるゝやうになつた。

人工湖は阿武隈山地、中央山地等に多く分布し、A型、C型が多く灌漑用のためつくられしもので、白河附近の南湖はこの好例で白河樂翁により創設されしものである。

一般小堤防に櫻樹が植えられ名勝地をなしてゐる。(A型、C型は東木龍七氏の分類に依る)此の外火山岩の削剝を受けし地方にては、谷面を一部堰止めることによつて小湖をつくることがある、半田山麓の半田沼はこれに屬する、

### 1　猪苗代湖

猪苗代地溝帶の基底部を占め、南北に稍長く湖岸線は不規則で略楕圓形をなしてゐる。湖岸の延長は約六十五粁、面積は百三方粁で、水面は海拔五百十四米である。(最深點百二米)成因は一次的に陥沒による構造湖で、二次的には磐梯山の噴出物が西部を堰止めしものである。

成因については多くの傳說が傳へられてゐるが、(大同年間生成との說等)これは磐梯山の噴出物による湖岸線の移動を示せしものと思はれる。

排水口は北西岸の翁島附近にあつて「戸の口」と名づけられ。約三百米の落差をつくり、日橋川の

峡谷となつて會津盆地に流出し、これを利用して大寺以下四ケ所の大發電所がある。

尙東部の上戸附近よりは安積疏水がつくられ、安積盆地の灌漑と發電に利用されてゐる。湖面は交通に利用され、養殖場として鮒、鰻の産多く磐梯山を背景として、風景美に富み且自然地理學上の好標型である。翁島には高松宮御別邸がある。

## 2、裏磐梯の諸湖

裏磐梯の諸湖は明治二十一年七月十五日、磐梯山爆發の際、その噴出物の泥流によつて長瀬川が堰止められ湖沼群をつくりしもので形狀は堰止湖通有の谷形に一致せる狹長な湖面を有してゐる。檜原湖は最大で、延長約九粁幅二粁で海拔八百十九米を保ち、本縣の高山湖として有數のものである。小野川湖は小野川の溪谷が堰止められしもので、長さ四粁幅一粁内外でその大さは吾妻湖と近似してゐる。

吾妻湖は元秋元村のありし谷面で中津川が流入し、周圍には森林が多い。

以上の三湖は猪苗代湖の貯水湖として水力發電に密接な關係を有してゐる。附近は夏季好適なキヤンプ地域をなし又牛の放牧が行はれてゐる。尙最近この地域の開拓計畫がある



## 3、無行沼と大平沼

花崗岩、集塊岩等には風化による特有の剝落作用が起つて、山崩れが生じ、谷を堰止めて湖を生ずることがある。喜多方の北にある無行沼、大平沼は斷層線に沿ふた谷面が堰止められしもので湖面は狹長である。

## 4、沼澤沼

沼澤沼火山の中央火口丘の陷落火口丘で、湖岸線は約八粁、略楕圓形を呈し、最深部は稍中央より東で九十六米ある。湖岸はカルデラ特有の急傾斜をなし、沼澤の村落に近い、沼御前附近は透明の度高く、よくその特色を表はしてゐる。

風景美に富み、姫鱒の養殖が行はれてゐる。

## 5、尾瀬沼

本縣の西南境で、群馬、栃木、新潟の諸縣に接し海拔千六百六十五米で、本邦有數の高山湖である

燧岳熔岩流が只見川水源を堰止めたため生ぜるもので、生成當時は尾瀬ケ原まで連續し、深度も大

に、大湖なるも漸次排水されて現在の如く大部は濕原となつた。
三條瀧はその排水口で落差は約百米幅十五米餘で華嚴瀧より稍高く、一大偉觀である。湖のまわりは森林多く濕地には高山植物群生して、夏季湖邊にキャンプするもの多し。
日光を中心とする國立公園の地域で交通線の開發と共に本邦に於ける重要な觀光地域をなしてゐる

## 五、温泉と休養帶

温泉は火山地方並びに斷層地域に多く分布し、その種類も多い。火山地方にては噴出後熱水と瓦斯が伴ひ、熱水は温泉で瓦斯は噴氣孔をなす。本縣の中央部以西の温泉は多くこれに屬してゐる。斷層地域にては熱水及び瓦斯が地殼の裂罅を通じて上昇するもので、湧出量噴勢共に大である。中央山地の一部及び阿武隈山地並びに會津山地のものはこれに屬してゐる。本縣の温泉をその生成性質より分類すると六型式に分けることが出來る。(渡邊博士に依る)

### 1、高湯沼尻式温泉

多く火山の中腹或ひは、山麓より湧立する温泉で温度高く(攝氏五十度内外)酸性明礬泉、綠礬泉等の酸質泉で最新世の火山岩より湧出するものである。



高湯、幕湯(吾妻山附近)、沼尻、岳、野地、中ノ澤(安達太郎山附近)、噴火湯(磐梯山附近)、等の温泉はこれに屬し、火山裾野と原始林の繁茂は共に風景美を添へ、良き休養地帶をなしてゐる。

### 2、飯坂・東山式温泉

第三紀層より湧出するのが主であるが、稀には花崗岩類、古生代地層より出づ。温度は中庸で多く單純泉に屬してゐる。
飯坂、湯野、穴原、土湯、高玉、熱海、東山等の温泉はこれに屬し、飯坂、東山の兩温泉は古くから各地にその名を知られてゐる。

### 3、熱塩・日中式温泉

前者と同樣の地質より湧出するものであるが、多量の食鹽を含有す。熱塩・日中・大鹽等はこれに屬し、大鹽温泉にては食鹽を製出せることあり。

### 4、日畑・鮫川式温泉

阿武隈山地西麓の構造線に沿ひ、花崗岩類中より湧出するもので、温度低く固形分少きも放射能に

富む。母畑（エマナチオン十一マツヘ）鮫川・笹原等はこれに屬してゐる。

5、析木・小塙式温泉

阿武隈山地東麓の中生層又は花崗岩類と第三紀層の境界線より湧出するもので、温度低く固形分少く稀に硫酸及び明礬・石膏・炭酸曹達等を含有するがその量は少い。析木・小塙・富岡・野上等はこれに屬す。

6、石城・湯本式温泉

太平洋海岸段丘を構成する第三紀層及びその基底の花崗岩類より湧出するもので、多く新らしい斷層に沿ひ温度は、中庸で固形分は少い。

湯本温泉がこの例で、單純泉に屬し温度は攝氏四十度である。

本縣の温泉は主たるもの三十を超え、その中醫學上中山地帶に屬するものが十二ケ所ある。一年の浴客は約五十萬人を超え東京を中心とする休養帶中の白眉である。

尙附近の火山・湖沼・並びに美しい原生林と共に他に比類なき地域である。



## 六、氣候型と其特色

本縣の氣候を便宜上、海岸地方・阿武隈山地・阿武隈縱谷・中央山地及び會津地方の五氣候區に分けることが出來る。

### 1、海岸地方の氣候型

海岸地方は四ツ倉附近を境に黑潮の影響多い。南部と親潮の影響を多く受ける北部とに分けられる南部は黑潮型で氣温高く（年平均攝氏十四度内外）、雨量多く本縣の最も良き氣候區で、柑橘類の經營的栽培の北限をなし、温暖の季節長く關東地方の氣候型と相似な地域である。

四ツ倉以北は秋から冬期にかけて、親潮の影響を受け、氣温低く、季節風の交替には濃霧が多く、航通漁業に影響を與へ、時に氣候の平衡を破り、農作物に冷害を與へることがある。

一般に海岸地方は氣温雨量共多く、較差少く海洋性氣候で人口生産も多い。

### 2、阿武隈山地の氣候型

東北地方に於ける高原氣候の南部型で、較差は攝氏四十度に及び稍内陸性氣候である。

雨量は南部に多く、副分水嶺附近は海岸氣候型に、阿武隈縱谷に近き地域は阿武隈縱谷型に近似してゐる。

一般に降雪季節が長く、阿武隈縱谷より二週間早く、晩霜も五月初旬で、海岸地方と一ヶ月も相異し農業上に不利な地域である。

然れども草本類によく牧馬の中心となり、又南面する傾斜地は花崗片麻岩の風化土壤と傾斜面特有の微氣候とにより煙草耕作に有利である。

3、阿武隈縱谷の氣候型

山地の中間帶をなせるため、較差比較的多く、稍内陸性の氣候を示してゐる。雨量は北部にゆくに從ひ少く、中央日本型の特色を表はし梅雨の影響も少い。（雨量千二百粍内外）

一般に盆地形の連續多く、局部的に小氣候區を有してゐる。

乾燥氣候區のため養蠶業に適し、阿武隈川氾濫原の桑園と共に、本邦の主たる養蠶地域をなしてゐる。

4、中央山地の氣候型



東西兩地方の接觸部で氣候も中間性であるが西ほど北陸型に近似し、その特色を有してゐる猪苗代附近は高さ五百米を超え、且北西季節風の影響から冬季降雪量多く、北陸型に近似である。降雪は會津山地と共に本縣の深雪地帶で最高一・五米に及び、降雪日數は年百十日に及んでゐる。

この地域は阿武隈山地に相似で五月上旬から中旬にかけ播種が行はれる。

又降雪の多い關係から家屋型、耕作型に特色がある。

5、會津地方の氣候型

この地方は北陸型に類似した中間氣候區で較差は南部の山地ほど大で、内陸性氣候である。雨量は冬季に多く南西部は千五百粍を超え北部盆地面は少い。

降雪季節は比較的長く降雪日數は山地の百二十日が最も多く、盆地面の八十日が最も少い。

積雪も山地は二米乃至二・二米に及ぶ。

從つて居住型、耕作型は猪苗代に類似し、秋より冬にかけ陰鬱な天氣がつゞき勞働や氣質に影響を與へてゐる。

長い冬季の利用として木地工業木綿織等が起つてゐる。

# 七、地質と鑛物

## 福島縣下試掘採掘及砂鑛區數（昭和十年七月一日）

| 郡市名 | 試掘鑛區數 | 採掘鑛區數 | 採掘鑛區數 稼業 | 採掘鑛區數 休業 | 砂鑛區數 | 砂鑛區數 稼業 | 砂鑛區數 休業 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 相馬 | 一五 | 二 | — | 二 | 一 | 一 | — |
| 雙葉 | 一九 | 一六 | 二 | 一四 | 六 | 六 | — |
| 石城 | 八八 | 一〇四 | 五二 | 五二 | 六 | 六 | — |
| 西白河 | 六 | 一 | 一 | — | 三 | 三 | — |
| 東白川 | 二〇 | — | — | — | 一四 | 一三 | — |
| 伊達 | 二五 | 五 | 二 | 三 | 一 | — | — |
| 信夫 | 四四 | 一二 | 四 | 八 | 三 | 三 | — |
| 耶麻 | 六二 | 八 | 三 | 五 | 二 | 二 | — |
| 安達 | 二四 | 三 | 二 | 一 | 二 | 二 | — |
| 積 | 一八 | 三 | 一 | 二 | 一 | — | — |
| 北會津 | 一〇 | 五 | — | 五 | 二 | 二 | — |
| 河沼 | 二〇 | 一二 | 四 | 八 | 一 | 一 | — |
| 大沼 | 二一 | 六 | — | 六 | 一 | — | 一 |
| 南會津 | 三七 | 九 | — | 八 | 一 | 一 | — |
| 岩瀬 | 六 | 四 | — | 四 | — | — | — |
| 石川 | 二 | — | — | — | 五 | 一 | 四 |
| 田村 | 一 | — | — | — | — | — | — |
| 福島市 | 二 | — | — | — | — | — | — |
| 計 | 四二〇 | 一九〇 | 七二 | 一一八 | 六一 | 四 | 五七 |

## 福島縣下採掘鑛區

本縣下の採掘鑛區數は別表の如く總計一九〇、目下稼業中のものは七二、休業中のものは一一八の現勢である。鑛種としては石炭・金・銀・銅・鉛・亞鉛・水鉛・滿俺・硫黃で其中でも石炭・硫黃・金銀亞鉛鑛が主である。昭和九年度に於ける鑛產額の報告ありし鑛山を記せば左の如くである。

重要鑛山準重要鑛山とは一箇年間に左記標準の鑛產額があつたものを云ふ。

| 重要鑛山 | 準重要鑛山 |
|---|---|
| 一、金製出高 二〇、〇〇〇瓦以上 | 一〇、〇〇〇瓦以上 |
| 一、銀製出高 四〇〇、〇〇〇瓦以上 | 二〇〇、〇〇〇瓦以上 |
| 一、銅製出高 六〇、〇〇〇瓩以上 | 三〇、〇〇〇瓩以上 |
| 一、硫黃製出高 一、〇〇〇瓲以上 | 三〇〇瓲以上 |
| 一、石炭產出高 五〇、〇〇〇瓲以上 | 一〇、〇〇〇瓲以上 |

| 郡名 | 町村名 | 鑛山名 | 鑛種 | 鑛區坪數 | 昭和九年產額 | 鑛業權者 | 住所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 【重】石城 | 好間、赤井、内郷 | 好間 | 同 | 二、七四、八四〇 | 三、一五八 瓲 | 今橋四衛 | 東京 |
| 【重】同 | 好間、内郷、箕輪 | 隅田川 | 同 | 五五一、五二三 | 四六五 | 箕田合資會社 | 同 |
| 【準】同 | 内郷 | 浪花 | 同 | 二、六〇四、一四五 | 二三〇、三〇七 | 古河石炭鑛業株式會社 | 同 |
| 同 | 同 | 戸部炭坑第二鑛 | 同 | 七三四、六三七 | 一四三、四七九 | 小田吉治 | 石城郡好間 |
| 同 | 同 | 宮 | 同 | 八七、〇八八 | 三二、一三三 | 關又一外一 | 東京 |
| 同 | 同 | 戸部 | 同 | 五七、六三三 | 四、九四〇 | 戸部光衛 | 同 |
| 【準】同 | 内郷、箕輪 | 王城 | 同 | 三九、四八二 | 一、一〇五 | 東日本炭鑛株式會社 | 同 |
| 【準】同 | 内郷、湯本町 | 王城第三 | 同 | 八五、〇〇〇 | 八、六八九 | 戸部光衛 | 同 |
| 同 | 内郷 | 五十嵐 | 同 | 一五六、一七〇 | 一〇、一五八 | 王城炭鑛株式會社 | 同 |
| 【重】同 | 好間、内郷、飯野、二十町 | 内郷 | 同 | 三二一、九七〇 | 三〇、八六八 | 同 | 同 |
| | | | | 一三四、二四九 | 四、九三九 | 五十嵐榮次郎 | 同 |
| | | | | 四、六〇八、八一二 | 八七八、七九四 | 磐城炭鑛株式會社 | 同 |
| 【重】同 | 内郷、湯本、飯野 | 入山 | 同 | 三、七四六、五一〇 | 四六三、四二〇 | 入山採炭株式會社 | 同 |
| | 磐崎、鹿島 | | | 六三九、五八八 | 一一五、四五三 | 小田炭鑛株式會社 | 石城郡好間 |
| 【重】同 | 赤井、好間、箕輪 | 小田第三坑 | 同 | 一二七、七三六 | 一四、二七六 | 川瀬幸吉 | 石城郡赤井 |
| 【準】同 | 赤 | 井川瀬 | 同 | 六九〇、六三五 | 三一、二六七 | 大日本炭鑛株式會社 | 東京 |
| 【準】同 | 勿來、川部、錦 | 東海 | 同 | 四四六、二七四 | 六、五二一 | 木村康一郎外一 | 同 |
| 同 | 川部、勿來 | 山木 | 同 | 一、三七〇、五六三 | 八二、九四七 | 大日本炭鑛株式會社 | 同 |
| 【重】同 | 勿來、川部、錦 | 勿來 | 同 | | | | |

| 郡名 | 町村名 | 鑛山名 | 鑛種 | 鑛區坪數 | 昭和九年產額 | 鑛業權者 | 住所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 【準】同 | 勿來 | 日支勿來 | 同 | 三三六、一〇〇 | 三六、〇六三 | 日支炭鑛汽船株式會社 | 同 |
| 【重】同 | 湯本、磐崎、内郷 | 小野田 | 同 | 一、四四七、九六八 | 五三、六八一 | 磐城炭鑛株式會社 | 同 |
| 【準】同 | 磐崎 | 磐崎 | 同 | 七七、一〇〇 | 三一、〇九五 | 戸部光衛 | 同 |
| 同 | 上遠野 | 富士 | 同 | 三三八、〇〇〇 | 四二五 | 鳳城炭鑛株式會社 | 同 |
| 【重】同 | 赤井、上小川、下小川 | 福島 | 同 | 二、〇八八、二五八 | 六〇、四三〇 | 福島炭鑛株式會社 | 同 |
| 同 | 大野 | 八茎 | 金銀銅水銀鐵 | 五九四、三六〇 | — | 八茎鑛山株式會社 | 同 |
| 西白河 | 金山 | 古關 | 黃金 | 五二三、九〇〇 | 一、七〇九瓦 | 福島弘 | 同 |
| 【重】伊達 | 半田 | 小坂 | 金銀銅鉛亞鉛 | 九〇六、八〇〇 | 二、八八一瓲 | 五代龍作 | 同 |
| 同 | 上保原、富成、岡山、鎌田 | 富保 | 金銀 | 三八七、五〇〇 | 二五二 | 高山政子外四 | 同 |
| 信夫 | 松川 | 水原 | 松川 | 三九二、七〇〇 | 二九〇 | 大寶彌男二 | 同 |
| 同 | 松川 | 金谷川 | 金谷川 | 一六五、一〇〇 | 三三 | 三菱鑛業株式會社 | 同 |
| 【準】同 | 大森、平田、鳥川 | 大森 | 金銀 | 六一七、四〇〇 | 一〇、四一八瓦 | 角田文平 | 福島 |
| | | | | | 四七、六二六瓦 | | |
| | | | | 六二、八〇〇 | 二、一三二屯 | 藤山鑛業株式會社 | 東京 |
| 【重】同 | 庭 | 坂信夫 | 硫黃 | 一、一四二、五一〇 | 一三、八二五 | 日本硫黃株式會社 | 同 |
| 耶麻 | 吾妻 | 沼尻 | 硫黃硫化鐵 | | 八、八八二 | | |
| 同 | 加納 | 加納 | 金銀銅鉛亞鉛 | 六四五、七三〇 | — | 岸萬平 | 若松市 |
| 同 | 一ノ木、木幡、早稻谷 | 德澤 | 滿俺 | 三三〇、〇〇〇 | 一〇三 | 合資會社杉林黑鉛滿俺製煉所 | 東京 |
| 安達 | 高川 | 高玉 | 金銀 | 二、〇一五、九六四 | 四七、四七一 | 日本鑛業株式會社 | 同 |
| 安積 | 月形 | 金山 | 金銀銅鉛亞鉛 | 一六二、一五五 | 九四 | 遊佐重文外一 | 同 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 北會津 | 一 | 箕石ヶ森 | 金銀 | 一四二、六九二 | 同 | 二風間忠作 | 北會津一箕村 |
| 【重】河沼 | 野澤下 | 谷赤羽根 | 金銀銅亞鉛 | 三六八、四三八 | 同 | 三、七七二 日本鑛業株式會社 | 東京 |
| 同 | 下 | 谷鈍子岩 | 金銅亞鉛 | 一四三、八六〇 | 銅亞鉛鑛 | 六四五 日本曹達株式會社 | 同 |
| 郡名 | 町 | 村 | 名 | 鑛種 | 鑛區延長又ハ坪數 | 昭和九年採取高 | 砂鑛權者 | 住所 |
| 相馬 | 福浦 | | 砂鐵 | 二二、一〇〇 | 砂鐵 三五屯 | 東洋チタン合資會社 | 相馬郡小高町 |
| 東白川 | 棚倉、近津、高野 | | 砂金 | 四里 | 砂金 六七八瓦 | 藤本晃 | 東京 |
| 同 | 近津 | | 同 | 一里二七町二十間 | 同 九二 | 和知幾喜外一 | 東白川近津村 |
| 石川 | 石川町野木澤 | | 砂鐵 | 二八町三〇間 | 砂鐵八三貫 | 大野峰治外一 | 石川郡澤田村 |

## 主要なる鑛山

### 一、八葦銅山　接觸鑛床　石城郡大野村

本邦に於ける最も大なる接觸鑛床の一で一時は隆盛を見たが現今は休業して只石灰岩を採掘して四倉磐城セメント會社に送るだけである。本鑛山の沿革は詳かでないが、口碑の傳ふる所によれば、天正慶長年間時の領主佐竹氏稼行しに盛況を極めたが、爾來種々の變遷を經て明治三十九年現鑛業者の手に渡つた。

鑛山附近は、凡て古生層の粘板岩、角岩、砂岩、石灰岩等の累層からなり、此等を貫いて花崗岩、閃綠岩、石英、斑岩等が迸入したために水成岩は屢々變質し更に種々の接觸鑛物を生じ玆に鑛床を形成した鑛區中最大なるものは本坑鑛床で「レンズ」形の石灰岩の厚層中に含まるゝ柘榴石（Garnet）灰鐵輝石（Hebendergite）からなる大「スカルン」鑛塊で此接觸鑛物帶中には不規律の塊狀粒狀脈狀をなして種々の硫化鑛物及び少量の磁鐵鑛（Magnetite）赤鐵鑛（Hematite）を含む硫化鑛の重なるものは黃銅鑛（Chalcopyrite）黃鐵鑛（Iron pyrite）白鐵鑛（Marcassite）磁硫鐵鑛（Pyrrhotite）硫砒鐵鑛で（Arse nopyrite）閃亞鉛鑛（Zinc blende）方鉛鑛（Galenite）等の少量を混有するもので銅の含有量は少ないが上鑛貧鑛取り混ぜて二%內外の鑛石として製煉されて居たが、現今は產出少ないために休業の狀態で、採掘法は鑛塊採掘特有の洞掘法である。

### 二、高玉鑛山　裂罅充塡鑛床　安達郡高川村

本鑛山は本縣內に於て稼行する鑛山中最も重要なる鑛山である。此地方の地質は第三紀層及石英粗面岩よりなる即ち第三紀の噴出にかゝる石英粗面岩が第三紀層を貫き噴出せるために、玆に鑛床が生成されたものである。當山の母岩は主として第三紀凝灰岩と頁岩とより成るも、鑛床存在區域附近では

著しく硅化變質して石英粗面岩に酷似せる外觀を呈して居る。鑛床は此等の岩石を上下縱横に貫く數多の含金銀鑛で、走向は南北並東西を主として傾斜は一樣でない鑛幅は稀に四米に達するものがあるが、普通は三〇糎内外である。鑛脈は主として石英七〇%からなり金は概ね自然金として含まれ、銀は主に輝銀鑛として産出し一部は角銀鑛濃紅銀鑛で他に少量の黄鐵鑛を伴ひ、其他の硫化物は甚だ稀である。鑛脈中の石英氷長石は細かい縞狀構造を呈して居る。

本鑛山の沿革に就ては記錄の徵すべきものはないが、口碑の傳ふる所によれば蒲生氏郷が會津を領せし頃稼行したが氏郷轉封後は廢山となり、明治十九年長崎縣人松浦建二郎氏によりて稼行され、次で明治二十三年東京の人肥田金一郎氏が之を繼承して製煉したが、後製煉を廢止し鑛石を日立鑛山に賣鑛し漸次盛況を呈せしも大正七年十月鑛業權は日本鑛業株式會社に移つて今日に至り、更に昭和十年三月以降は本鑛山に於て青化法製錬をなすに至つた。

鑛産額

| 年度 | 産金量 | 産銀量 |
|---|---|---|
| 昭和八年度 | 九三一、三六七瓦 | 九、〇四九、五三瓦 |
| 昭和九年度 | 八八七、七四五瓦 | 八、八七七、七〇五瓦 |

比較（昭和八年度全國との比較）

全國（朝鮮臺灣を際く）産金量 一三、八四一、四八九瓦に對し 六、七三%
産銀量 一九四、〇七五瓦に對し 四、六六%

## 三、半田銀山　裂罅充塡鑛床　伊達郡半田村

此地方は重に第三紀層石英粗面岩變朽安山岩眞珠岩等よりなり、石英粗面岩は第三紀層を貫きて地表に噴出し鑛脈は主に石英粗面岩中に胚胎す脈石は石英を主として、方解石や粘土等を伴ふ時には美晶の紫水晶を産することもある。鑛石は含金銀鑛が重なるもので稀に脆銀鑛自然銀を混へることがある其他硫化鑛としては方鉛鑛(Galentte) 閃亞鉛鑛(Zincblenede) 黄銅鑛(Chalcopyrit) 黄鐵鑛(Iranpyrite) 等を隨伴す。

本鑛山の發見は千年以前にありと云ふが、記錄の徵すべきものがない。舊記によれば慶長年間より萬治年間に至る凡そ五十年間は最も隆盛を極めたと云ふ。延享四年より元治元年に至る百八十年間は德川幕府の稼行する所となり、慶應三年より明治二年に至る間は早田氏稼行し、明治七年より五代氏の手によりて稼行、其間幾多の興廢盛衰を經て現今に至る大正八年限り製錬を廢し日立、小坂鑛山に賣鑛を契約せしも大正十一年よりは足尾銅山に賣鑛を開始して居るが舊式の採鑛法により昭和九年度は金銀鑛としての鑛量二、八八一瓲を産出したのみで全盛時代の比でない。

| | 金産量 | 銀産量 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 明治四十年 | 八、〇一五 匁 | 一六七、四五四 匁 | |
| 大正元年 | 二五、八二七 | 二八九、九〇〇 | |
| 大正五年 | 三七、七三〇 | 五二七、九二〇 | |
| 大正十年 | 七、五二一 | 一一九、四二七 | 事業縮少 |
| 昭和元年 | 四、四〇一 | 三八、〇三七 | |
| 昭和五年 | 八、六六九 | 二七、四〇三 | |
| 昭和八年 | 七、〇〇〇 | 六七、六四三 | |
| 昭和九年 | 一二、〇二三 | 一七〇、八五四 | |

## 四、加納鑛山　交代鑛床　耶麻郡加納村

此地方は主に第三紀の頁岩と之を貫いて迸發した石英粗面岩との接觸せる部分に生成せる黑鑛及石英粗面岩中に浸染せる黃鑛及珪鑛の大鑛塊で鑛床の中央部に石膏の發達した大塊を存有する鑛床は小坂安部城等の鑛床と其成因を同じくして、本縣下に於ける唯一の黑鑛鑛床なりしも現時休業し石膏を採取するに過ぎない。本山發見時代は不明であるが、慶長年間時の藩主加藤嘉明盛に稼行して主に銀を採取せしが爾來廢坑となつて居つたが、明治年間に至り數多の鑛主を代へ三十八年現鑛業者岸萬平氏の有となり、一時は盛況を極めたが漸次採掘鑛量を減じ今は廢坑同樣となつた。

## 五、沼尻鑛山　耶麻郡吾妻村

本山附近一帶は古來より硫黃鑛に富み所在採掘に從事せし跡がある。然れども近くは明治三十三年七月の大噴火のために舊鑛區及び工場も破壞し、記錄もなきため發見の由來沿革を知ることが出來ない現鑛區は硫黃硫化鐵鑛床として重要なる鑛山に屬し、日本硫黃株式會社の經營にかゝり、現に稼行されて居る。本鑛床の成因に就ては二說あり、一は舊時の噴火口中に生成した水成沖積鑛床なりとし、一は火口の硫氣孔より噴出した含硫黃瓦斯の昇華せるもの又は岩石中に浸入し、或は岩石を霉爛して之れと交代し、岩石中に大小の硫黃塊が染浸散默せるものなりと云はれてゐる。

鑛産量

| 年度 | 硫黃 | 硫化鐵鑛 |
|---|---|---|
| | 屯 | 屯 |
| 昭和六年 | 八、九七五 | 一三、二七二 |
| 昭和九年 | 一三、八二五 | 八、八八二 |

## 六、信夫鑛山　信夫郡庭坂村

本鑛山は須川の上流高湯の奥不動瀧附近一帶の鑛區を有する。古來より硫黃鑛に富み採掘せしことありしも、稼行中絶し居りしか、昭和六年より鑛業權は齋藤伊三郎氏に移り後藤山鑛業株式會社によりて經營され、漸次隆盛に趣き昭和九年の鑛產額は二、一三二瓲に達した。將來有望の鑛山重要鑛山なるも現時鑛毒問題を惹起し頗る紛爭を極めて居る。

七、其他規模小さく鑛產額は少なけれども稼行中の鑛山の主なるものを記せば

| 鑛山名 | 鑛種 | 所在 | 昭和九年の鑛產額 |
|---|---|---|---|
| 黃金澤 | 金、銀 | 西白河郡金山、古關 | 金　五二三、九〇〇瓦 |
| 富保 | 同 | 信夫郡岡山、鎌田 | 金銀鑛　二五二瓲 |
| 松月 | 同 | 同　松川、水保 | 同　二九〇 |
| 金谷川 | 同 | 同　松川、金谷川 | 同　三三 |
| 大森 | 同 | 同　大森、鳥川 | 金　一〇、四一八瓦 |
| 德澤 | 滿俺 | 耶麻郡一ノ木 | 銀　四七、六二六瓦 |
| 金山澤 | 金、銀、銅、鐵、亞鉛 | 安積郡月形村 | 滿俺鑛　一〇二瓲 |
| 石ケ森 | 金、銀 | 北會津郡一箕村 | 金銀鑛　九四 |
| 赤羽根 | 金、銀、銅、鉛、亞鉛 | 河沼郡下谷村 | 同　二 |
| 鈍子岩 | 同 | 同 | 同　三、七七二 |
| | | | 銅、亞鉛鑛　六四五 |



## 八、砂鑛區

現在の砂鑛區數は、六四の多きに達すれども、稼行中のものは甚だ少く、相馬郡福浦砂鑛區より昭和九年に於て砂鐵二五瓲、東白川郡棚倉近津高野砂鑛區より砂金六七八瓦、同郡近津砂鑛區より砂金九二瓦、石川郡石川町野木澤砂鑛區より砂鐵八二貫を採取したるを知るのみ。

### 鑛物

本縣は鑛物縣として有名である。金屬鑛物の普通なるものは全縣下各地に產することは別表鑛區數の所に示せる通りであるが、非金屬鑛物の多くは東部地方阿武隈山脈各地に產出する。殊に石川郡地方は古來鑛物の主產地として其名著はれ、本縣が鑛物縣なりと稱せらるゝに至りしは其故である。石川地方產鑛物に就て其大要を記せば

### (一) 石川地方產鑛物の一般

| 鑛物名 | 產地 | 產出量 | 產出ノ狀態 | 利用 |
|---|---|---|---|---|
| 白色石英 | 石川町、野木澤村、泉村、須釜村、大森田村、山橋村 | 多 | 花崗岩ペグマイト脈中 | 硝子、陶磁器原料トシテ採掘シ名古屋方面ニ輸出 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 黒色石英 | 石川町、野木澤村 | 同 | 同 | 前 | 無 |
| 黄色石英 | 同 | 少 | 同 | 同 | 同 |
| 紅石英 | 石川町、山橋村 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 紫石英 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 乳石英 | 石川町、須釜村 | 同 | 同 | 同 | 白色石英ト同樣 |
| 鐵石英 | 阿武隈川、野木澤村 | 同 | 砂 | 砂礫中或ハ地上ニ露出散在 | 良質ノモノハ裝飾用トス |
| 石英砂 | 母畑村、淺川町、小鹽江村 | 多 | ノ花 | 花崗岩、片麻岩ノ崩解セルモノニシテ地表ニ散在 | 無 |
| 水晶 | 石川町、泉村、須釜村、小平村、野木澤村、竹貫村 | 同 | ペ | ペグマイト脈石英中ニ又ハ其崩壞ニヨリテ地表ニ散在 | 良質大晶ハ裝飾用トス |
| 黒水晶 | 石川町、野木澤村、須釜村 | 同 | 同 | 同 | 無 |
| 紫水晶 | 小平村、蓬田村 | 少 | 花 | 花崗岩片麻岩ペグマタイト中或ハ其ノ崩壞ニヨリテ地表ニアルコトアリ | 良質大晶ノモノハ裝飾用トス |
| 瑪瑙 | 野木澤村、泉村、淺川町 | 同 | 土 | 土壞中ニ散在 | 無 |
| 玉髓 | 泉村 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 木化蛋白石 | 野木澤村、泉村、淺川町、小鹽江村 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 半蛋白石 | 北須釜、阿武隈川 | 同 | 砂 | 砂礫中又ハ地表ニ散在 | 陶磁器製造原料トシテ盛ニ採掘シ名古屋地方ニ出ス |
| 正長石 | 山橋村、須釜村、大森田村、泉村、野木澤村、山白石村 | 多 | 花 | 花崗岩、片麻岩中ペグマタイト脈中 | 同 |
| 白雲母 | 石川町、野木澤村、泉村、須鍼村、蓬田村、大森田村、淺川町、山橋村 | 同 | 同 | 同 | マイガドン製造用トシテ採掘輸出 |



| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 黒雲母 | 同 | 同 | 同 | 同 | 近來工藝品材料トシテ利用サルヽニ至レリ |
| 電氣石 | 同 | 同 | 同 | 花崗岩片麻岩ノペグマタイト脈中 | 無 |
| 柘榴石 | 石川町、野木澤村、蓬田村、川東村、山橋村、淺川町 | 同 | 接 | 接觸變質作用ヲ受ケタル石灰岩中 | 同 |
| 貴採掘石 | 野木澤村、川東村、鮫川村 | 少 | 岩 | 同 | 良質ノモノハ裝飾品トス |
| 灰礬柘榴石 | 中谷村、野木澤村 | 稍多 | 接 | 接觸變質作用ヲ受ケタル結晶片岩中 | 無 |
| 綠簾石 | 須釜村、中谷村、山白石村、山橋村、淺川町 | 少 | 同 | 同 | 同 |
| 綠泥石 | 淺川町 | 同 | 綠 | 綠洗片岩中 | 同 |
| 蛇紋石 | 淺川町、澤田村、中谷村、山橋村、大森田村 | 稍多 | 地 | 地表ニ大塊ヲナシ露出 | 一時採掘シ輸出シタリシモ目下中止 |
| 滑石 | 泉村、大森田村、淺川町、澤田村 | 少 | 片 | 片岩中ニ介在 | 無 |
| 石綿 | 泉村、小鹽江村、大森田村、淺田村 | 同 | 蛇 | 蛇紋岩中ニ介在 | 無 |
| 紅柱石 | 須釜村、大森田村、石川町 | 同 | 土 | 土壞中ニ大塊ヲナシ散在 | 現今産出甚ダ少ナシ |
| 青玉 | 大森田村、須釜村 | 極稀 | 紅 | 紅柱石中ニ存在 | 無 |
| 綠柱石 | 須釜村、野木澤村、石川町 | 最近頗々大晶石產ス | 花 | 花崗岩片麻岩ノペグマタイト脈中 | 同 |
| 方解石 | 山橋村、小鹽江村、鮫川村 | 多 | 石 | 石灰岩中 | 同 |
| 磁鐵鑛 | 小平村、中谷村、須鍼村、山橋村 | 同 | 花 | 花崗岩ノ崩壞產物トシテ土壞中ニアリ | 同 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 褐鐵鑛 | 中谷村、淺川町、小鹽江村 | 稍多 | 磁鐵鑛ノ二次的產出ナラン | 同 |
| 砂鐵鑛 | 中谷村 | 多 | 花崗岩片麻岩ノ崩壞產物 | 同 |
| 黃鐵鑛 | 淺川町 | 少 | 花崗岩中ニ存在 | 無 |
| チタン鐵鑛 | 石川町、大森田村、淺川町 | 稍多 | 花崗岩、片麻岩中ニ存在 | 同 |
| 黃銅鑛 | 須鐵村 | 少 | 接觸變質岩石中ニ存在 | 同 |
| 斑銅鑛 | 小平村 | 同 | 同 | 同 |
| 孔雀石 | 小平村 | 同 | 同 | 同 |
| 砂金 | 淺川町、野木澤村 | 稀 | 河川砂礫中ニ存在 | 同 |
| 滿俺鑛 | 蓮田村 | 少 | 土壤中ニ塊狀ヲナシテ存在 | 同 |
| 石墨 | 淺川町 | 同 | 片岩中ニ存在 | 同 |
| 亞炭 | 淺川町、小鹽江村 | 同 | 第三紀層中ニ炭層ヲナセドモ少量 | 同 |
| コルンビツド | 石川町、野木澤村 | 稍多 | 花崗岩片麻岩ノペグマタイト脈中 | タンタリウム抽出放射能性アリ |
| モナザイト | 石川町、野木澤村 | 同 | 同 | 放射性能アリソリウム抽出 |
| チタナイト | 山白石村、山橋村、淺川村 | 少 | 花崗岩、片麻岩、閃綠岩中ニ存在 | 無 |
| サマルスカイド | 石川町、野木澤村 | 稍多 | 花崗岩、片麻岩ノペグマタイト脈中時々大晶ヲ產ス | 放射性能アリ タンクステン抽出 |
| モリブデン | 石川町 | 少 | 同 | 無 |

## (二) 石英長石

阿武隈山塊は花崗岩類片麻岩類之れが基盤をなし、各所にペグマタイト脈を有し、石英長石雲母の大塊存在する。近年工業の發展に伴ひ石英長石の需要量を增し、現今盛に採掘し京阪地方に輸出す、目下採掘地として知らるゝ所は石川郡野木澤村、石川町、田村郡三春町、澤石村、安達郡白岩村、針道村、北戸澤村、伊達郡白根村地方、飯坂村地方で、就中伊達郡飯坂村の長硅石產地は、良質なるものを產するを以て需要多く販路頗廣しと云ふ。

## (三) 石灰岩

阿武隈山塊中古生層中生層には、石灰岩層が介在し、田村郡、石川郡、東白川郡、相馬郡、石城郡、等には產出個所多きも、質の良否產出量の多少交通上の關係より採掘は多くない。就中石城郡大野村八葉、田村郡瀧根村、大越村地方よりは盛に採掘され、四倉磐城セメント工場に原料として供給する。

## 本縣地質概要

『ナウマン』氏に從ひ本縣を略南北に走る地質構造線即ち阿武隈川北上川を列ぬる縱谷中央破綻線を

想定し、是れより以東阿武隈山塊を東部とし是れより以西を西部とする。西部は更に田島盆地及び會津盆地を列ぬる所謂中央裂溝谷によりて、東は奥羽山脈（脊梁山脈）に西は越後山脈に屬せしむることが出來る

## 東部地方（阿武隈山塊）

阿武隈山塊を構成する岩石は、褶曲皺襞極めて複雜で、其生成以來少なからざる動力作用を受けたることを示すも、久しく侵蝕削磨作用の結果峻拔なりし連嶺も、其尖鋭の度を減じて山嶽の相貌は漸く失せて、遂に高原性に移行した。岩層中最古のものは故小藤博士の所謂世界最古の始原統に屬するものと云はれ、下部は黑雲母花崗岩、角閃花崗岩、黑雲母角閃花崗岩的なるも、其構造上より見れば多少片麻岩的である。上部は片狀を呈し層々相重なり雲母片岩、角閃片岩、雲母角閃片岩等より片狀構造の不明なる角閃岩に移行する。尙花崗岩閃綠岩斑糲岩蛇紋岩等が既成の岩石を貫ぬき迸發するを見る。噴出岩としては古期の噴出にかゝる班岩類、瑪岩類、新期噴出にかゝる石英粗面岩、玄武岩及び玄武岩質集塊岩等脈岩狀態として噴出するを見るも、其分布區域は極めて狹小である。石灰岩は古世層中生層內に存し、其分布比較的廣し中生層は相馬中生層双葉中生層は山塊の東緣部に略南北に走つて僅かに殘存し、第三紀層は海岸地方に發達し、凝灰岩、礫岩、砂岩、凝灰砂岩、凝灰質泥板岩等より成る。其生成時代は比較的新期のものにかゝり、主として動物化石を含む。第四紀古層（洪積層）は阿武隈山塊と脊梁山脈とを分てる低地の山麓帶及海岸地方低原に發達する。就中、石川郡、西白河郡、東白川郡界社川村地方、相馬郡原町附近の荒漠たる原野は其著しきもので、砂層、礫層、粘土層、壚坶等より成る。第四紀新層（沖積層）は河床流域に或は盆地に砂礫泥土となつて發達する。信達盆地は主に第三紀層の沈降によりて、其陷沒地に土砂礫の累積したものだと云ふ。

## 西部地方

本地方は阿武隈山塊の隆起せし當時は、未だ一部を除きては、概ね淺海底深海底にありしも、其後大地の變動を來たし大皺襞を造り、新陸地を形成した。其中帶をなせる脊梁山脈の基底磐を構成せるものは、大部分第三紀層にして、往々其下部に位する花崗岩類、片麻岩類片岩類等の露出をなせる所がありて第三紀層は甚だしき造山力作用を受けて裂罅斷層を作り、火山岩を噴出し廣く分布する。

南方栃木縣界を東西に走る帝釋山脈は、花崗岩古生層其基底磐を作り、御坂層第三紀層及び安山岩石英粕面等の噴出岩之を掩ふ。西南隅には花崗岩より成る一團の山塊があり、其東方には南北に走る古生層あり、角閃岩珪板岩等より成る此等の岩層を貫きて安山岩噴出して高峰燧嶽をなす。西方新潟縣界は主として第三紀層よりなるも、既に甚だしき變動を受けて皺曲し、斷層を作り、火山岩を噴出し、之を

掩ふ所あり、北方には一ノ木村奥川村に亘りて南北に走る古生層あり、角閃岩的の岩石分布するを見る。山形縣界をなす飯豊連峰は主として花崗岩より成る。

第三紀層は、本地方を中央部東西に新潟縣に擴がつて發達する、即ち猪苗代湖地方より會津盆地の西部地方に亘りて分布し、阿賀川、大川、只見川の諸川が之を流れる。此等の地方は、概ね山岳起伏重疊し、八〇〇米九〇〇米より一〇〇〇米に達する高峰が頗る多い。岩質は主として凝灰岩凝灰質砂岩凝灰質泥板岩等の累層より主として動物化石を含む殊に金屬鑛床の胚胎することは著しき點である。

第四紀古層は、僅かに山麓帶に存するも、就中南會津郡十文字原の如きは、其著しきもので、上層は壇場の堆積より成る。新層は會津盆地田島盆地及び只見川沿岸に發達する。

## 岩石と其分布

甲變成岩　片麻岩類片岩類に分つ

一、片麻岩類

阿武隈山塊の最下部を構成してゐる。其鑛物成分の點より見れば、花崗岩綠岩的なれども其構造の點より見れば、多少片麻岩的にして片狀花崗岩花崗片麻岩と稱せられる。元來片麻岩類は、花崗岩類の動力變質作用を受け、片狀組織の發達せるものに對する總稱である。

1　黑雲母花崗岩片麻岩

黑色板狀の黑雲母黝色玻璃光澤を有する石英粗粒の長石より成る。

2　角閃花崗片麻岩

石英長石の外長柱狀の角閃石を多量に六角板狀の黑雲母を少量含む分布が最も廣い。

3　角閃黑雲母花崗岩片麻岩

石英長石の外殆ど同量位の角閃石黑雲母を含む。

4　兩雲母花崗片麻岩

石英長石の外黑雲母白雲母を含む。

二、片　岩　類

雲母片岩　角閃片岩　角閃岩（片狀構造の不明なるもの）

此等の岩石は阿武隈山塊諸所に產するも、標式的には竹貫層御齊所層である。御齊所層の下部に位するものは、結晶質にして、片狀構造著しきも上部に至るに從ひ、漸次結晶判然せざるに至り、遂に綠色緻密なる板岩に移行するに至る。其他山塊の東緣部地方及び久慈川阿武隈縱谷帶を概ね南北の方向に（東白川郡豐里村近津村安積郡日和田安達郡本宮杉田信夫郡須川上流）分布するを見るは、地殼の變動山塊相貌の過去の變化を物語る一事實である。

## 乙　火成岩

### （一）深成岩

1　花崗岩類

イ、黑雲母花崗岩（石英長石黑雲母）

ロ、角閃花崗岩　（石英長石角閃石）

ハ、角閃黑雲母花崗岩（石英長石黑雲母角閃石）

此等の岩石は阿武隈山塊諸所に產するも、双葉郡川內村伊達郡白根村地方には良質のものを產す。西部地方にては猪苗代湖東方大瀧山山塊耶麻郡飯豐山塊南會津西部只見川東方山塊伊南川上流地方に見るも多少片麻岩的である。

黑雲母花崗岩は角閃花崗岩の岩脈によりて貫通せらるゝこと數々ある事實よりして考ふれば、前者は後者よりも舊期の迸發にかゝるものと考へられる。

二『ペグマタイト』

此れより成る岩脈を構成する成分鑛物は、通常の花崗岩と大差なしと雖も、各鑛物は概ね巨大なる結晶より成る長石石英は結晶の長さ一尺以上に達することがある。石川郡石川地方及其他所々に此岩脈



見ることがある。かゝる地方は結晶鑛物標本の採集に絕好なる產地となるのみならず、又往々にして稀有の鑛物寶石等の主產地となる。石川山の如きは「ペグマタイト」岩脈地方にして、水晶、正長石白雲母、柘榴石、電氣石、綜柱石等の巨大なる美晶を出し、就中「モナズ石」「ゼノタイム」「コロンブ石」等の放射性能の鑛物が少くない。

2　石英閃綠岩

花崗岩と其成分鑛物類似し、劃然たる區別は甚だ困難である。花崗岩的閃綠岩又は閃綠岩的花崗岩等と稱することがある。花崗岩の主成分中、角閃石、斜長石が比較的增加すれば石英閃綠岩に移行する北會津郡大戸岳南會津郡折橋附近、東白川郡近津村、高城村、西部山塊、石井村豐里村東部山塊、石城郡國伽井岳、八葉入旅人、貝泊地方其他阿武隈山塊中の諸地方に露出するも、其成分鑛物の含有狀態につきての研究は未だ不充分である。

3　班糲岩

鹽基性（硅酸の量五二％以下の岩石の總稱）の岩石にして斜長石、異剝石、紫蘇輝石、橄欖石等を主成分とする。其分布區域は極めて狹く、田村郡文珠村地方東白川郡常豐村地方に產する。

4　橄欖岩

過鹽基性の岩石にして、主として橄欖石よりなる。分解すれば蛇紋石となる。山脈をなして阿武隈

山塊所々に古代の地層を貫き、多くは蛇紋石に化してゐる。石城郡大野村、東白川郡宮本村、竹貫村地方に産する。本岩は鐵分に富む。

5　蛇紋岩

橄欖石輝石角閃石の變質分解によりて生ぜしものにして、相馬郡山上村石神村石城郡大野村等に産すれども、良質のもの産出量が甚だ少い。

（二）火山岩類

1　石英斑岩

非頭晶質石基の中に石英長石の斑晶を有し石英は通常自形をなし、六角又は四角の斷面を有する。南會津郡田島町東南部（田部栗生澤より齋藤山大倉山男鹿岳等）の山塊、更に栃木縣に亘りて廣大なる地區を占めて分布する。東部地方にあつては極めて少なきも所々に之を見る。花崗岩地方に於て、其邊緣部又は其中を貫く岩脈をなして出る。鑛物成分及其構造に於て流紋岩と區別し難い。

2　珪岩類

細粒又は緻密の石基の中に斑晶を有する。斑晶は雲母角閃石、輝石、長石で往々石英を混ずる通常岩脈となり、古生代乃至新生代の地層中に之を見る。東部地方では相馬郡石神村石城郡大野村地方に産し、西部地方にては大沼郡南會津郡に亘り（瀧澤山大瀧山那須澤山山塊）田島町附近に分布する。



3　石英粗面岩

石基は玻璃質半玻璃質時に粗面狀流狀をなす。主成分鑛物は、石英、長石、黑雲母、角閃石又は輝石にして、其構造及び石理を異にする從つて、次の如き變種がある。ネバタ岩、黑曜石、瀝青岩、眞珠岩、浮石等。

石英粗面岩は、西部地方諸所に之を見るも一二の地方を除いては其の分布區域大ならず、就中、南會津郡七ツ森駒止峠一帶、安達郡高川村、玉ノ井村、岩根村地方伊達郡半田山、萬歲樂山、信達盆地周緣部等は其主なるものである。

本岩は本縣鑛床とは密接なる關係を有する。

4　黑曜石　眞珠岩は半田山地方に少量之を見る。

5　安山岩類

微晶質乃至玻璃質の非顯晶質石基中に斜長石、輝石又は角閃石の斑晶を有する。其他黑雲母、石英等を見ることありて、種々の種類に分たる。本縣産安山岩の種類及び其成分鑛物共分布につきては研究不充分なるを以て姑く日本地誌の記載地質調査所の記載によつた。本岩類は東部地方には極めて少なきも、西部地方に於ては其分布極めて廣く、本縣噴出岩の代表的のものである。

イ、輝石安山岩複輝石安山岩橄欖安山岩那須大山脈地方に最も廣く、分布す即ち磐梯山、吾妻山、安達太郎山連峰、旭火山群連峰、鎌房火山群連峰地方。

ロ、石英安山岩

南會津郡小野岳、大沼郡沼澤附近

ハ、雲母安山岩

南會津郡鳥居峠、南部山王峠附近

ニ、變朽安山岩

安積郡三森峠、諏訪峠附近

ホ、玄武岩及玄武岩集塊岩

黑色緻密比重大鐵分を多量に含む。其合分鑛物によりて種々に分たれる。

玄武岩岩塊礫が火山灰熔岩によりて團結したるものを玄武岩質集塊岩と總稱する。是等の岩石は靈山地方一帶、梁川保原東方山塊、福島市東方の山地一帶分布する。

## 三、水成岩

### 1 粘板岩



堅固良質のものを產せず。

### 2 泥板岩

粘土及び泥土の最小分子よりなる一名頁岩と稱する。普通有機物を混じ種々の色を呈す中生層及び第三紀層中に產する。

### 3 砂岩 礫岩

中生層及第三紀層中には普通之を見るも、殊に双葉中生層には最もよく發達する。

### 4 凝灰岩

火山作用によりて拋出されたる火山灰又は岩片の落下堆積して生じたるものなれども、其の成生を異にするによりて種々ある。中生層第三紀層中に發達するも、第三紀層をなすものは、其の大部分本岩より成る。殊に火山地方に多い。西部地方にありては、南會津郡大川、大沼郡河沼郡只見川、阿賀川、耶麻郡一ノ木川、信夫郡摺上川沿岸附近一帶に廣大なる地區を占めて露出する。

### 5 石灰岩

本岩は古生層中生層に發達するものが多い。東部地方にありては相馬中生層、眞野川附近、石神村山地、田村郡瀧根村、大越村、伊達郡靈山村、南會津郡南部、東白川郡竹貫村、鮫川村、石城郡大野村地方より產出する。暗色緻密白色微粒白色粗粒等のものありて一樣でない。

# 八、動植物

## 海岸植物

本縣海岸南勿來より北新地附近に海岸に沿うて旅行すれば、海濱特有の黒松矮檜の外、綠葉濶葉樹の繁茂し、常夏の感あらしめる。更に林樹下砂地には潮風の吹く所各々特異の形態を有する草花が咲き亂れて四季折々に自然の園を飾るを見る。著しき海岸植物を列記すれば（松本繁氏調査參考）

| 和名 | 科名 | 生育場所 |
|---|---|---|
| はまひるがほ | 旋花科 | 海濱砂地 |
| はまぎく | 菊科 | 松林及斷崖 |
| こはまぎく | 同 | 同 |
| はまよもぎ | 同 | 同 |
| はまにがな | 同 | 同 |
| はなます | 薔薇科 | 小名濱江名海岸には見事なる群落をなす |
| はまゑんどう | 荳科 | 海濱砂地 |
| せんだいはぎ | 同 | 樹下 |
| ひめれんりさう | 同 | 同 |
| はまひさかき | 山茶科 | 同 |
| はまにんにく | 禾本科 | 同 |
| けかものはし | 禾本科 | 海濱砂地 |
| おにしば | 同 | 海濱及樹下 |
| かうばうむぎ | 同 | 海濱砂地 |
| いはきはまだけ | 同 | 小名濱附近待有海岸植物 |
| はまばうふう | 繖形科 | 海濱砂地 |
| なみきさう | 唇形科 | 樹下 |
| はまうつぼ | 列當科 | 砂濱 |
| くろまつ | 松杉科 | 海岸地方 |
| はひでやくしん | 同 | 砂濱樹下 |
| らせいたさう | 蕁麻科 | 斷崖砂地 |
| えぞおほばこ | 車前科 | 樹下砂地 |
| はまはたざほ | 十字花科 | 同 |
| ふぢなでしこ | 石竹科 | 同 |
| はまおもと | 百合科 | 同 |
| はまぼつす | 櫻草科 | 海濱砂地 |
| うんらん | 玄參科 | 同 |
| はまあかざ | 藜科 | 同 |
| はまつな | 同 | 同 |
| ねずみもち | 木犀科 | 樹下 |
| とべら | 海桐科 | 同 |
| はまひさかき | 山茶科 | 同 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| たまつばき | 木犀科 | 樹下 | |
| しやりんばい | 薔薇科 | 海濱砂地 | |
| つるな | 蓴菜科 | 同 | |
| うらじろ | 水龍骨科 | 海岸斷崖 | |
| おにやぶそてつ | 同 | 同 | |
| こしだ | 同 | 同 | |

## 本縣河川に棲む魚族

太平洋に注ぐ河に棲む魚族と、日本海に注ぐ河に棲む魚族とは多少其種を異にするものがある。代表的河川としては阿武隈川、阿賀川の二河川がある。

一、阿武隈川に棲む魚族（角田春彦氏調査參考）

| 種名 | 方言 | 分布度 | 其他 |
|---|---|---|---|
| スナヤツメ | ヤツメ、ヤツメウナギ | 普通 | 久慈川には多 |
| マス | | 少 | 久慈川にては稀 |
| ヤマメ | ヤマベ | 同 | 產卵後黑變したる者をホツトロと稱す　上流に棲む |
| アユ | アユ | 普通 | 久慈川には近年急減 |
| サケ | サケ | 少 | 久慈川には極稀 |
| ナマズ | ナマズ | 同 | |
| ギバチ | ギンギヨ、キンパチ、ハチノウオ | 多 | 久慈川には多 |
| ドジヨウカ | ドツヨオ、ドヤマオホマドジヨオ | 普通 | 同 |
| シマドジヨウ | スナムグリ | 同 | 同 |
| ホトケドジヨウ | シミヅツコ、アブラツコ、カラスツコ | 同 | 同 |
| ゼニタナゴ | ベニタナゴ、タナゴ | 多 | 久慈川には少 |
| タナゴ | タナゴ | 稍多 | 同 |
| ニゴイ | サイ、セイ | 多 | 久慈川には稀 |
| モロコ | モロツコ | 少 | 久慈川には少 |
| カマツカ | ドオガノボオ、スナムグリ、カマヒシ | 稍多 | 久慈川には稍多近年增加す |
| ウグイ | ザコオ、ハヤ、ウグイ、幼魚、メダカ | 極多 | 久慈川には極多、產卵期にはアカハラ、アガザコオと稱す |
| アブラハヤ | ニガザコオ | 稍多 | 久慈川にはやゝ多、多くは谷川にすむ |
| コイ | コイ | 同 | 久慈川には少 |
| フナ | フナ | 多 | 久慈川には多 |
| ウナギ | ウナギ | 稍多 | 久慈川にはやゝ多 |
| カジカ | カジツカ | 少 | 久慈川には多 |
| ヨシノボリ | サラカジ | 同 | 久慈川には少 |
| ウキゴリ | ドンコ | 少 | 久慈川には少 |
| イリナ | イリナ、ユリナ | 少 | 久慈川には少　おほくは上流にすむ |

メダカ　メダカ、メザカ　少　久慈川には少

備考　阿武隈川と久慈川とは用水の關係ありて連絡す

## 二、阿賀川に棲む魚族（加藤友伊氏調査參考）

### 1　大川產魚類（阿賀川の支流）

| 種名 | 產地 | 分布度 | 其他 |
|---|---|---|---|
| サケ | 一帶 | 少 | 鹿之瀬發電所のため溯河するもの近年其數を減ぜしも以前は多 |
| マス | 同 | 稀 | 同 |
| イワナ | 上流 | 少 | 湯の上より上流 |
| ヤマメ | 上、中流 | 同 | 俗に「やまべ」と稱す　本郷邊より上流 |
| アユ | 一帶 | 多 | 發電所のため一時影を潛めたれど近來稚魚を放流するため多し |
| ナマズ | 中流 | 少 | 鶴沼川等の支流に多 |
| オイカハ | 一帶 | 同 | 鮎の放流につれて新に大川に棲む樣になりたり |
| カハムツ | 一帶 | 同 | 前種と同じ |
| フナ | 中流 | 多 | 會津盆地を貫流せる邊に多し |
| コイ | 中流 | 少 | 上流には「フナ」少 |
| メダカ | 中流（盆地） | 同 | よどみたる所に棲む　支流に多 |
| イトヨ | 中流 | 同 | 支流宮川の中流にも產す　會津地方に特有のものあり |
| ウバカジカ（方言） | 同 | 多 | 上流には少 |
| ヨシノボリ | 上流 | 少 | 上流清水に少 |
| ギバチ | 一帶 | 同 | |
| カマツカ | 同 | 多 | 中流に特に多 |
| ウグヒ | 同 | 同 | 分布度最も廣し |
| ボヤ | 上、中流 | 同 | 會津地方に特有のものなり |
| ヤツメウナギ | 中流 | 稀 | 砂の多き所に棲む |
| シマドジョオ | 同 | 同 | 鶴沼川に稀に見ることある位にて極めて稀 |
| ウナギ | 同 | 同 | |
| スナヤツメ | 同 | 少 | |
| ニゴイ | 同 | 稀 | |

### 2　只見川產魚族（阿賀川の支流）

| 種名 | 產地 | 分布度 | 其他 |
|---|---|---|---|
| サケ | | 極稀 | 大川と異なる　稀に捕獲さるを見る |
| マス | 一帶 | 少 | 上流支流には多（谷川） |
| イハナ | 同 | 同 | 同 |
| ヤマメ | 同 | 同 | 近年稚魚を放流 |
| アユ | 同 | 多 | |
| タナゴ | 同 | 少 | 稀に捕獲さるを見る |
| コイ | 中、下流 | 稀 | |
| ヨシノボリ | 上流 | 少 | |
| ウバカジカ（方言） | 中流 | 多 | |
| ギバチ | 同 | 少 | |

カマツカ　一帶　同　中流にはやゝ多
ウグイ　一帶　多　魚類中分布度廣し
シマドジョオ　中流　稀
ニゴイ　同　同

備考　調査研究は極めて難事で補足訂正すべき點が多くあらうと思ふ。

## 名稱天然紀念物

（昭和十一年二月現在）

| 名稱 | 位置 | 保存の目的 | 指定年月日 | 種別 |
|---|---|---|---|---|
| 三春瀧櫻 | 田村郡中郷村 | 學界研究資料たるのみならず古木巨木の代表的なものとして保護 | 大正十一年十月 | 國植物有 |
| 吾妻山八重白山石南自生地 | 信夫郡庭坂村 | 學界研究資料たるのみならず吾妻景觀美保護 | 大正十二年三月 | 同民有 |
| 赤井谷地沼野植物群落 | 北會津郡湊村大字芳井 | 水蘚泥炭地に生ずる珍寄植物の群落地として學界研究資料 | 昭和三年三月 | 國同有 |
| 荒井の大やまもみじ | 田村郡中妻村大字荒井 | 日通幹圍約六五メートルやまもみぢの巨樹として代表的のものなり | | 同民有 |
| 開成山櫻 | 郡山市字開成山 | 明治十年の栽植にかゝり彼岸櫻、山櫻、染井、吉野の總計三百餘株生育佳良美觀保護 | 昭和九年五月一日 | 名勝植物有 |
| 須賀川の牡丹園 | 岩瀬郡須賀川町 | 明和年間に栽培せるものありと云ふ、牡丹の古木圃として保護 | 昭和七年十月十九日 | 名勝、植物、民有 |
| 大善寺の藤 | 田村郡守山町大字大善寺 | 根元の周圍約二メートル藤の地方的巨樹として保護 | 昭和九年八月九日 | 植物國有 |
| 入水鐘乳洞 | 田村郡瀧根村大字菅谷 | 結晶質石灰岩より成れる瀧根カルストとして學界研究資料として保護 | 昭和九年十二月二十八日 | 國地質有 |
| かもしか | 吾妻、飯豐連嶺及尾瀬地方に棲息 | 本邦固有のものにして蕃殖力弱く濫獵のため漸次減少するを以て愛護す | 昭和九年五月一日 | 國動物有 |
| 平伏沼『モリアヲカヘル』蕃殖地 | 双葉郡川内村大字上川内平伏森 | 特殊の蛙にして學界研究の好資料として其蕃殖保護 | 昭和五年十月一日假指定 | 國動物有 |
| 赤津の大桂 | 安積郡赤津村字西畝 | 樹圍三十一尺四寸樹熟盛なり巨樹として代表的のものなり | 昭和六年一月廿一日、假指定 | 植民有物 |
| 中野の垂栗 | 安積郡中野村大字草倉 | 樹齡四五百年經過せるものなん枝垂の容姿柳の如く珍種として保護 | 昭和六年一月廿一日、假指定 | 同 |
| 高瀬の大欅 | 北會津郡神指村大字高瀬 | 樹圍三十六尺巨樹の代表的のものとして保護 | 昭和十年一月十一日、假指定 | 同 |
| 玉ノ井馬場櫻 | 安達郡玉ノ井村字石橋 | 樹圍二十五尺巨樹の代表的のものとして保護 | 昭和十年八月七日假指定 | 植物國有 |

## 本縣海棲魚族

（本校卒業生角田春彦氏研究）

本縣海棲魚族の調査研究について、角田春彦氏は七年間繼續研究して其調査物を余の許に送られた。氏は本縣海棲魚族につきての唯一の權威者である。氏は序言の一節に次の如く云つて居る。田中博士は太平洋沿岸では銚子、日本海沿岸では濱田を以て南北日本魚類の分區線を劃して居られるが、余の研究調査によりて此分區線を變更せざるを得なくなつた。太平洋沿岸の魚族の研究は東京帝大の三崎附近東北帝大の淺虫附近が其研究範圍で、其中間帶に屬する本縣の沿岸の研究調査は誰もやつて居なかつた。

此研究は太平津沿岸の魚族の分布區を審判する重要性を有する譯で、今迄南日本の特産とされて居たものや北日本の特産とされて居たものが本縣から産すと云ふやうな有樣であるから、從來の分布觀念を全く變更せしむることを餘儀なくさせるやうになつた。云々

| 種名 | 分布度 | 其他 |
|---|---|---|
| がいこつざめ | 稀 | 南日本産のもので本縣海に産せずと思はれたるもので分布不明 |
| どちざめ | 稍多 | 千葉縣が分布北限とされて居たもの |
| めじろざめ | 稀 | |
| おながさめ | 同 | 分布北限不明 |
| あをざめ | 稍多 | |
| ふじくじら | 同 | 三崎沖に産し知られたもので分布不明深海産で發光動物 |
| からすざめ | 稀 | 三崎沖の深海に知られたのみ、分布不明、發光動物 |
| もみじざめ | 同 | 同 |
| のこぎりざめ | 多 | |
| かすざめ | 同 | 東京附近まで知られて居たが分布不明 |
| ころざめ | 同 | 同 |
| やまとしびれえい | 稀 | 東京以南に知られたる珍種、分布不明、發電魚 |
| とびえい | 同 | 南日本産のもので北限は不明 |
| いとまきえい | 同 | 房洲以南に知られ居たるもの |
| ぎんざめ | 稀 | 純南日本産のものとして知られた珍種 |
| てんぐぎんざめ | 極稀 | 深海産のもので頗る『グロテスク』分布不明 |
| ひめ | 稀 | 純南日本産のもので珍種美麗なもの |
| えそ | 極稀 | 三崎以南にて知られ居たるもの |
| はだかいわし | 稀 | 熱帶性のもので相模の深海からまれに知られ居たるもの發光器ある深海珍魚 |
| おほくちいはし | 極稀 | 相模の海海から僅かに一匹とれたのみ頗る珍種、發光器ある深海珍魚 |
| あをめえそ | 多 | 南日本深海産の珍種當地の深海に多産するのは頗る皮肉である |
| うみへび | 稀 | |
| あかやがら | 稀 | 熱帶南日本産のものとされて居たが深海に相當棲息す |
| はまだつ | 同 | 同 |
| とおざより | 稀 | 房州が分布の北限とされて居たるもの |
| きんめだい | 同 | 三崎沖深海に知られ居たもの |
| ぐそくだい | 極稀 | 紀州以南のものとして知られ居たもの |
| ぎんめ | 稀 | 熱帶南日本に知られ居たもの |
| かいわり | 同 | 東京以南に知られて居たあじの一種頗る大なるものあり |
| いとひきあじ | 同 | 南日本熱帶産のもので千葉縣が分布北限とされてゐたもの老成期の魚として注意されてゐる |
| ひばだい | 稀 | 南日本産のもので千葉縣が分布北限とされて居たもの |
| めだい | 同 | 南日本に稀産のもの |
| てんぐだい | 同 | 東京以南に知られてゐたもので口中に卵塊を含んで育てる寄習あるもの |
| きんときだい | 少 | 東京以南にすこし産す、美麗 |
| ちかめきんとき | 稍多 | 本縣産のものは非常に大 |
| しまいさぎ | 稀 | 東京以南に知らる群棲し疲音すといふ |
| いすずみ | 少 | 南日本から熱帶に知られ居るもの |

| | | |
|---|---|---|
| てぐんだい | 稀 | 三崎以南に知られ居るもの |
| つぼだい | 少 | 南日本の珍種に屬すもの |
| ひめじ | 同 | 美麗 |
| みぎまき | 稀 | 東京以南の美麗なる珍種に屬す |
| あまだい | 少 | 北日本には產せずとされてゐたもの |
| すみつきあかだい | 稍多 | 南日本の深海產、鮮紅色美しい |
| かんだい | 少 | 南日本にすこし產するもの（べら） |
| ひしだい | 同 | 南日本からハツイに知られ居たもので北日本には知られざりしもの |
| かじかきだい | 稀 | 最近捕獲された珍種 |
| つのだい | 極稀 | 紀州以南に稀に見る頗る稀なる珍種 |
| うみすずめ | 少 | 熱帶性、南日本產のもの |
| いとまきふぐ | 同 | |
| かなふぐ | 同 | |
| さばふぐ | 同 | |
| しよおさいふぐ | 多 | 南日本のものとされてゐた、何人も食はざりも最近は賣買してゐる |
| いしがきふぐ | 少 | 熱帶南日本のもので三崎以南に知られ居たもの |
| もよ | 同 | 東京以南に知られ居るもの |
| ふさかさご | 同 | |
| おにかさご | 同 | |
| さつまかさご | 同 | |
| みのかさご | 稀 | |



| | | |
|---|---|---|
| おにおこせ | 少 | |
| いねごち | 同 | |
| はりごち | 稀 | |
| きほおばお | 少 | |
| ひげきほおばお | 同 | |
| がんぞおびらめ | 同 | |
| ほしがれい | 同 | |
| あごはぜ | 多 | 溫度、食物、等四圍の色によりて變色す、目下飼育變色狀態研究中 |
| あはたち | 少 | |
| ふさあんから | 同 | |
| あかぐつ | 同 | 熱帶性の深海魚 |
| ふうりゆううお | 極稀 | 同 |
| ハリモチラス、ウラドの一種 | 極稀 | 土佐浦戸にすこし產す、一九三四年高知高校教授が新種として發表せり、當時余の採集せし標本は田中博士の藥に送り置きたりしも十名濱沿海よりも浦戸の方に多いとのことにて、かく命名された、頗る珍稀な形態の深海魚 |
| はげむつ | 稀 | 珍品のもので分布不明何れも深海魚 |
| ばらむつ | 同 | 同 |
| ひうちだい | 同 | 同 |
| かなむぐら | 同 | 同 |

以上は南日本產の魚類として本縣沿海には棲息し居らざるものと思はれゐたもので其著しきものを掲げたり

| | | |
|---|---|---|
| にしん | 稍多 | 由來北海以北のものとして居りしも幼魚の十糎内外のものは多く見らる當地では『セクロイワシ』と稱してゐる。分布上頗る面白いことである。 |
| もかじか | 少 | 北海道に多い、北日本の標準魚 |
| おにしやちうお | 稀 | 北海道方面にのみ知られ居たもの、雌雄異型 |
| わかまつ | 同 | 北海道方面にのみ知られ居たもの、雌雄異型 |

以上は北日本の北方産のもので本縣沿海には棲息せずと思はれたもの

## 本縣産海藻類

（角田春彦氏發表）

其の種類は可なり多いが其中最も著しいもの珍稀のものだけを記す

| 種名 | 分布度 | 其他 |
|---|---|---|
| ちしまくろのり | 珍現象のため生育 | 昭和九年五月一日故岡村博士か小名濱磯にて發見されたものである、千島に知られて居たものだが當年の海流の變調で當磯に繁茂したもので、形態は桑の葉位のもので一葉に雌雄器を半分づゝつけ色まで異なつた頗る珍奇のものである |
| ひぢりめん | 多 | 我國海生の一屬一種のもので、世界では此屬のものは希望岬から知られたものであると云ふ、學界珍稀の種で當地では『ばばあのこしまき』と云つて居る、緋の縮緬そつくりである。長五十糎幅十糎位ある。故岡本博士は調査に來られて其繁殖狀態を研究されてチリメニア、ババアノコシマキと命名された。 |
| べんてんも | 同 | 江の島辨天射近にて遺藤博士が發見したもので必ず『こめのり』に着生し大さ粟粒位のもの、當地は此限だらうと云はれてゐる |
| かばのり | 稍多 | 以上二種は房州までしか學界に知られて居らぬ、恐らく當海岸が北限ならん |
| とさかのり | 多 | 北日本のもので當海岸が南限 |
| うかのもく | 少 | 南日本のもので當海岸が北限 |
| うみうちは | 少 | 北日本産のもので當海岸が南限、多量の硫酸化合物を含有して他動植物を殺す、當地では『わかめごろし』と云つてゐる。海中ではうるし色で空氣中に置けば綠黃色に變色して惡臭を放ち、他の海藻と一所に置けば皆べと〳〵にする |
| うるしぐさ | 多 | 南日本のもので九州南部の沿岸に生育するもの、當地は北限に近きものならん、有名な蛔虫驅除劑である |
| かいにんさう | 少 | |

## 高山植物

本縣西部地方には二〇〇〇米前後の高峰頗る多く何れも高山植物に富む、即ち尾瀨地方、駒ケ岳、帝釋山脈連嶺、飯豐連嶺、磐梯山、安達太良山、吾妻連嶺等は其の著しいものである。就中尾瀨地方、帝釋山脈連嶺、飯豐連嶺に至つては其の種の多きと珍稀の種に富むと其の量に於て東北屈指のものに屬する。近來濫採するため、年々其の數を減じ、中には絶滅に近きものがある。依つて何れの高山に於ても其の採集を嚴禁するに至つた。

### 尾瀨地方植物分布概要

（星大吉氏調査參考）

| 科名 | 種名 | 生育地帶 |
|---|---|---|
| 菊科 | シブツウスユキサウ、ミツバサハヒヨドリ、ミヤマアヅマギク、ミヅギク、ヒトツバヨモギ、ウサギギク、トネアザミ、ナンブタカネアザミ、ヲゼヌマアザミ、チヨウカイアザミ、シロバナニガナ、ミヤマカウゾリナ等 | 至佛山、下田代、尾瀨平、燕ケ岳、燒山峠、濕原 |

桔梗科　ツリガネニンジン、ツバナ、ヒメシャジン、オホツリガネニンジン
ミヤマシヤジン、ホソバシヤジン、ツルニンジン等　至佛山、尾瀬平、林地、尾瀬湖畔
敗醤科　キンレイクリ　山地
連輪草科　レンブクサウ　三條瀧附近
忍冬科　キシノニハトコ、ケニハトコ、ミヤマシゲレ、カンボク、ヤブデマリ、アラゲヘウタンボク等　尾瀬平、山地、三條瀧附近
茜草科　ツルアリドウシ、クルマバサウ、ヨツバムグラ、ホソバノヨツバムグラ、オホバヨツバムグラ　林地、濕原
狸藻科　タヌキモ、ヒメタヌキモ、ムラサキミ、カキグサ　濕原、尾瀬
列當科　キムラタケ　燧ケ岳（寄生植物）
玄參科　クガイサウ、テンゲクハガタ、ヒメクハガタ、ミヤママ、コナ、エゾシホガマ、ミヤマコゴメグサ、タカネシホガマ、ハンカイシホガマ、オニシホガマ、ヨツバシホガマ、ミヤマシホガマ　至佛山、三條瀧附近
茄科　マルバノホロシ　尾瀬平
形科　ヒメナミキ、タニジヤコウサウ、アキノタムラサウ、ヒメシロネ、イブキジヤコウサウ、テンニンサウ、ミヅトラノヲ　尾瀬湖畔
紫草科　エゾムラサキ、タチカメバサウ　三平峠、尾瀬平
〃　カモメヅル、シロバナノカモメヅル、オホカモメヅル、オホバノカモメヅル　尾瀬平、撫平
龍膽科　ツルリンダウ、ホソバツルリンダウ、オヤマリンダウ、ミヅガシハエゾリンダウ、トウヤクリンダウ、ミヤマリンダウ、タテヤマリンダウ、イハイテフ　沼山峠、濕原、燧岳、撫平、至佛山、林地
木犀科　コバノトネリコ、ヤチダモ、シヲジ、マルバトネリコ、オクノイボタ　濕原、各地
櫟草科　オホサクラサウ、ユキワリコザクラ、ユキワリサウ、クサレダマ、コナスビ、ツマトリサウ、コツマトリサウ　至佛山、濕原、路傍、尾瀬平



岩梅科　イハウメ、ヒメイハカガミ、コイハカガミ
石南科　ミヤマツヽジ、フチベニシヤクナゲ、ウスギシヤクナゲ、オホコメツヽジ、オホバツツジ、ムラサキヤシホツツジ、ウラジロレンゲツツジ、レンゲツツジ、ヤウラクツツジ、ツリガネツツジ、ウラジロヤウラク、ミネズワウ、ツガザクラ、ベニドウダン、サラサドウダン、イハヒゲ、コメバツガザクラ、ハナヒリノキ、ウラジロハナヒリ、ヒメシヤクナゲ、イハナシ、アカモノ、シラタマノキ、ハリガネカヅラ、ツルコケモモ、コケモモ、ヒメツルコケモモ、クロウスゴ、クロマメノキ、オホバスノキ、エゾノクロウスゴ　至佛山、燧ケ岳
鹿蹄草科　コイチヤクサウ、ジンエフイチヤクサウ、ギンリヤウサウ、シヤクジヤウサウ　三條、燒山、林地、山地
山茱萸科　ゴゼンタチバナ、クマノミヅキ　路傍各地
繖形科　ヤブジラミ、オホカサモチ、ハクサンサイコ、イハセントウサウ、カラフトドクゼリ、イブキゼリ、ミヤマセントウサウ、エゾボウウシラネニンジン、ミヤマウイキヨウ、タンガハセンキウ、ノダケ　沼山峠、尾瀬平、林地
五加科　ハリブキ、コシアブラ、ミヤマウド、トチバニンジン　上大堀、中大堀
杉菜藻科　スギナモ　尾瀬沼
蟻塔科　フサモ、ホザキノフサモ、タチモ　尾瀬平、河邊
柳葉菜科　シロウマアカバナ、ケゴンアカバナ、ナガバアカバナ、ヤナギラン、ヤナギアカバナ　湖畔
千屈菜科　ミヅスギナ　山ノ鼻、尾瀬平、湖畔
菫菜科　ミヤマスミレ、オホタチツボスミレ、ヤチスミレ、ウスバサイシン、シロバナノスミレサイシン、ミヤマツボスミレ、キバナノコマツメオホバキスミレ　至佛山、燧ケ岳
金絲桃科　マルバオトギリ、オクヤマオトギリ、コオトギリ、ヒメオトギリ、ダイガクオトギリ、エゾオトギリ、トモエサウ　湖畔、尾瀬平

猕猴桃科　ミヤママタタビ　六八
因麻科　オホバシナノキ、コバノシナノキ　尾瀬平
葡萄科　ブダウ、サンカクヅル　同
息季科　クマヤナギ、クロウメモドキ、シナノクロウメモドキ　同
七葉樹科　トチノキ　尾瀬平河岸
槭樹科　ハウチハカイデ、コハウチハカイデ、コミネカイデ、ミネカイデ、アサノハカイデ、ラガラバナ、テツカイデ、ウリハダカイデ、イタヤカイデ　クロビイタヤ　各地
山地、燈岳、各地、沼尻岸
衛矛科　コマユミ、ツリバナ、ヒロハツリバナ、ニツクワウマユミ　山地、林地、沼尻
冬青科　イヌツゲ、ツルツゲ、アカツゲ　濕原、林地、各地
岩高蘭科　ガンカウラン　至佛山、燈ケ岳
大戟科　エゾユズリハ、ハクサンダイゲキ　各地、至佛山
藝香科　キハダ、ハヒシキミ　各山地
酢醬草科　ベニバナミヤマカタバミ、ミヤマカタバミ、オホヤマカタバミ　尾瀬平、森林
牻牛兒科　ハクサンフウロ　尾瀬平
荳科　イヌエンジュ　山地
薔薇科　イハシモツケ、タカネナナカマド、ウラジロナナカマド、サビバナナナカマド、ミヤマナナカマド、ミヤマフユイチゴ、マルバフユイチゴ、ゴエフイチゴ、ミヤマウラジロイチゴ、クロバナロウゲ、ハキンバイ、ミヤマキンバイ、ヲヘビイチゴ、キンロウバイ、オホダイコンサウ、チングルマ、ナツユキサウ、オニシモツケ、タウチサウ、アカバナワレモカウ、タカネノイバナ、オホダカネバラ、ヲゼヤマザクラ、ミネザクラ、チシマザクラ　至佛山
金縷梅科　マルバマンサク　溪谷、各地、濕原、至佛山
燈ケ岳、尾瀬平
虎耳草科　ヤグルマサウ、アラシグサ、タカネダイモンジサウ、ダイモンジサウ、クロクモサウ、エゾクロクモサウ、ケダイモンジサウ、ヅタヤクシユ、コチヤルメルサウ、ツルネコノメサウ、マルバネコノメサウ、ウメバチサウ、ヒメウメバチサウ、ノリウツギ、ゴトウツル、コマガダケスグリ　濕原、瀬尾平
茅膏菜科　モウセンゴケ、ナガバモウセンゴケ　濕原、溪谷、至佛山
十字花草　オホタネツケバナ、デハノタネツケバナ、タデノウミコンロンサウ、ハナハタザホ、フダハタザホ、ハクセンナヅナ　燈ケ岳
罌粟科　コマクサ、エゾエンゴサク、シラケエンゴサク　至佛山、山ノ鼻
木蘭科　タムシバ　至佛山
小蘗科　トガクシショウマ、サンカエウ、シロバナイカリサウ、ヒロハノイ　沼山峠、尾瀬平、路傍
ピノボラズ　至佛山
毛茛科　シラネフフヒ、リウキンクワ、エンユウサウ、シナノキンバイ、ワウレンミツバワウレン、ヤマトリカブト、オホレイジンサウ、ハクサンイチゲ、サンリンサウ、トリガタハンシヤウヅル、ミヤマキンバイ、ウメバチモ、イトキンバウゲ、カラマツサウ、モミヂカラマツ、ルイエウボタン　至佛山、濕原、林地、沼尻山ノ鼻、河岸、湖畔、尾瀬平
桂科　ウチハカツラ　尾瀬平
睡蓮科　ジユンサイ、ネムロカハホネ、ヒウジグサ　湖中、沼津
石竹科　サハハコベ、オホヤマハコベ、タカネミミナグサ、ミミナグサ、ホソバツメクサ、コバノツメクサ、タカネツメクサ、カトウハコベ、センジユカンビ、タカネナデシコ　至佛山、尾瀬平
蓼科　タカネスイバ、オホミヅソバ、イブキトラヲ　山鼻、濕原
馬兜鈴科　ウスバサイシン、フタバアフヒ　尾瀬平
蕁麻科　ムカゴイラクサ、トキホコリ、ウハバミサウ　山ノ鼻、尾瀬平
桑科　ヤマグハ　平滑附近

| | | |
|---|---|---|
| 楡科 | ハルニレ、オヒヨウ | |
| 穀斗科 | ブナノキ、ホホバブナ、ミヤマコナラ | |
| 樺木科 | クマシデ、ナガバノシラカンバ、オホクマシデ、ツノハシバミ、シラカンバ、タンカクハシバミ、ダケカンバ、ウラジロカンバ、サイハダカンバ、ヤマハンノキ、ヤハズハンノキ、オヤマハンノキ、ミヤマハンノキ | |
| 楊柳科 | ヨノヘヤナギ、トカチヤナギ | |
| 蘭科 | ハクサンチドリ、ヨノヘラン、コバノトンボサウ、オホバノトンボサウ、オホヤマサギサウ、キソチドリ、ミヅチドリ、マトキサウ、ヲゼノサハトンボ、サハラン、カキラン、トキサウ、ヤラ、ネヂバナ、ミヤマフタバラン、コフタバラン、オニノヤガ、アリドウシラン、シヨウキラン、ホザキノイチエウラン、ツリシユスラン、ジガバチサウ、サイハイラン、ヒトハラン、コイチエフラン | |
| 鳶尾科 | カキツバタ、ヒアフギアヤメ、ヒアフギアヤメ | |
| 百合科 | イハシヨウブ、キンコウクワ、シヤウジヨウバカマ、エゾノシヤウジヨウバカマ、ヲヤギサウ、カヲヤギサウ、ノギラン、ネバリノギラン、コロサウ、タカネアヲヤギサウ、ガホトトギス、ミヅギボウシ、ギヤウイサウ、タカネアク、クルマユリ、オホウバユリ、シヤクジヤウ、ジヤウニンニク、ヒロハユキザサ、ヒメユキザサ、マヒヅルサウ、ハウチヤクサウ、ヤマナシマラン、タケシマラン、アマドコロ、ナルコユリ、ワニグチサウ、ツクバネサウ、キネガササウ、タチシンレイサウ、クルマバツクバネサウ、オホバノエンレイサウ、シロバナエンレイサウ、オホバノエンレイサウ、タチシンレイサウ | |
| 燈心草科 | ヒメキヒラ、カウガイゼキシヨウ、ヒメキヒラ、カウガイゼキシヨウ、ミヤマホリカウガイゼキシヨウ、ミクリゼキシヨウ、ミヤマスズメノヒエ、ナビゼキシヨウ、ミクリゼキシヨウ、ハ | |
| 穀精草科 | クロバナホシクサ、イトヒヌノヒゲ | |
| 天南星科 | ミヅバセウ、ザゼンサウ | |



| | | |
|---|---|---|
| 莎草科 | タカネクロスゲ、フトキ、シカクキ、コマツアカスゲ、クサスゲ、ミカヅキグサ、イヌノハナヒゲ、クロカハズスゲ、ヒラキモスゲ、シヨウジヤウスゲ、アラスゲ、コオニカンスゲ、ナキリスゲ、ヒメカハズスゲ、ハクサンスゲ、ニクワウハリスゲ、ヒメカンスゲ、ホソバナルコスゲ、ミヤマカンスゲ、ムジナスゲ、ヤチスゲ、ミタケスゲ、ユズスゲ、カホカサスゲ、ミノボロスゲ、ミヤマシラスゲ、コジトガリスゲ、ヒメシラスゲ、ミヤマシラスゲ、ハリスゲ、スゲ、ゴンスゲ、タヌキラン、ガウソ、ハリガネスゲ、ハズスゲ、ミヤマナルコスゲ、タカネハリスゲ、ハズスゲ、ミヤマイヌノハナヒゲ、ヤチカハリスゲ、コメススキ、ヤチクグ、ヒロハノヒメスゲ、ヒゴクサ、ヒロハノカスゲ、ヲゼヌマスゲ、ヲゼヌマスゲ、オホヤハズスゲ、ヒロウドスゲ、ジユズスゲ、ミヤマジユズスゲ、オニナルコスゲ、ビ | 至仙山、湯原、温泉地、燈ケ岳、湖畔、赤田代、平滑附近路傍 |
| 禾本科 | ススキ、ミヤマアブラススキ、タカネカウボウ、イブキヌカボ、コアハガヘリ、カニツリノガリヤス、ミヤマノカリヤス、ヤマヌカボ、タカネヌカボ、ヌマガヤ、ヒロハノドジヨウツナギ、ミヤマイチゴツナギ、チシマイチゴツナギ、トボシガラ、オホトボシガラ、ウシノケグサ、チシマザサ、ネマガリダケ、ヲゼザサ、ヲタフクザサ、デハノヒロハザサ、ハヤチネザサ | 至佛山、局瀬平、赤田代、山ノ鼻、湯原 |
| 芝草科 | ホソバノシバナ、エゾセキショウ | 赤田代、湯原 |
| 眼子菜科 | ヲヒルムシロ、ササバモ | 湖中 |
| 黒三稜科 | ヒメミクリ、チシマミクリ | 同 |
| 松杉科 | カラマツ、ヒメコマツ、ハヒマツ、タウヒ、コメツガ、オホシラビソ、シラビソ、ミヤマビヤクレン、ネヅミヤマネヅ、ハヒネヅ | 至佛、森林内、尾瀬平、燈ケ岳 |
| 一位科 | イチヰ | 森林内 |
| 水韮科 | ヒメミヅニラ | 池中 |
| 卷柏科 | コケスギラン | 至佛山 |

| 科名 | 種名 | 生育地帶 |
|---|---|---|
| 石松科 | タカネヒカゲノカツラ、アスヒカヅラ、ヤススギラン、ヒメスギラン、マンネンスギ、タウゲシバ、ホソバノタウゲシバ、ウチハマンネンスギ | 尾瀬平、沼山峠、湿原、林地 |
| 木賊科 | トクサ、ミズスギナ、ミヅドクサ、イヌドクサ、イヌスギナ | 各地、湖畔、河畔 |
| 瓶爾小草科 | エゾフユノハナワラビ | 牛首附近 |
| 薇科 | ゼンマイ | 各地 |
| 水龍骨科 | ミヤマノキシノブ、ミヤマシダ、ミヤマシシガラシ、ナニダイシダ、ハリガネシダ、ヤマイヌワラビ、ウサギシダ、ミヤマクマワラビ、ツラネワラビ、ミヤマベニシダ、アラミヤマワラビ | 各地 |
| 苦苣科 | コケシノブ | 各地 |
| 桔梗科 | キキヤウ、タニギキヤウ、ソバナ、ミヤマシヤジン、ツリガネニンジン | 各地 |
| 山蘿蔔科 | タカネマツムシサウ | 東大嶺、四吾妻附近 |
| 敗醤科 | オミナヘシ、カノコサウ、ヲトコヘシ、ツルカノコサク | 山麓各地ニ多シ |
| 忍冬科 | ヌホデマリ、ガマズミ、コバノガマズミ、ウコンウツギ、ウグヒスカグラ、キンギンボク、ヤブデマリ、ムシカリ、タニウツギ、ツクバネウツギ、ニハトコ | 山麓各地ニ多シ |



| 科名 | 種名 | 生育地帶 |
|---|---|---|
| 菊科 | ハンゴンサウ、チヤジギク、カニカウモリ、ヒツトバヨモ、オヤマアザミ、アキノキリンサウ、カハラハハコ、カセンサウ、ウサギギク、ミヤマウスユキサウ、カシハハグマ、ヤマタモギ、ヒヨドリバナ、ヤマヒヨドリバナ、オヤリハグマ、ヒメアザミ、ヤマニガク、ヤママボクチ、イヌヨモギ、シラヤマギク、タウヒレン、ミヅギハハコ等 | 各地ウサギギク、ミヅギク、ミヤマウス、ユキサウ等ハ谷地平附近山頂ニ多シ |
| 桔梗科 | キキヤウ、タニギキヤウ、ソバナ、ミヤマシヤジン、ツリガネニンジン | 各地 |
| 山蘿蔔科 | タカネマツムシサウ | 東大嶺、四吾妻附近 |
| 敗醤科 | オミナヘシ、カノコサウ、ヲトコヘシ、ツルカノコサク | 山麓各地ニ多シ |
| 忍冬科 | ヌホデマリ、ガマズミ、コバノガマズミ、ウコンウツギ、ウグヒスカグラ、キンギンボク、ヤブデマリ、ムシカリ、タニウツギ、ツクバネウツギ、ニハトコ | 山麓各地ニ多シ |
| 酒草科 | カホバヨツバムジラ、ツルアリドウシ、クルマバサク | 山麓各地 |
| 蓼科 | ハヘドクサウ | 山麓各地 |
| 狸藻科 | ムシトリスミレ | 大倉川、中津川、岩壁三階滝附近 |
| 苦苣科 | イハタバコ | 同前 |
| 列當科 | ナンバンギセル | 山麓各地、ススキ群落地 |
| 玄參科 | クガイサウ、ハンカイアザミ、オホバミヅホホヅキ、エゾシホガマ、クハガタサウ、ミヤママコナ、ママコナ、コシホガマ | 深山溪谷、谷地平 |
| 唇形科 | ラシヨウモンカツラ、テンニンゲサ、ウツボグサ、コトジサウ、ナキナタコウジユ、アキノタムラサウ、イブキジヤコウサウ、ヒキオコシカハミドリ、コシロネ、ヒメジソ、ヤマジソ、イヌカウジユ、キセワタ、シモバシラ | 山麓各地「イブキジヤコウサウ」ハ山頂ニオホシ |
| 馬鞭草科 | カリガネサウ、クサギ、ムラサキシキブ | 山麓各地 |
| 紫草科 | ハナイバナ、ムラサキ、ホタルカヅラ | 同 |
| 花科 | ネナシカヅラ | 同 |
| 羅摩科 | カガイモ、スズサイコ、フナバラサウ、カモメヅル、イケマ | 同 |
| 龍膽科 | ツルリンダウ、ミヤマリンダウ、イハイテフ、オヤマリンダウ、リンダウ、コケリンダウ、ヒデリンダウ、センブリ、アケボノサウ、ハナイカリ | ミヤマリンダウ、イハイテフ、オヤマリンダウ、ハ山頂ノ方ニオホシ |
| 馬錢科 | フデウツギ | 溪谷水邊 |
| 木犀科 | イボタノキ | 山麓各地 |
| 安息香科 | エゴノキ、ハクウンボク | 山麓各地林中 |
| 櫻草科 | オカトラノヲ、クサレダマ、ツマトリサウ、サハトラノヲ、ヌマトラノヲ、ヒナザクラ | 山麓各地「ヒナザクラ」西吾妻山ニ多シ |

紫金牛科　ヤブコウジ　山麓林中

岩梅科　イハカガミ、シロバナイハカガミ、イハウチハ　山頂附近ニオホシ「シロバナイハカガミ」ハ少ナシ

石南科　ヤイシヤクナゲ、シヤクナゲ、ハクサンシヤクナゲ、ホツツジ、ヒメシヤクナゲ、ウラジロエフラク、コケモモ、アヲノツガザクラ、ミネズワウ、アカモノ、ツルコケモモ、シロモノ、アクシバ、ハナヒリノキ、オホコメツツジ、コメツツジ、アブラツツジ、ドウダン、サラサドウダン、イハナシ、バイクワツツジ、ヤマツツジ、レンゲツツジ、ミツバツツジ、イソツツジ、ネジキ、ナツハゼ、クロマメノキ、ハリガネカヅラ、コヤウラクツツジ、ツリガネツツジ、コメバツガザクラ、アセビ、ウスノキ、アケヤシホイチヤクサウ、ウメガササク　高湯、ヌル湯附近ヨリ上方ニ多シ、「ヤイシヤクナゲ」ハ天然紀念物トシテ指定

鹿蹄草科　リヤウブ　林中高湯ヌル湯附近

合法科　ゴゼンタチバナ、ミヅキ、アヲキ　『ゴゼンタチバナ』ハ上方ニ各地

山茱萸科　ノチドメ、シラネニンジン、アシタバ、シシウド、ノダケ、ハナウド、ダケゼリ　山麓林中

繖形科　コシアブラ、チクセツニンジン、ハリギリ、ウド、タラノキ、キヅヌ、ハリブキ　湿地、谷地平附近

柳葉菜科　ヤナギラン、イハアカバナ、アカバナ、タニタデ、ミヅタマサウ　山麓濕地

千屈菜科　ミソハギ　山麓ニ近キ方ニ多シ

胡頹子科　アキグミ　山麓

旌節花科　キフヂ　「キバナノコマノツメ」ハ高所ノ草原帶ニ多シ

薑々菜科　スミレ、コマノツメ、キバナノコマノツメ、ツボスミレ、タチツボスミレ、スミレサイシン、エゾスミレ、オホバタチツボスミレ　各地

金絲桃科　オトギリサウ、トモホサウ、ミヤマオトギリサウ、ヒメオトギリサウ、コケオトギリサウ



獼猴桃科　マタタビ　山麓雜林

田麻科　シナノキ　ヌル湯附近

葡萄科　エビヅル、ギヨウジヤノミヅ、ヤマブダウ、ツタ、ノブダウ　山麓各地

鼠季科　クマヤナギ、クロウメモドキ　「クロウメモドギ」ハ上方ニ多シ

鳳仙花科　キツリフネサウ、ツリフネサウ　山麓濕地

七葉樹科　トチノキ　深山溪谷林中

槭樹科　ウリハダカヘデ、イタヤカイデ、クロビイタヤ、ミネカヘデ、ハウチハカヘデ、コハウチハカヘデ、テツカヘデ、ヲガラバナ、コミネカヘデ、ヒトツバカヘデ、カラコギカヘデ　林中

省沽油科　ミツバウツギ　山麓雜林中

衛矛科　マユミ、コマユミ、ニシキギ、ツリバナ、ツルウメモドキ　同

冬青科　イヌツゲ、ツルツゲ、ヒメモチ、クロソヨゴ、ソヨゴ　高湯、ヌル湯附近林中

漆樹科　ウルシ、ツタウルシ、ヤマウルシ、ヌルデ　山麓雜林中

毒空木科　ドクウツギ　山麓

岩高蘭科　ガンカウラン　山頂附近各地

大戟科　タカトウダイ　山麓

遠志科　ヒメハギ　山麓乾地

藝香科　サンセウ、イヌサンセウ、キハダ　山麓雜林中

牻牛兒科　フウロサウ、ゲンナイフウロ　山麓、中腹、草原

荳科　ヌスビトハギ、イハハウギ、ハギ、クサフヂ、フヂ、ヨツバハギ、ナンテンハギ、クヅ、ヤブマメ、ネムノキ　山麓ニ多シ

薔薇科　ナツユキサウ、マルバシモツケ、ウハミヅザクラ、ワレモカウ、カハラサイコ、コゴメウツギ、チンゲルマ、キジムシロ、ウラジロノキ、ベニバナイチゴ、ナンキンナナカマド、イハキンバイ

金縷梅科　マンサク

虎耳草科　ダイモンジサウ、ノリウツギ、サハアヂサヰ、イハガラミ、ネコノメサウ、ヤグルマサウ、ウメバチサウ、ヅタヤクシユ、トリアシシヨウマ、ギンバイサウ、タマアヂサイ、チヤルメルサウ、チダケサシ、クサアヂサヰ、ヤシヤビシヤク

景天科　キリンサウ、ヤマキリンサウ

茅膏菜科　マウセンゴケ

十字花科　ツルタガラシ、コンロンサウ、ジヤニンジン、タデウミコンロンサウ、ハタザホ、ヤマハタザホ

蜀葵科　キケマン、ムラサキケマン、ヤマキケマン、タケンゲサ

樟科　クロモジ、アブラチヤン

木蘭科　コブシ、ホホノキ

防巳科　カウモリカヅラ、ハスノハカヅラ、アヲツヅラフヂ

小蘗科　サンカエフ

木通科　アケビ、ミツバアケビ

毛茛科　モミヂカラマツ、トリカブト、レイジンサウ、クサボタン、ボタンヅル、ミツバワウレン、ワウレン、ゴクワエウワウレン、センニンサウ、カラマツサウ、ハンショウヅル、コキツネノボタン、キンバイサウ、キンバウゲ

桂科　カツラ

石竹科　ミヤマハコベ、カハラナデシコ、フシグロセンヲウ

七六

山麓、山頂

林中

雜林、渓谷、草原

岩上

濕原

山麓

同

林中

同

各地

中腹、陰地

山麓、各地

山麓、中腹附近

森林中

山麓

藝科　メイゲツサウ、タニソバ、イタドリ、オホイタドリ

馬兜鈴科　ウマノスズクサ、サイシン

栁寄生科　ヤドリギ

檀香科　ウクバネ、カナビキサウ

蕁麻科　イラクサ、ムカゴイラクサ、アカソ、ヤブマヲ、メヤブマラ、ウハバミサウ

殼斗科　ブナノキ、オホナラ、コナラ、クリ、クヌギ

樺木科　ヤマハンノキ、ミヤマハンノキ、クマシデ、シラカバ、ダケカンバ、アカシデ、イヌシデ、サハシバ、ヤシヤブシ、ツノハシバミ

楊柳科　ヤマネコヤナギ

蘭科　タカネフタバラン、ミヤマフタバラン、コイチエフラン、コバノトンボサウ、フタバラン、ジンバイサウ、オホヤマサギサウ、アヲクモキリサウ、キソチドリ、ギンラン、キンラン、ヤマトキサウ、スズラン、ハクサンチドリ、タカネサギサウ、ノビネチドリ

蓼科　ウチハドコロ、オニドコロ、ヤマノイモ

百合科　キンコウクワ、ネジバナ、クルマユリ、ヤマユリ、ヒメユリ、ミヅギバウシ、イハシヤウブ、チヤボゼキショウ、キバナノホトトギス、ホトトギス、ノギラン、ツクバネサウ、タケシマラン、キヌガササウ、アヲヤギサウ、ヒメヤブラン、ヤブラン、コバイケイサウ、ギヤウジヤニンニク、マヘヅルサウ、ウバユリ

蜡心草科　カウガイセキショウ、タチカウガイゼキショウ

天南星科　テンナンシヤウ、ウラシマサウ、マムシグサ、ミヅバセウ

莎草科　アブラガヤ、ヌマハリヰ、カサスゲ、タヌキラン

山麓、山頂

山麓

中腹林中

山麓

渓谷、濕地

山麓、中腹、森林中

森林中

水濕地

山頂、濕原、山麓

山麓

各地

濕地

陰地、濕地

沼中、濕原

七七

| | | |
|---|---|---|
| 禾本科 | ミヤマヌカボ、ヤマカモジグサ、ムツノガリヤス、ススキ、ムラサキススキ、コメガヤ、ハネガヤ、アブラススキ、クサヨシ、トダシバ、クマザサ、ミヤコザサ、ネマガリダケ | 山麓、中腹、林中 |
| 松杉科 | ゴエウマツ、アヲモリトドマツ、コメツガ、ハヒマツ、ヒノキ、アスナロ、ソナレ | 中腹以上、森林中、高原 |
| 卷柏科 | クラマゴケ | 山麓、陰地 |
| 石松科 | タウゲシバ、マンネンスギ、ヒカゲノカツラ、アスヒカゲラ | 山麓、中腹 |
| 蘚科 | ビンマイ | 渓谷、濕地 |
| 水龍骨科 | クマワラビ、クジヤクシダ、シシガシラ、イヌワラビ、クモノスシダ、タカネシダ、ミヤマウラボシ、ノキシノブ、ホテイシダ、イハオモダカ、ジフモンジシダ、イヌカンソク、クサソテツ | 山麓、中腹、林中 |
| 地衣類 | サルヲガセ、キノリ、ヨロヒゴケ、カブトゴケ、エイランタイ、コバノエイランタイ、ハナゴケ、ウメノキゴケ | 樹皮上、高原 |

備考　此目錄は吾妻山をなす際に目につく普通のものを記載したもので吾妻山の全植物をつくしたものにあらず唯便覽として記したのみである。

## 九、産業の概觀

本縣の生産總額は年一億八千萬圓内外で、東北地方に於いては、その首位を占め、特に製造工業は年六千五百萬圓を超え、他の五縣に優り農業生産額に略伯仲する趨勢を有してゐる。

東北地方が一般に農業的色彩が濃厚なのに反して、本縣が製造工業に秀でゝゐるのは天然資源の豐富なことゝ水力發電に有利に、且石炭の産出の多い關係で、工場組織に於いても漸次大工業に進展してゐる。

(1) 本縣の生産總額（昭和十年度福島縣々勢要覽に依る）

農産八三六〇萬圓　工産六四九〇萬圓　畜産四一一萬圓　水産四一一萬圓

鑛産一四八二萬圓　林産　八六二萬圓　生産總額一八〇一八萬圓

(2) 生産總額千圓中各生産別金額（昭和十年度福島縣々勢要覽に依る）

農産四六四圓　工産三六〇圓　畜産二三圓　水産二三圓　鑛産八二圓　林産四八圓

農産生産額は東北地方に於いて、工業同樣その首位を占め宮城、山形二縣を凌駕し、畜産も最も多く林産は秋田。岩手の次位で、水産額は宮城、岩手、青森の次位を示してゐる。

鑛産はその産額に於いて秋田縣と伯仲してゐるが秋田の貴金屬及び石油に對して本縣は石炭と硫黄を主としてゐる。

工業生産は製絲、機業が主で製陶、漆器業かこれに次ぎ、最近郡山及び炭田地方に大規模な化學工業が勃興してゐる。

生産總額の一人當りは約百圓餘で秋田縣の次位を示し、面積百坪當りの生産額は約百九十圓で宮城縣の次位である。

生産面は、主として三低地帶であるが、便宜上阿武隈山地を中通地方に中央山地地域を會津地方に包含せしめて三地域に分けることが出來る。

濱通地方は第三紀層を被ふ沖積土帶で、舌狀の侵蝕面は水田に利用され、段丘面は大部分林地に使用されてゐるが、漸次畑地に移化してゐる。また阿武隈山地東緣の微扇狀地面は、水に乏しい關係から草地をなし、昔から牧馬地に利用されてゐる。

此の地域は久之濱を中心に南北に廣い、アレー型の生産面をなし、南部は平を中心として山麓の第三紀層より採掘する炭田地域をなして炭坑村落及び小工業都市が起り、セメント、煉瓦、製粉等の製造工業が起つてゐる。

而して中間部の海岸低地は南北兩地域のコリドールの如きもので、林地の多い臺地が大部分を占め、南ほど工業地方的色彩を有して一つの漸移地帶をなしてゐる。

水田は南北共に各一萬ヘクタールを有し、砂土質で氣温、雨量共に多い關係から本縣の主たる水田地域をなす。海岸は屈曲少きも好漁場となり、原釜、四ツ倉、小名濱、江名等の漁港があつて漁獲並びに製造が行はれてゐる。

中通地方は本縣の中樞部をなし、北に福島盆地があつて一單元をなしてゐる。阿武隈川本支流は灌漑の大動脈をつくり、これに安積疏水を加へて本縣の主たる耕地面をなす。耕地は本縣の六十パーセントを占め、東西兩地方の三倍に及び二萬ヘクタールの水田が分布し、主たる産米地域である。白河、須賀川、郡山、本宮、二本松、福島等はこの地域の中心で農業原料よりの加工が行はれ、工業地域をなし特に福島附近は製絲機業が盛んで炭田地域と共に工業生産の多い地方である。

郡山・須賀川には釀造業が起り白河附近の那須山の裾野と阿武隈山地の三春、常葉附近は牧馬地として全國的に名高い。

阿武隈山地は花崗片麻岩の風化土壤を利用して煙草がつくられ、また灌木林からは木炭薪材が生産されてゐる。

會津地方は盆地面を中心に舌狀をなしてゐる侵蝕面が集合せる地域で、その複合微扇狀面は砂土質と灌漑に便利なところから廣い水田帶をなし、米質良好のため若松を中心に釀造業が起つてゐる。盆地周緣の丘陵地、谷面には氣候の冷涼から藥用人參、大麻、桐等によく、藥用人參、會津桐材は全國的に知られてゐる。

猪苗代盆地は酸川（長瀨川）の微扇狀地面で生産面は狹いが、川桁附近は花崗岩の風化土壤のため良米を出し、川桁米として會津米と共に移出されてゐる。

此の地域は比較的長い冬と積雪の多い關係から副業として、家内工業が盛んで會津木綿、藁製品、椀木地等はその主なるものである。

若松、喜多方は會津漆器の製造が行はれ、盆地南部の本郷・川南には陶磁器業が起つてゐる。

# 一〇、農業と生産

## (1) 概要

本縣に於ける耕地總面積は一九一、一三一町歩餘であつて、總面積五六三、九八一町歩の三四%を占めて居り、全國第五位である。內水田一〇三、三〇七町歩(全國平均六八、五〇九町歩)畑八七、八二三町歩(全國平均五八、九八一町歩)一戸當耕地面積一町三反七畝(全國平均一町一反)で、農業を主としてゐる。

昭和八年末に於ける總戶數二六〇、八八三戶中農家戶數は一四二、二三五戶であつて、總戶數の五三%を占め、從つて生產額に於ても農產物を首位とし、總生產額一四二、〇〇〇、〇〇〇圓の約四割五二、〇〇〇、〇〇〇圓を算し、之に畜產、蠶糸、水產、林產等を加ふる時は實に九二、〇〇〇、〇〇〇圓に上り總生產額の六割五分は農山漁村の生產になつてゐる。

## (2) 耕地面積其他比較表

| | 耕地面積 | | | | 自作地 | | 小作地 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 總面積 | 田 | 畑 | | 田 | 畑 | 田 | 畑 |
| 全國 | 五、九九二、〇八四、九町 | 三、二二九、九五七、一町 | 二、七七二、一二七、七町 | | 一、五〇三、八四〇、九町 | 一、六六一、三四二、三町 | 一、七一七、一一六、二町 | 一、一一〇、七八五、四町 |
| 平均 | 一二七、四九一、二 | 六八、五〇九、七 | 五八、九八一、四 | | 三一、九七五、三 | 三五、三四七、七 | 三六、五三四、四 | 二三、六一二、五 |
| 福島縣 | 一九一、一三一、六 | 一〇三、三〇七、九 | 八七、八二三、七 | | 五三、六五八、一 | 六〇、七七二、四 | 四九、六四九、八 | 二七、〇五一、三 |
| 全國に於ける本縣の順位 | 五 | 七 | 六 | | 三 | 四 | 八 | 二 |

## (3) 農家戶數

| | 農家戶數 | 百分率 | | 自作小作別百分比 | | | 專業兼業別百分比 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 自作 | 小作 | 自作兼小作 | 專業 | 兼業 |
| 全國 | 五、六四二、五〇九 | 四四、四% | | 三一、〇九% | 二六、五六% | 四二、三五% | 七二、九六% | 二七、〇四% |
| 平均 | 一二〇、〇五三 | 四四、四一 | | 三一、〇九 | 二六、五六 | 四二、三五 | 七二、九六 | 二七、〇四 |
| 福島縣 | 一三九、〇五四 | 五二、六八 | | 二四、六五 | 二七、五〇 | 四七、八五 | 八三、一五 | 一六、八五 |
| 全國に於ける本縣の順位 | 一六 | 三〇 | | 四〇 | 二〇 | 七 | 二 | 四六 |

## (4) 生産價額

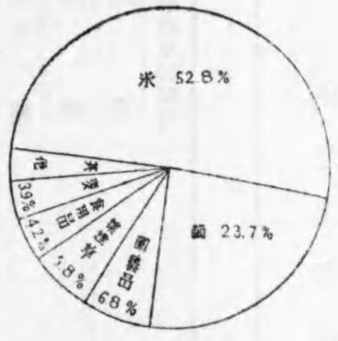
| | 總額 | 農産 | 蠶糸 | 畜産 | 水産 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全國 | 一〇、七二九、九〇〇、七三七圓 | 一、九六八、七七二、四四九圓 | 七八八、四九八、三四三圓 | 二〇二、二二七、一〇六圓 | 三七四、三九五、〇五一圓 |
| 平均 | 二三八、二九五、八六二 | 四一、八八八、八七八 | 一六、七七六、五六〇 | 四、三〇二、七〇四 | 七、九六五、八五二 |
| 福島縣 | 二四一、〇二五、〇七三 | 五二、八七九、九五四 | 二四、六九四、七九一 | 三、六七八、六一三 | 三、九六一、二三八 |
| 全國に於ける本縣順位 | 二七 | 一三 | 八 | 一六 | 三〇 |

## (5) 生産價格（續）

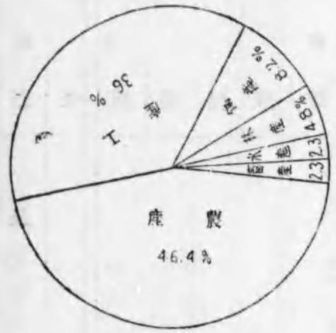
| | 林産 | 鑛産 | 工産 | 一戸當 | 一人當 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全國 | 二四三、一四二、六八三圓 | 三一四、九九四、七一〇圓 | 六、八三七、八七〇、三九五圓 | 八四四圓 | 一六六圓 |
| 平均 | 五、一七三、二四九 | 六、七〇二、〇一五 | 一四五、四八六、六〇四 | 八四四 | 一六六 |
| 福島縣 | 七、二五八、五八二 | 一一、一三七、〇三七 | 三八、四一四、八五八 | 五四四 | 九三 |

## (6) 郡山市農産物生産價額

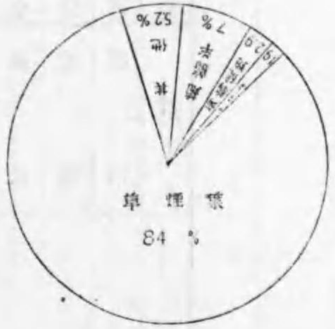
| 郡市別 | 金額 | 郡市別 | 金額 |
|---|---|---|---|
| 信夫 | 四、九五六、八五三圓 | 東白川 | 三、四五二、八六三圓 |
| 伊達 | 八、八一四、一九二 | 西白河 | 四、二五〇、三三六 |
| 安達 | 六、七三一、九八四 | 石川 | 三、九〇九、九一五 |
| 安積 | 四、三三四、〇一四 | 田村 | 八、四八一、〇六三 |
| 岩瀨 | 三、六〇〇、〇九五 | 石城 | 六、五三四、三七九 |
| 南會津 | 二、〇六六、五三二 | 双葉 | 三、五九五、二九八 |
| 北會津 | 二、七六七、五三五 | 相馬 | 六、四四九、七〇五 |
| 耶麻 | 五、六九九、七八七 | 福島 | 五三九、四一〇 |
| 河沼 | 三、九六六、六二七 | 若松 | 一〇九、〇五七 |
| 大沼 | 二、八二一、九五五 | 郡山 | 四九七、一三三 |
| 各學校及試驗場 | 五、一六七 | 計 | 八三、六〇三、八六九 |



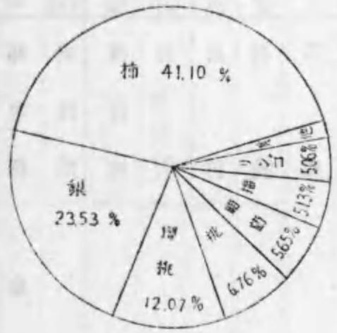

率分百額產生產物農縣本(六)
(昭和八年度)




率分百額產生產物要主縣本(七)
(昭和八年度)




率分百額產生物作藝工縣本(八)
(昭和八年度)




率分百額產生實果縣本(九)



# 一一、蠶糸業

本縣は全國有數の養蠶縣として自他共に許して居るのである。全農家戸數十四萬二千八百三十戸の六割三分が養蠶をやつてゐることになつてゐる。安達郡の七割六分、田村郡の七割五分を頭とし、北會津郡の三割一分が殿りをつとめて居る。次に之に關係せる數字を掲げて參考とする。

## 福島縣蠶糸業統計（昭和九年）

| 郡市名 | 養蠶戸數 | 繭產額 | 價額 | 桑園反別 | 製糸戸數 | 生糸產額 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 戸 | 貫 | 圓 | 町 | 戸 | 圓 |
| 信夫 | 五、八二七 | 二六一、七六二 | 六一四、二五 | 二、八九三、〇 | 一、六九三 | 五四八、四八三 |
| 伊達 | 九、七五六 | 六五八、七三四 | 一、五五一、九三八 | 五、五九四、五 | 一、五三九 | 二、三八七、二四五 |
| 安達 | 八、二七七 | 四〇三、四〇五 | 八五六、七四〇 | 二四、一八七、四 | 七五三 | 一、四五一、三八一 |
| 安積 | 三、五八二 | 一三六、〇七六 | 二八〇、八九二 | 一、三〇二、八 | — | — |
| 岩瀬 | 三、六五五 | 一三五、七九〇 | 二六三、七三三 | 一、二七四、三 | 一 | 一、二八二、五〇〇 |
| 南會津 | 三、五五八 | 七二、八三八 | 一三三、二八五 | 六六七、〇 | 四四八 | 二三二、四一三 |
| 北會津 | 一、〇九六 | 三二、六七六 | 四四、六四二 | 一八八、二 | — | — |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 耶麻 | 四、八七〇 | 一三八、一〇九 | 二六四、一九〇 | 一、四六一、七 | 七 | 一、一五五、四五〇 |
| 河沼 | 二、二七三 | 六四、五七七 | 一三五、六八四 | 六九六、八 | 四 | 六、三〇〇 |
| 大沼 | 三、〇八八 | 七二、四七八 | 一三七、二七〇 | 七二四、七 | 一〇七 | 七〇、六二〇 |
| 東白川 | 三、八七八 | 一〇一、一七八 | 二〇五、二七二 | 八一二、八 | — | — |
| 西白河 | 四、四九五 | 一三〇、二四四 | 二五二、三三〇 | 一、五三一、二 | 四 | 八三〇、九二一 |
| 石川 | 三、九四六 | 一二二、八七〇 | 二三〇、〇七二 | 一、一四〇、三 | 九一 | 二〇一、一五〇 |
| 田村 | 一〇、一二七 | 三八八、一八〇 | 七九〇、一一八 | 三、七八七、三 | 四三〇 | 七一九、〇五一 |
| 石城 | 五、六六二 | 一七九、四二八 | 三六九、八〇八 | 一、五七〇、八 | 一 | 六五九、二五〇 |
| 双葉 | 四、三八五 | 一七二、六四〇 | 三六六、四〇三 | 一、九三一、〇 | 二五 | 七三二、三一二 |
| 相馬 | 六、八一五 | 三〇二、四六三 | 六六九、九〇三 | 二、八七八、九 | 八 | 一、五九六、六五二 |
| 福島 | 五六 | 一、八三二 | 四、二四九 | 三七、六 | 五 | 二、六九五、一六五 |
| 若松 | 三二 | 三七六 | 七六六 | 二、〇 | 三 | 二八、七〇〇 |
| 郡山 | 二八 | 一六、〇二二 | 三一、八四八 | 二四三、〇 | 三 | 三、一〇五、四八三 |
| 合計 | 八五、四〇七 | 三、三六二、六七七 | 七、一九三、三五七 | 三三、九三五、三 | 五、一二 | 一七、九三、〇二四 |



右の數字に示す樣に本縣の養蠶業は頗る盛大ではあるが、將來改善を要する點を多々含んでゐるのであつて現在縣當局の計畫されてゐるところを見ると次の諸點にわたつてゐる。

## 一、桑園の改良計畫

本縣の桑園は其の面積の廣大な點に於て全國中第四位に在るのであるが、反當り平均收繭量は八貫匁であつて、甚だ成績に於て思はしくないものがある。此の樣な狀態では現下養蠶業の狀勢に鑑み到底有利に展開することは不可能な實情なりとして、昭和五年度に於て政府より蠶業改良事業低利資金二百三十八萬圓の融通を受け、之を桑園改良實行組合に轉貸して荒廢桑園の改植を奬勵したのである。

昭和九年度迄に於ける成績を見るに豫定計畫反別を超過する好成績を收め、反當收繭額も從來に比較して二貫匁以上も增加するといふ實績を得たのである。

## 二、桑樹仕立方の改良

從來は會津地方に見る樣に高刈仕立となすところもあるが、廣く根刈仕立となすために、特に萎縮病におかされ易く、又樹命も一般に短かかつたのであるが、之を無拳中刈仕立となすことによつて、次に示す樣な多くの利益をもたらすが故に、此の仕立方を大いに奬勵することになつてゐる。

無葉中刈仕立の特長としては次の諸點を擧げることが出來る。

1 充實せる桑葉を多收し得ること。

2 相續枝剪定により萎縮病に罹ること稀である。

3 春秋兼用を毎年反復するも樹勢概して衰弱しないこと。

4 相續枝剪定の割合により、春蠶主用にも又夏秋蠶主用にも何れか一に變更することが隨意であること。

5 盛狀期長く普通二十年以上に達し、尙相當の收葉を持續し、根刈に比し倍の命數を保つこと。

## 三、養蠶の改良

繭生産の數量は前記統計の示すところであるが、決して誇るべき程の數字ではないのであるが故に當局としては次の諸點に意を用ひ之が指導奬勵をはかつてゐる。

### 指導方針

(1) 養蠶經營に關する事項

イ、農業組織の均衡を保ち、堅實なる經營をなさしむること。

ロ、養蠶實行組合の普及活動の促進。



ハ、特約取引をなす組合の指導をなすこと。

ニ、繭の販賣は公正堅實なる取引によらしむること。

(2) 繭生産に關する事項

イ、優良品種の普及統一を圖ること。

ロ、蠶種掃立時期の統制及び調節をはかること。

ハ、合理的飼育法の普及を圖ること。

ニ、蜘蛛の驅除豫防を爲すこと。

## 四、製糸の改良

尙養蠶の改良と相俟つて最も重要なる製糸の改良に於ては特に次の諸點に意を拂ひ、指導の完璧を期してゐる。

(1) 製糸經營に關する事項

イ、製糸業の免許取締。

ロ、製糸業共同施設の奬勵。

ハ、金融の圓滑を圖ること。

ニ、工場管理の統制を圖ること。
ホ、原料の向上統一並に取引の確立を圖ること。
ヘ、產業組合製糸の普及及び發達を圖ること。

(2) 生糸生產に關する事項

イ、生產の統制及び規絡の統一を圖ること。
ロ、器具機械の改善をなすこと。
ハ、各工場に專門の技術者を置くこと。
ニ、從業員の敎養、訓練、技術の向上に努力すること。

## 一二、畜　產

本縣の氣候並に風土は、畜產業の開發に非常に適して居るのみでなく、他方農家經營上家畜の重要さが、痛感さるゝに至つて、本縣の畜產熱は近年頓に其の度を高めて來た觀がある。此の好機を逸せず、本縣に於ては畜產奬勵五ヶ年計畫を樹立して、大いに將來に期待せんとしてゐるのである。

其の計畫內容は次の樣である。

畜產奬勵五ヶ年計畫年次表

| 種別 | 昭和九年現在 | 昭和十年度 | 同十一年度 | 同十二年度 | 同十三年度 | 同十四年度 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 馬 | 七四五、一一六圓 | 八三八、二六〇圓 | 八六三、八一一圓 | 八九一、一七三圓 | 九一八、四五九圓 | 九四五、八二二圓 | 四、四五七、五二四圓 |
| 牛 | 三五、一〇〇 | 四八、六〇〇 | 五八、四〇〇 | 七二、九〇〇 | 八六、四〇〇 | 九九、九〇〇 | 三六七、二〇〇 |
| 緬羊 | 九三、五七〇 | 一四五、〇四五 | 二一四、八五五 | 三一二、四九〇 | 五五〇、一八五 | 六四四、三三五 | 一、八六六、九〇〇 |
| 鷄 | 一、二九九、〇六三 | 一、三二七、一九二 | 一、四〇六、八〇七 | 一、四八三、八一九 | 一、五五九、〇八七 | 一、六三六、九五〇 | 七、四一三、八五四 |
| 計 | 二、一七二、八四九 | 二、三五九、〇九六 | 二、五四四、八七三 | 二、七六〇、三八二 | 三、一一四、一三三 | 三、三三六、九九六 | 一四、一〇五、四七八 |

備考　增產額算出の基礎は產駒一頭七六、四圓　犢一頭四五圓　仔緬羊一頭三〇圓　鷄卵一ヶ一、九三—一、六九として算出す

現在は馬匹八九、四五七頭。畜牛一、七〇〇頭。緬羊五、三〇〇頭。豚一八、六八六頭。鷄一〇九、六六七、五九四羽であつて、生產額四、一一五、六九五圓(昭和八年)になつて居る。

是を右の五ヶ年計畫によつて、將來種牡馬の總數を四百五十頭に(現在は三百八十七頭)、に增加し、一萬二千頭の產駒(現在は九千七百四十九頭)を求めんとし、畜牛にあつては將來の目標を七千頭(現在一千七百頭)に置き、緬羊にあつては三萬頭(現在は五千三百七十七頭)となし、更に鷄にあつては鷄卵生產額を百六十萬圓(現在百二十九萬九千圓)に達せしめ樣として居る。更に一方牧野の改良維持並に飼料の充實を圖り、家畜の保健衞生設備を完全にして、以て所期の目的達成に遺憾ない樣にと努力

して居る。

特に今日本縣に於て最も注目に値するものは、緬羊に關係せる方面である。本邦に於ける緬羊飼育の歴史は可成り古いのであるが、諸種の事情に妨げられて、所期の目的を達し得ずに終つたのであつて、其の前途は蓋し暗かつたのであるが、本縣に於ては一人よく其の任を完うして、今日に於ては各府縣を斷然凌ぐ程の勢である。これは偏に本縣農務課に緬羊の叔父さんとして尊敬されて居る鈴木技師の努力の結果であると言はねばならぬ。大正七年鈴木氏着任の當時は縣内に僅か二十頭の緬羊が居つたのであるが、其の後年と共に異常なる發展を見せ昭和十年現在約一萬二千頭までになつたのである。その增加のあとを尋ねると次の樣である。

| | |
|---|---|
| 大正七年 | 二〇頭 |
| 大正十年 | 一二〇頭 |
| 大正十三年 | 五一九頭 |
| 昭和二年 | 一二〇〇頭 |
| 昭和五年 | 二八五二頭 |
| 昭和八年 | 四五〇八頭 |
| 昭和十年 | 一二〇〇〇頭（見込み） |

かくて本縣の畜産界は、前途愈々洋々たるものありと言ふことが出來るのである。

## 一三、機　業

機業は製絲業と同樣家内工業より起り、漸次機械織に變化せるもので、原料と技術の關係から絹織物は福島を中心とする北部の伊達信夫の二郡に多く行はれ、綿織物は冬期積雪の多い會津地方に副業として產出されてゐる。

### 1　川俣附近の機業

機業の起源は口碑に依ると、紀元一千二百五十三年小手姫が小手鄕に居を構へ養蠶製絲の業を授けたのに初まる。

川俣羽二重の名稱は「マーケットネーム」として貿易市場に有名であつたが、經濟界の變動によつて減少を來し、漸次人絹織並びに節絹織に變化するやうになつた、川俣羽二重が海外に輸出されたのは明治十九年以來でその特徴は輕目の縞で原料の良いこと、織目の整齊なることで、且製練法も巧妙色澤も純白品位も高尙で他に比して優れてゐた。

最近川俣を中心とする約二百の工場は人絹織並びに節絹織に移化し羽二重製織の巧妙な製練法を應用して優秀なものを製出するやうになつた。

特に節絹は他の産地の埼玉、栃木、群馬の各縣生産額より多く大部分、京都に送られ、裏地として加工されてゐる。

年生産額は約一千萬圓を超え販路は主として國内で京都、靜岡、名古屋、高崎の各地に移出されてゐる。

### 2 綿織物

綿織物は會津木綿と稱する縞物及び色物にて平均百七十萬圓の生産があるが、冬季積雪の多い會津盆地に興つたもので、若松及び坂下を中心に漸次工場組織にかはり産出されてゐる。

製品はモンペイ地袴地等が多く販路は縣内東北地方並に北海道地方に及んでゐる。

## 一四、陶磁器と漆器

### 1 陶磁器

窯業の行はれる地域は會津盆地南部と、海岸地方の北部であるが、原料の陶土は地質により相異り、各特色を有してゐる。

會津燒、相馬燒はその主たるもので、この外二本松、田島の萬古燒、長沼の長沼燒等がある。

製造戸數は約百戸を超え本郷を中心とする地域及び双葉郡大堀村附近が多い。

會津燒は飲食器物の外電氣用碍子を多くつくり、相馬燒は主として茶器裝飾用器物等である。

産總額は六十萬圓内外で會津燒がその過半を占め、碍子は三十萬圓餘で販路は全國的である。

#### A 會津燒

本郷町及び川南村を中心に製出さるゝもので原陶土は辨天山附近の流紋岩の風化土で昔から土瓶急須、茶碗、燗徳利、蓋物等がつくられ、地方の需要を充した。明治十年に至り内國勸業博覽會に出品して紹介されて以來、漸次全國に需要がおこり産出が增加するやうになつた。

最近品質、意匠の改良に意を注ぎ瀬戸附近の陶土を混合して優秀のものをつくり、特に急須は品質良く東京及び京阪地方に販路を有してゐる。電氣用碍子は明治三十三年以來製出され、著しく發展し、米、英、印度に輸出するやうになつた。

#### B 相馬燒

相馬燒は相馬郡の中村及び双葉郡の大堀に製出するものを總稱するもので、一名「駒燒」又は「ヒ

ゞ燒」とも言はれてゐる。

産額は大堀村を主とし、形狀、色合共に雅致に富み且質が堅牢で火力に耐える特性を有してゐる

C 萬古燒

田島、二本松等に製出されてゐるが戸數も少くその需要も地方的で多く茶器がつくられその産額も極めて少い。

## 2 漆器

漆器は多く家内工業として會津地方に行はれてゐるが、若松及び喜多方附近が主たる製造地域をなしてゐる。年産二百萬圓を超え若松は約八十パーセントを製出し、製造戸數も多い。工場は個人經營のものが多く若松は專業的で喜多方は副業的である。

若松産漆器は主として東京方面に販路を有し、東北各地北海道及び關西地方に向ひ、京阪商人によつて一部は支那に輸出されてゐる。

喜多方産は關東、新潟、北海道が主たる販路で製品は前者の飲食器、硯箱菓子器等に對して專ら食器をつくつてゐる。

最近ベークライトの研究が行はれ將來有望である。



漆器業の起源は寶德年間會津領主蒲名盛信時代に既にその萠芽を發生せるものと傳へられてゐる。而して元龜年間盛高時代に至り、轆轤挽木地に赤黑塗りを施して椀、盆、木鉢等を製出せるに創まると言はれ津輕塗、能代春慶塗と併稱せられしものである。

# 一五、水産業と漁港

本縣の水産の生産面は海岸面と内陸の湖沼面にかけられ、海岸面はその延長百六十粁に及び親潮と黑潮と大陸棚の發達してゐる關係から魚族に富み、鰹・鰈・鮃・鰯・鯖・秋刀魚・鯛・鮭等が漁獲される海岸は上昇海岸のため屈曲少く小名濱・江名・四ツ倉・原釜等と最近築港された松川浦が僅かにその漁港として漁場の中心をなしてゐる。

漁獲物の主たるものは鰹の五十萬圓餘が最も多く鰈・鮮・鰯等がこれに次ぐ。

製造物は食料品が六十萬圓餘で鰹節を主とし小名濱に生産されてゐる。其他肥料、魚油、罐詰等もつくられ、縣内の需要を充たしてゐる。湖沼面は養殖業で鯉・鱒・鰻・鮒等であるがその産額は少い。猪苗代湖・沼澤沼・檜原湖等には人工孵化法による養殖が行はれ將來有望である。

稻田養鯉は農家の副業として近時山間部方面に普及を見るに至つた。會津盆地及び只見川・大川流域

はその中心である。

本縣に於ける水産業の施設は明治三十六年水産試驗場の設置によつて指導奬勵が行はれて以來、大正九年には漁撈見習生の養成となり、漸次進展し漁港修築漁船の改良等によつて著しく發展の氣運をみるに至つた。

## 一六、石　炭

鑛産は地質系統によつてその種類及び場所を異にしてゐるが、古期岩石・新期岩石と火山岩の接觸多き本縣は鑛區の面積が比較的廣汎である。阿武隈山地の古生層と花崗岩の接觸地や中部及び西部の第三紀層と火山岩接觸地には金・銀・銅・鉛等の貴金屬鑛床が多い。

而して阿武隈山地東緣の太平洋海岸段丘帶は鑛床區より觀て常磐區をなし、第三紀新成統の砂岩頁岩礫岩等より成り、石炭の埋藏多くその採掘量は年二百萬トンを超え、本縣鑛産額の七十六パーセントを占めてゐる。常磐炭田の一部で岩坑地域は勿來より北方双葉郡以北にまで及び重要な炭山は内郷入山小野田、勿來、好間等である。

採掘の起源は數百年前であるが、安政四年大森（現大浦）の片寄平藏翁が内郷村泉地内にて發見し耕



作の餘暇に採掘し、火力に利用せることが現在の炭坑地域を形成せしものと思はれる。

採炭中心は平・湯本・内郷・綴等で販路は常磐線、磐越東西線によつて關東、東北、北陸の各地方に搬出せられ有力な動力資源をなしてゐる。

## 一七、交通概觀

東北地方は本州島の東北端に位し、地理的位置と地形的影響から自然交通の進歩が遲れた地域で、文化の移入も土地開發も同樣である。本縣は東北地方の關門として古來、勿來・白河の二關が設けられ重要な門戸をなしてゐる。

而して前者は濱通地方、後者は久慈川河谷より中通地方の交通線となり、兩者間には阿武隈山地横斷の構造線利用による數條の道路によつて連絡され、多賀城經營以來漸次開拓が行はれしものである。會津地方は四道將軍東征以來、北陸地方との交通が開け漸次東に向ひ、中通地方との連絡が行はれた。

斯くて平安時代、鎌倉時代を經て德川時代に至り參覲交代の政策により、奥州街道と濱街道は宿場型交通線として成長し、明治時代に入り三島縣令の産業道路の開發と東北本線奥羽本線其他の鐵道が開通し、交通面が整備されて現代に至つた。

本縣の交通面は地形の關係から濱通、中通、會津の三地域が主なる面で梯形の交通網がつくられてゐるが阿武隈山地及び會津山地は構造線や河谷が交通面に利用せられ線狀をなしてゐる。

濱通地方は上野より仙臺に至る濱街道と常磐線が通り、平と中村が地方的中心で中通地方とは阿武隈山地横斷の數條の道路によつて連絡され、自動車交通の活躍を見てゐる。中通地方は奥州街道と東北本線が通り福島にてY字狀に米澤方面に通路を分けてゐる。中央部の郡山は磐越東西線と東北本線とのクロスするところで交通の中心をなしてゐる。

福島・郡山・須賀川・白河等は中通地方の核で自動車交通網がつくられてゐる。西部の會津盆地は若松喜多方が核で米澤街道磐越西線が盆地北部に通じ、南部には大川沿岸を利用する田島線、日光街道があつて只見川沿岸の沼田街道と共に地方經濟開發に重要な交通線である。

## 1 道路

縣内の道路の延長は國道が六千二百粁、縣道が七萬九千三百五十四粁あつて、密度は中通地方が最も多く濱通會津地方の順序を示してゐる。國道は中通地方を南北に走る奥州街道及福島より米澤に至る萬世大路で、濱街道と共に主軸線をつくり、これに縣道が補助連絡して道路網をなし自動車交通の發達によつて產業開發に重要な役目をなしてゐる。殊に鐵道に不便な會津山地は自動車交通により村落の發達及び經濟の進歩を促してゐる。

## 2 鐵道

鐵道の分布は道路面と同じく平野面及び山地の構造線を利用し敷設されてゐるが、奥羽山脈以東は地形の影響から南北の方向に常磐線東北本線が通じ略々中央の郡山にては磐越東西線が交叉して平と新津を結び表日本と裏日本を連絡してゐる。又郡山よりは久慈川河谷に沿ひ水戸に至る水郡線が敷設せられ、縣南地方の開發と貨物輸送上に重要な線をなしてゐる。

北部の福島は奥羽本線の分岐點で松川よりは川俣線を分け、南部の白河より白棚線が棚倉に至り、水郡線に連絡してゐる。若松は會津盆地の鐵道網の中心で南部に地方線の會津線と田島線が放射狀に通じてゐる。會津線、田島線、川俣線等は何れも地方開發上の重要な線である。

尙福島・若松・郡山・白河・平等は郊外交通線の發達著しく電車、自動車の利用が行はれてゐる。

## 3 水運

本縣の河川交通は地形的影響から殆んと利用されないが、德川時代に於いては阿賀川及び阿武隈川の一部に行はれた。即ち前者は會津盆地の鹽川が終端港として河口より急流用船により鹽・魚油・魚類

が移入され、米・木材が移出された。後者は河村瑞軒によつて荒濱、福島間が開かれ、鹽・魚油等が移入され、生絲・米・豆類が移出されたが共に鐵道の發達と共に消滅した。猪苗代湖は地方的に利用されてゐるが、經濟的には價値は少い。

海上交通も海岸線が屈曲少く且海底が淺い關係から天然の良港に乏しく、多く漁港として利用されるに過ぎない。南部の小名濱港は最近築港が行はれたもので本縣唯一の港灣である。北部の漁港松川浦は規模大きく將來水上交通にも貢獻することゝ思はれる。

## 一八、本縣農村の現狀と施設

### 概說

經濟界の不況は愈々深刻を極め、農村非常時の聲を聞くこと既に長いものがあるが、昨年の大凶作に次いで本年も亦非常なる災害を被つたために、未だ其の解消を見ないのみか却つて惡化の傾向さへ見るに到つたのは實に遺憾に堪へないところである。今農山漁村の狀況を各方面から觀察して見るに頗る悲慘な狀況にあることが窺はれるのであるが、昭和二年以降の統計に依つて示すと次の樣な驚くべき結果を展開するのである。

### （一）主要農產物の生產額調

| 年度 | 生產額 圓 | 指數 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 昭和二年度 | 六九、七一六、三六三 | 一〇〇 | |
| 昭和六年度 | 四〇、二九三、九〇六 | 五八 | |
| 昭和七年度 | 四九、九〇六、七六八 | 七一 | |
| 昭和八年度 | 五二、二六三、八三一 | 七五 | |

今農村の主要產物に就いて見ると叙上の樣な數字を得るのである。昭和六年最も甚しく同七年八年と漸次好調を續けつゝあるやに見受けられるのであるが、昭和八年の大豐作を以てしても尙昭和二年には及ばないところに加へて昨年本年と凶作を迎へて農家の收入減は想像以上に多いものであることが推察し得られるのである。

### （二）副業品及馬匹生產額調

| 年度 | 副業品 生產額 圓 | 指數 | 馬匹 生產額 圓 | 指數 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和二年度 | 七、三四四、八五八 | 一〇〇 | 一、六六、〇〇〇 | 一〇〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 昭和六年度 | 四、三九一、九四一 | 五九 | 一、二三、〇〇〇 | 六六 |
| 昭和七年度 | 五、九二四、八一三 | 八〇 | 一、一〇三、〇〇〇 | 六五 |
| 昭和八年度 | 八、二六二、八二一 | 一二三 | 一、〇六一、九一〇 | 六四 |

之は何れも生産數量の減少したのでなくて、價格低廉より來た現象である。昭和八年度に於ける生産額の增加は藁細工・竹細工・副業養兎の增産によるもので、不況に伴ひ副業品の收入增加を計つて不況打開の一策たらしめんとする農家の努力の一端が此處に見られるのである。實に喜ぶべき現象ではあるが、同時に農家の苦衷を知るに足るものがあるのである。

## (三) 收繭額及林産物生産額調

| 年度 | 收繭 價格(貫當單位) | 收繭 指數 | 收繭 額 | 林産物 生産額 | 林産物 指數 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 圓 | | 圓 | 圓 | |
| 昭和二年度 | 一八、一九八、六五三 | 一〇〇 | 五、三五 | 九、九三九、〇〇〇 | 一〇〇 |
| 昭和六年度 | 一〇、〇八三、一六九 | 五三 | 二、八五 | 五、〇〇〇、〇〇〇 | 五〇 |
| 昭和七年度 | 一一、〇八九、〇六三 | 六〇 | 三、一〇 | 七、一八九、〇〇〇 | 七二 |
| 昭和八年度 | 一九、六〇九、六一〇 | 九二 | 四、九一 | 八、八七九、〇〇〇 | 八九 |
| 昭和九年度見込 | 七、四二六、〇一六 | 三八 | 二、〇三 | — | — |

養蠶業は昭和三四年に稍々好轉の傾向を見せたのであるが、世界的不況は生糸の消費國である米國の經濟界をまず〳〵惡化せしむる結果となり、一方人造絹糸の進出著しく此のために加速度的に糸價の暴落を招來して右に示す樣な數字となつたのである。

林産物に於ては稍々好轉を見て居るが未だ疲弊せる農家の經濟を霑すには足らないのである。

## (四) 農家經濟調査

甲　養蠶を主とする地方の自作農

| 年度 | 農家純收入 | 租稅公課 | 同上割合 | 生活費に充當し得べき額 |
|---|---|---|---|---|
| | 圓 | 圓 | % | 圓 |
| 昭和二年度 | 一、六四九 | 一五一 | 九、〇 | 一、四九八 |
| 昭和六年度 | 一、〇〇三 | 一三〇 | 一二、〇 | 八七三 |
| 昭和七年度 | 一、三三六 | 一二六 | 九、四 | 一、二一〇 |
| 昭和八年度 | 一、八四一 | 一二九 | 七、〇 | 一、七一二 |

乙　米作を主とする地方の自作兼小作農

| 年度 | 農家純收入 | 租稅公課 | 同上割合 | 生活費に先當し得べき額 |
|---|---|---|---|---|
| | 圓 | 圓 | % | 圓 |
| 昭和二年度 | 一、〇一三 | 一一八 | 一二、〇 | 八九四 |
| 昭和六年度 | 三七八 | 七七 | 二〇、〇 | 三〇一 |
| 昭和七年度 | 七八九 | 七七 | 九、八 | 七一二 |

叙上の數字で窺ひ知り得らるゝ樣に、農家の純收入と負擔との關係より考察する時に、農家經濟の窮乏を知ることが出來る。

此くして農村の疲弊は其の極まるところを知らない狀態であるが故に、本縣當局に於ても、此の點を非常に憂慮して、諸種農村更生のために施設をなし、夫々の方向に指導を怠らない樣にと努めて居るのである。次に順を追ふて是等の施設について述べることゝする。

## 一、農村經濟更生計畫

本縣にあつては昭和七年度より五ヶ年間に四百四町村の半數即ち二百二町村に、經濟更生計畫を樹立實行せしむることゝし、次に示す樣に順次豫定の如く實績を擧げて居るのである。

（一）經濟更生計畫樹立指導狀況

| 年度 | 指定町村 | 指導回數 | 指導方法 |
|---|---|---|---|
| 昭和七年度 | 四〇 | 八 | 各方部毎に三ヶ町村乃至九ヶ町村の關係幹部を集合指導す |
| 昭和八年度 | 四一 | 四一 | 各町村毎に指導す |
| 昭和九年度 | 四一 | 八 | 各方部毎に三ヶ町村乃至九ヶ町村の關係幹部を集合指導す |

此の樣にして計畫を樹立し指導を受けたる町村は、何れも從前に比較して面目を一新し、朗らかに更生の一途を辿つて居るのである。

計畫の內容は町村夫々事情を異にしてゐるが故に、決して一樣ではなく夫々特色を發揮しつゝ進んでゐるのである。次に其の二三を示すことゝする。

（二）經濟更生計畫樹立の概要　（昭和七年指定村中より）

信夫郡大森村の例

1　自家勞力の擴充　2　肥料資金の輕減
3　宅地利用　4　產業組合の擴充
5　生活改善

伊達郡五十澤村の例

1　主要食物の獨立　2　桑園の改良と生繭の共同處理
3　養蠶改良　4　肥料資金の輕減
5　產業組合の設置　6　生活改善
7　負債整理

伊達郡石戸村の例

1　食料の自給　2　有畜農業

3 自給肥料增產　4 農業經營改善
5 產業組合擴充　6 生活改善

河沼郡勝常村の例

1 主要農產物增殖　2 桑園改良
3 養蠶改善　4 畜產增殖
5 副業增收　6 肥料資金輕減
7 自給振興　8 農業經濟充實
9 金融改善　10 負債整理
11 產業組合擴充　12 教育改善

## 二、產業組合及び農業倉庫の擴充

堂々たる今日の資本主義經濟社會に於て一人取殘されて、靑息吐息になつてゐるのが今日の農村の經濟狀態である。此處に於て農村に與へられた只一つの方法は、產業組合の設置で之が擴充發展に俟つことである。

農村の個性は協同にある。最近に於ける農業が交換經濟の中に織りこまれることが强くなれば强くなるだけ、又都市資本家との接近が强まれば强まるだけ、協同の必要は益々緊要となつたのである。現代の社會的技術の中に於て資本至義的交換經濟に適應するといふことが新しい農村の協同組織を決定するのである。此處に當然生れるべく運命づけられたものが即ち產業組合と農業倉庫である。此の二つは農民の協同を俟つて始めて其の有する機能を十二分に發揮し得る點に於て、農村特有の經濟機關といふことが出來る。

然しながら本縣に於ける產業組合及び農業倉庫の發達はまことに遲々として進まない狀態であるが、農村經濟更生の樹立と共に昭和七年以來次第に其の數を增しつゝあることは意を强うするに足るものがある樣に思ふ。

（一）產業組合の概況

| 事項＼年次 | 昭和六年十二月末 | 昭和七年十二月末 | 昭和八年十二月末 | 昭和九年六月末 |
|---|---|---|---|---|
| 組合數 | 組合 二八六 | 組合 二八六 | 組合 二八八 | 組合 二九六 |
| 組合員數 | 人 九五、一〇〇 | 人 一〇六、六七三 | 人 一〇九、三三四 | 人 一〇九、〇八〇 |
| 出資總額 | 圓 七、三五六、一八七 | 圓 七、九四四、一一四 | 圓 七、六二一、六六七 | 圓 七、六九二、二六〇 |
| 拂込濟出資金 | 五、七六四、一六三 | 六、〇〇三、七七三 | 六、〇四九、一六一 | 六、〇八五、三三四 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 積立金 | 二、〇三六、九七六 | 二、一四一、九〇五 | 二、一〇〇、七二三 | 二、四二五、〇二二 | |
| 借入金 | 三、八一八、八三九 | 三、九六五、四五一 | 五、二五六、八四一 | 五、五五二、二二〇 | |
| 貯金 | 八、五二一、六五〇 | 八、三三三、八八七 | 九、七八四、七〇二 | 一〇、〇九七、一三五 | |
| 貸出金 | 一三、一六四、八八三 | 一三、九九七、八二三 | 一四、二〇四、九三五 | 一四、八二三、二六八 | |
| 販賣高 | 一、五五六、九三七 | 二、四五二、二五一 | 四、一二七、六一〇 | 一、九八二、一〇五 | |
| 購買高 | 一、三五三、四八一 | 一、八五四、三四〇 | 二、六〇〇、三四五 | 二、三〇四、五八六 | |
| 使用料 | 一六一、八八三 | 一二五、〇九〇 | 一一四、四二一 | 三二、一一七 | |
| 預ケ金 | 一、九七二、三九七 | 二、一七二、八六五 | 三、四四九、七二二 | 三、二四四、五五九 | |
| 有價證券 | 三四三、八四四 | 三七五、八二〇 | 二六四、一〇四 | 三一四、一五九 | |
| 現金 | 六〇六、五五五 | 五一六、一九八 | 五一八、二二八 | 四一八、〇五五 | |

## (二) 農業倉庫の概況

| 事項 | 年次 | 經營主體數 | 棟數 | 建坪 | 收米容量 | 借入金 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 昭和六年度末 | 四五 | 六七 | 二、八七一坪 | 二一、五七〇俵 | 六三、八一四貫 |
| | 昭和七年度末 | 四七 | 七三 | 三、二八五 | 二八、六三〇 | 六八、一一四 |
| | 昭和八年度末 | 五七 | 八四 | 三、八三二 | 三五、一八〇 | 六九、一一四 |
| | 昭和九年八月末 | 六〇 | 九〇 | 四、〇四六 | 二七八、七八〇 | 六九、一一四 |

## 三、負債整理組合

本縣農村の不況は依然深刻であつて、金融は益々窮迫し、財界人心共に安定を欠く現狀である。調査によるに本縣農村の負債は一戸當推計純負債額八百二十七圓餘、本縣農家總負債は一億七千七百餘萬圓となつてゐるが、昭和九年度の繭價の暴落と天候不順による米作の不良とによつて、負債の重壓は更に加へらるゝ狀態である。

斯くの如く必迫せる農村の救濟の方法は元より多岐多樣ではあるが、先づ多年累積した農家負債を徹底的に整理せしむることが緊要であると思ふ。此の目的を達成するために出來たのが昭和八年八月一日に實施された負債整理組合法であつて、更に是と共に產業組合の機能を充分に發揮せしめ、兩々相俟つて目的の達成に邁進すべきものと思ふ。

既に本縣に於ても產業組合で負債整理をなしたものに、相馬郡眞野村及び田村郡大越村安達郡二本松町等があるが、何れも成績良好である。

本縣負債調査（昭和六年）推計による

| | 總額 | 一町村に付 | 常住一世帶に付 |
|---|---|---|---|
| | 圓 | 圓 | 圓 |
| 信夫郡 | 一七、三三四、八九四 | 四三四、一一九 | 八五八、六一 |
| 伊達郡 | 二七、七九六、四〇六 | 四〇二、五五三 | 八七八、八九 |
| 安達郡 | 二三、二二八、六七〇 | 四七五、九六七 | 八二六、五九 |
| 安積郡 | 一〇、四〇一、七五一 | 三一三、九八四 | 七六五、五〇 |
| 岩瀨郡 | 一三、九三二、八六六 | 五三四、九九一 | 八一八、三〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 南會津郡 | 二、九三五、三一 | 三七一、八〇七 | 九五六、九四 | |
| 北會津郡 | 八、五四六、三三五 | 四三五、四六六 | 八一七、七一 | |
| 耶麻郡 | 三〇、〇四八、九四三 | 三三四、八八五 | 八五二、三四 | |
| 河沼郡 | 二三、一九一、七九一 | 二一九、一二七 | 九五五、三五 | |
| 大沼郡 | 八、六五六、六三〇 | 一八三、四九六 | 七三六、二六 | |
| 東白川郡 | 二一、一六三、五四九 | 五〇一、六九九 | 八〇三、三一 | |
| 西白河郡 | 一六、五五〇、〇六一 | 四九六、〇九八 | 八〇三、四三 | |
| 石川郡 | 一〇、五四七、九九五 | 四〇六、三四三 | 七九〇、八五 | |
| 田村郡 | 二五、八一〇、三五六 | 四七六、六三四 | 八〇六、〇〇 | |
| 石城郡 | 五四、三二八、〇六六 | 七四六、〇三〇 | 八一七、七二 | |
| 双葉郡 | 一五、六〇五、〇八八 | 四七六、一六四 | 八四一、二八 | |
| 相馬郡 | 三三、〇三六、八五一 | 四四五、九一八 | 七五九、七〇 | |

本縣に於ては以上に示した様な莫大な負債を整理するために、農村負債整理五ヶ年計畫を樹立し、鋭意目的の達成に努力しつゝあるのである。

## 四、共同作業場施設

本縣農家一戸當平均耕地面積は一、三七町歩にあたるが、其の利用狀況は不良であるばかりでなく、農業の經營が稻作又は養蠶に偏してゐる。從つて勞力の分配は、著しく不平均となり、冬季四ヶ月間の所謂農閑期を無爲に過すことが多いのである。加ふるに連年の穩弊は農家の負債を一層大ならしむる結果となつて居るが故に、經營組織に改善を加へることが緊要である。即ち副業並に農村工業を加味した多角形的農業とし餘剩勞力を利用し收入を增加せしむる樣指導することが大切である。

殊に農家が從來の樣に單に原料生產者として商工業者の隷屬的地位に甘んずることなく、進んで自家生產の原料に加工して、價値の增進をはかることが最急務である。

副業は以上の樣に本縣農家の匡救上、重大なる必要と使命とがあるに不拘、本縣副業の現狀は微々として振はないものである故に、縣としては之が振興を策し、以て農家經濟の緩和向上に努力されてゐるのである。共同作業場は此の目的の達成に資せんがために生れた新なる施設である。

### (一) 農山漁村並凶作地方共同作業場

昭和七年より農山漁村の匡救を目的として、農山漁村共同作業場奬勵規則の公布を見、本縣には四、七〇八圓の奬勵金の交附があつたので、縣內八ヶ團體に對し建物及之に附屬した工作物及器具機械を設置せしめ、之に對し補助金を交付し、八、九年度も同額の奬勵金を以て、各八ヶ團體に前年同樣計畫せしめたのである。昭和九年度の凶作に際しては、之が救濟策として、昭和十年度分を繰上げ四、四六〇圓の交付があつた外、凶作地方共同作業場奬勵費として二九、四〇七圓の追加交附を受けたからして、之を三十七ヶ團體に交付することゝなり、目下工事進捗中である。

(1) 郡市別共同作業場設置表（六十二ヶ所）

| 郡名 | 名 | 昭和七年度 | 昭和八年度 | 昭和九年度 | 昭和九年度追加 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 信夫 | 伊達 | 一 | 一 | 二 | 二 | 五 |
| 伊達 | 安達 | 一 | 一 | 一 | 四 | 六 |
| 安達 | 安積 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 |
| 安積 | 岩瀬 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 |
| 岩瀬 | 南會津 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 |
| 南會津 | 北會津 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 |
| 北會津 | 耶麻 | 一 | 一 | 一 | 三 | 五 |
| 耶麻 | 大沼 | 一 | 一 | 一 | 一 | 二 |
| 大沼 | 河沼 | 一 | 一 | 一 | 三 | 四 |
| 河沼 | 東白川 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 |
| 東白川 | 西白河 | 一 | 一 | 一 | 三 | 四 |
| 西白河 | 石川 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 |
| 石川 | 田村 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 |
| 田村 | 石城 | 一 | 一 | 一 | 四 | 六 |
| 石城 | 双葉 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 |
| 双葉 | 相馬 | 一 | 一 | 一 | 三 | 五 |

(2) 共同作業場實例

全部を擧ぐる必要もなからうと思ふので、數ケ所を選び揭ぐることゝする。



| 設置團體及團體員數 | 作業場建物 | 器具機械工作物設備 | 共同作業の種類 | 經費査定額（補助金交付額） |
|---|---|---|---|---|
| 信夫郡岡山村<br>岡部農事實行組合<br>（五〇名） | 一棟三六坪<br>七二〇圓 | 壓搾器<br>押携器<br>漬石<br>樽<br>板<br>木枕<br>二〇一臺<br>五〇〇筒<br>五〇〇個<br>一〇〇枚<br>（六〇五圓） | 蔬菜加工<br>醬油醸造<br>蔬菜出荷<br>共同出荷 | 一、三二五圓<br>（七〇三圓） |
| 安積郡富田村<br>富田第一農事實行組合（六八名） | 一棟三〇坪<br>六〇〇圓 | 精米麥機<br>粗摺機<br>一臺<br>一臺<br>モーター<br>配電設備<br>一臺<br>一式<br>製粉機<br>（七二〇圓） | 脫穀<br>粗摺<br>精米麥製粉<br>火力乾燥<br>肥料配合 | 一、三二〇圓<br>（七〇一圓） |
| 河沼郡廣瀨村<br>立川農事改良實行組合（六一名） | 一棟四〇坪<br>六四〇圓 | 稚蠶飼育設備<br>粗摺機<br>六組<br>發動機<br>一臺<br>精米機<br>一臺<br>儘青機<br>一臺<br>大豆粉碎機<br>一臺<br>秤<br>一臺<br>（六九七圓） | 蔬菜、果實、共同選別、荷造<br>稚蠶共同飼育、繭出荷、製簇、共同<br>籾摺、虚米共同受檢 | 一、三三七圓<br>（六四三圓） |
| 東白川郡近津村<br>中豐農事實行組合<br>（一二名） | 一棟　九坪<br>增築<br>一四四圓 | モートル<br>粗摺機<br>一臺<br>萬石<br>二臺<br>精米機<br>一臺<br>製繩機<br>一臺<br>釜<br>一筒<br>搾油機<br>一臺<br>製蓆機<br>一臺<br>製麺機<br>一臺<br>脫穀機<br>一臺<br>（三七六圓） | 搾油、粗摺<br>精米、製繩<br>製蓆、製麺<br>脫穀、 | 五四〇圓<br>（三八七圓） |

（二）三井、三菱義捐金による共同作業場

前記（一）にて說明した農山漁村及凶作地共同作業場として、農林省及縣補助の下に出來たもの外に、三井、三菱の義捐金三百萬圓中、本縣割當額五二六、〇〇〇圓で出來た共同作業場が、別に又あるのである。之は單に經濟的設備としてのみならず、部落の集合場所としての設備をも兼ね、精神訓練の方も相當に効果を擧げたいとの二目的を有するのである。從つて其の設計は作業場として階下を用ひ、集合場所として階上を用ふる樣、設計されたものが多いのである。

三井、三菱義捐金に依る共同作業場郡別割當交付一覽表

| 郡名 | 割當町村數 | 設置部落數 | 義捐金交付額 建設費 | 義捐金交付額 作業資金 | 義捐金交付額 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 圓 | 圓 | 圓 |
| 信夫 | 一六 | 四五 | 二八、一四三 | — | 二八、一四三 |
| 伊達 | 四三 | 九三 | 五六、七四五 | 六五 | 五六、八〇九 |
| 安達 | 一九 | 六一 | 三六、三六一 | 二〇〇 | 三六、五六一 |
| 安積 | 一〇 | 二一 | 一二、八九四 | — | 一二、八九四 |
| 岩瀨 | 一三 | 二三 | 一四、三九八 | — | 一四、三九八 |
| 南會津 | 一四 | 四六 | 二七、四六二 | — | 二七、四六二 |
| 北會津 | 九 | 二二 | 一三、八四四 | — | 一三、八四四 |
| 耶麻 | 二七 | 一〇三 | 六〇、六四五 | 一、四〇〇 | 六二、〇四五 |
| 河沼 | 一五 | 四四 | 二六、七三六 | 一〇〇 | 二六、八三六 |
| 大沼 | 一四 | 四七 | 二八、二三四 | 五〇〇 | 二八、七三四 |
| 東白川 | 一三 | 三九 | 二三、六二七 | — | 二三、六二七 |
| 西白河 | 一九 | 四八 | 二九、一三七 | — | 二九、一三七 |
| 石川 | 一五 | 三九 | 二三、六三七 | — | 二三、六三七 |
| 田村 | 二六 | 七九 | 四八、七六二 | — | 四八、七六二 |
| 石城 | 一六 | 四五 | 二七、五〇七 | 一〇〇 | 二七、六〇七 |
| 双葉 | 一七 | 三九 | 二三、七三四 | — | 二三、七三四 |
| 相馬 | 二四 | 六八 | 四一、四八四 | 二八五 | 四一、七七〇 |
| 計 | 三〇八 | 八六三 | 五三三、三五〇 | 二、六五〇 | 五二六、〇〇〇 |

## 五、鄕倉施設

昭和九年東北一帶に亙る凶作は其の慘禍實に大なるものがあつたのである。長くも此の窮狀が、天聽に達するや、深く宸襟を惱まさせられ、御救恤の思召を以て御內帑金下賜の恩命を拜したのである。聖恩優渥洵に感激に堪へないところである。

而して恩賜の御內帑金は將來に亙り永く凶作に備へ、農民の福祉の增進を期するため、適切なる施設に充つべしとの聖旨と拜察し奉つて、政府は玆に國費と合せ、之を鄕倉の設置並に旣設鄕倉の奬勵に資することゝした。

由來鄉倉は動もすれば凶作の惧ある本縣に於ては、農家經濟の安定上、正に重要な施設たることは言を俟たないところであつて、之を永遠に維持して、救荒豫備の目的を全ふする方策を講ずることは、啻に聖旨に副ひ奉るのみならず、農村更生の實を擧ぐる所以である。

此の意味に於て縣では鄉倉の經營指導に十全の努力を施すと共に「報恩備荒田」の設置を勸奬して、貯穀を容易ならしめ、一方耕種の改良試驗研究に供し、以て鄉倉の重大なる使命の達成に寄與すると共に、兩者を融合一體となし、之を中心として精神的に結合し、隣保共助の美風を振作して、共存共榮農村の振興を企て、以て報恩の實を擧げやうといふのである。

（一）既設及新設鄉倉

本縣に於ては既設鄉倉の數が百二十ケ所の多きに達してゐるが、實際活動してゐるのは八十ケ所である、是に新設豫定、昭和八年度五六八ケ所、昭和九年度五三八ケ所であるが、實際は更に豫定數を超過するの勢である、既設鄉倉に對しては坪數に關係なく百六十圓の補助をなし、新設鄉倉に對しては坪當り、恩賜金十圓、國費より三八圓、合計四十八圓也を補助して居るのである。建坪數は同一ではないが一棟十坪內外が普通である。

（二）鄉倉の運用

鄉倉は組合を作らせ、其の組合をして經營せしむる樣にしてある。組合員は隣保共助の精神に基いて備荒のため穀類を積立て、更に又或る限度內に於て、定められた規約に從つて是を組合員に貸付けることも出來る樣にしてある。此くして凶作に備ふると共に、又他方農民の經濟機關ともなつて、農民福利の增進に寄與するところ大なるものがあるのである。

（三）報恩備荒田

報恩備荒田は鄉倉の維持並に耕種改善によつて凶作防止に力を致し、組合員の福祉增進を圖るのが目的である。此の目的を達するために共同耕作となし次の樣な事業を行ふことになつてゐる。

1 試驗研究地として凶作防止に關する耕種改善に努むること
2 共同採種田として優良種子の普及に努むること
3 收獲を貯藏し、鄉倉の經營を容易ならしむること
4 共同精神の涵養と團體活動の訓練とに努むること

## 一九、本縣の行政と財政

本縣は明治維新前二十五藩を有せし關係上、廢藩置縣の際、若松、福島、白河等各縣の外、分縣を合せ十八縣を算へ、行政上頗る煩雜を極めたが、明治四年十一月に至り二本松、平、若松の三縣となつた二本松縣は直に福島縣と改稱され、岩代國、信夫、安達、安積、岩瀨の各郡及び磐城國白河郡を管轄

し、戸數五萬、人口二十七萬を有してゐた。（石高は四十七萬石）

平縣は（磐前縣と改稱）磐城國、白川、石川、田村、宇多、行方、標葉、楢原、磐城、磐前、菊多の各郡をふくみ、戸數四萬、人口は二十四萬であつた（石高四十二萬石）

若松縣は會津、耶麻、大沼、河沼の各郡及び安積郡の一部を管轄し、戸數は四萬、人口は二十萬であつた（石高三十四萬石）

三縣は各自然要素と人文事業を異にし、劃然たるものがあつたが、明治九年八月合併され、現在の福島縣となり目下福島、若松、郡山三市の外、縣下が十七郡に分けられ、町數は四十九、村數は三百十七で面積は全國第二位を占めてゐる。

縣政治はその源古く、土佐と共に自由民權の發祥地にして明治十一年既に「民會規則」が出來て縣會の濫觴となり、縣下の二十六區より六十八名を選拔して縣政を衆議するに至つた。

次いで明治十二年一月、府縣會規則の指定に從つて選出が行はれ當初は六十二人の議員を有して縣の施政に參劃し、明治十四年頃より漸次統整を見るに至つた。現在縣會議員は四十三名にて、選擧有權者は約二十九萬人餘である。明治二十三年には府縣制が公布され、市町村制の施行と共に初めて地方自治體が完成するに至つた。同時に國會も開設され、その第一回の選擧が行はれ多額納稅議員も互選された現在貴族院議員は二名で（選擧有權者二〇〇人）衆議院議員は一一名である（選擧有權者約二十九萬人餘）尙市會議員は九十六名（選擧有權者二萬三千人餘）町村會議員は五千百三名（選擧有權者約二十七萬人）である。

縣行政は議決機關としての縣會及び縣參事會があつて、執行機關には縣知事がある。縣廳の組織は總務部、經濟部、警察部、學務部の四部に分けられ、庶務、地方、土木、會計、商工、水産、農務、教育社會、警務等の主たる事務課の外經濟更生、健康保險に關する部門に分れ、各地方、各市町村の諸般の指導に當つてゐる。

縣の歳出入は各約一千六百萬圓餘で、今より三十年前の約十六倍である（明治三十八年歳出入各九十三萬七千圓餘）歳入は經常部と臨時部に分けられ、國庫支辨縣償費（約五百三十萬圓）の外は、經常部にては地租附加稅が約十二パーセント、家屋稅、雜種稅の各六パーセントがその主たるものである。

歳出は經常部約六十五パーセントを占め、教育費約三十パーセント、土木費二十五パーセントが最も多く、警察費、勸業費等これに次ぐ、臨時部は土木費、市町村土木補助費が多く勸業費これに次ぐ。

尙市の歳出入は百六十萬圓餘で、町村は一千三百萬圓內外で教育費がその過半を占めてゐる。地方債は二千萬圓餘で土木費の三〇パーセント、農山漁村失業救濟事業の二十パーセントがその首位を占め、教育費、衛生費等がこれに次ぐ（以上は昭和十年刊行福島縣要覽に依る）

本縣の財政は最近養蠶業の衰微と冷害風水害等の災害によりその打擊と受けることが多い、從つて縣

內地域は全縣に亘り立地學的研究を行ひ、縣民の自覺によつて、益々本縣の福利を增進せなければならない。

## 二〇、教育一般

本縣教育の研究についても、縱と横との兩面から之を考察せねばならぬ。而して便宜上適當に時代を區劃して研究を進めるにしても、各時代の學校教育、社會教育、家庭教育の實際及びそこに流れてゐる教育學風を見透さねばならず、更に學校教育の範圍內丈でも教育法規並に制度、學校の種類、校舍の設立、教師、兒童、修業年限、教科目及び教科書、教授時數、教授法、施設、管理及び監督、縣民向學の情況等の各方面に亘て調査をせねばならぬ。

併し玆には本書の趣旨に基き僅かに其の一端を示して、將來研究の手引きとしたに過ぎないのである

### 一、明治以前の教育

本縣の教育は大體我が國教育の發達變遷と其の軌を一にするのであるが、就中德川時代に於ては藩學、鄕學、寺子屋、私塾の教育が相當盛に行はれた。各藩には藩學があつて概ね武士の子弟が六七歲で入學し、二十四五歲まで漢學、國學其他の教科を教育されたのであるが、當時の藩學には日新館、育英館、明德堂、佑賢堂、汲深館、教道館、養老館、修道館、敬學館、講學館等があつた。

次に庶民教育の機關としては寺子屋があつて大體八九歲から入學し、三個年乃至五個年間、主として習字、讀書、算術等の教科を授けられたのであるが、其數天文年間の創立から慶應の末期までには實に多數に上つた。又藩學、鄕學、寺子屋の外に私塾なるものがあつて、概ね青年に漢學、國學其他の專門教科を授けたが、當時私塾は小田行藏氏の學半塾、堀江半峰氏の弘道塾、北畠抱子氏の和睦庵等を始めとして相當多數あつた。

### 二、明治初年及學制時代の教育

明治になつても德川時代に於ける本縣の藩學、鄕學、寺子屋、私塾の教育は引續き盛んなものであつたが、やがて之等は制度の改革と共に漸次廢れ、小學校、中學校等の設立を見るに至つたのである。先づ明治二年の御布令の中には小學校を設くることといふのがあり、明治五年八月三月には學制が公布され、次で九月文部省は學制實施の方法を詳細に規定し、中學校教則略と小學校則とを頒布した爲め以來本縣にも續々小學校の設立を見るに至つた。即ち學制に依ると全國を八大學區、二百五十六中學區、五萬三千七百六十小學區としたが、八大學區中本縣は第七大學區に屬し、內第四、第五、第六、第七、第八、第九の中學區に分けられた。而して明治五年以來明治十八年までには八百餘校の小學校が創立され

るに至つたといふことである。而して教師は小學校に於ては二十歳以上にして師範學校を卒業した者と規定してあつたが、當時は規程とか資格等に頓着してゐる譯に行かぬので、從來の藩學、鄕學、私塾、寺子屋の師匠は勿論、神官、僧侶、士族等で多少和漢學の素養ある者がそれに任命された。又兒童は下級小學六歳より九歳まで、上級小學十歳より十三歳まで各八級に分れてゐたのである。

かくて小學校教育の發達は必然に師範教育の發生を促すやうになつた。先づ明治五年五月十四日には東京師範學校が設立され、六年七月に十名の第一回卒業生を出したが、之等の者は各府縣に招聘せられ小學校教員養成の任に當つた。而して同年八月には大阪、宮城に官立師範學校を增設し、七年には更に愛知、廣島、長崎、新潟にも增設して全國に七の官立師範學校を有するに至つた。本縣に於ても明治七年來福島市に教員講習所を設け、若松縣にも養成學校を設立し又磐前縣では平、三春の中學内に傳習生を置いて教師の簡易養成に努めたのであるが、やがて師範學校設立のことが計劃せられ、九年合縣後は以上のものが次第に統一せられて福島に合併し、十一年頃には福島師範學校と改稱されるに至つた。

本縣には當時小學校、師範學校の外に中學校、醫學校があつたのである。中學校は十二年に至り從來福島・若松・平・三春にあつた假のものを改めて學制規程の中學校とするに至つたが、其後地方豫算の關係で或は廢校されるものがあり、或は再建されるものもあつたりして、十七年以後には福島中學・若松中學・平中學の外に、町村立としては田村中學・安達中學が生れた。然るに森文相の時若松・平・田村・安達の中學は廢校となり、唯一つ福島中學が福島縣尋常中學校と改稱されて殘存した。二十三年には若松・會津地方の有志家に依て私立會津中學が設立され、三十年以後に至つては石川中學の前身石川義塾が開校され、磐城中學・福島中學・相馬中學が縣立となつた次第である。

次に醫學校は明治四年西白河郡白河本町官立病院に於て醫書を教授したことから始まる。其後白河病院を岩瀨郡須賀川本町に移し、醫學所を設けて生徒を募集した。十一年に至り醫學所を醫學講習所と改め、學則の改正が行はれたが、明治十四年縣會で之を福島に移轉することに決し、十五年から福島醫學校として二十年まで經營されたが、二十一年宮城縣醫學校に併合されてしまつた。

一般に當時の教育學風は學制の精神に基き、實學の奬勵と教育の普及とにあつた。又英米の思想を吸收することが盛で、コメニウスの客觀的自然主義の教育教授は眞先に輸入されたのである。

## 三、教育令時代の教育

學制の規程は實に整然たるものであつたが、理想に過ぎて國情に適しないところがあつたので、明治十二年九月に至つてそれを改正したのが教育令である。

教育令に於ては大、中、小の學區を廢し、町村に公立小學校を設置し學務委員を以て學區取締に代へて町村内の學事を管理させ、多くの施設經營は府縣町村の自治に任せた。併し當時國民は未だ自治を完

うするに適せず、教育の紀綱が一時に弛んだので、十三年十二月に至つて教育令は更に改正されたが、改正教育令に於ては各町村は府知事縣令の指定に從ひ、學齡兒童を教育するに足るべき小學校を設くべきものとし、其の就學義務年限を三箇年に延長し、又師範學校の設置を府縣に强制したのである。

かくて本縣に於ては明治十二年に學區取締を廢し、學務委員を選擧し、又石川講習校を廢して石川成年學校が設置された。翌年には安積郡郡山に福島縣郡山農業學校を開設し、十九年頃まで存續した。十六年以後には町立中學校が安達・三春・平に設けられ、次で福島・若松・平に縣立中學校が生れ、外に町村立として田村中學校が出來たことは前述の通りである。

小學校の方は十七年に八百餘校、兒童七萬八千餘人といふ數を示してゐる。當時教育學風はペスタロッチーの主觀的自然主義と、スペンサーの生物學的科學本位の教育說とが大いに歡迎され、又直觀教授開發教授に依る心意の啓發に努力されたが、概して知育萬能の情態を現し、歐化主義の流弊さへ見るに至つたのである。

## 四、學校令時代の教育

明治十八年十二月官制の大改革があつて、森有禮氏が新に文部大臣に任ぜられたが、大いに教育制度の刷新を行ひ、十九年三月には帝國大學令を發し、四月更に師範學校令・小學校令・諸中學校令・學校通則を發布したが通常之等を總稱して學校令と呼んでゐる。

學校令の發布と共に小學・中學・師範は各々尋常高等に二級分され秩序整然たる系統をなすに至つた加ふるに教員免許狀、教科用圖書檢定、圖書供給方法、設備準則等の一大改正が行はれたので、本縣教育も之等諸規則に基き改善されたものが少くなかつた。就中學校改增築、縣立學事諮問會開設、優良教師を他府縣より招聘、女教員採用の奬勵、郡推薦師範生及び優等生の授業料免除等は特筆すべき事項である。

尙十九年には福島中學が桑野村に移り、各郡の私立塾、青年學校は廢止となるもの多く、白河實用校平の英學塾、英語夜學校等の私立學校が之に代つて起つた。二十年以後には三春英學校・白河惜分塾・須賀川英學校等が設立され、師範學校には兵式教練が行はれるやうになり、農業實習地が設けられ師範學校に女子部が創設され、師範・中學兩校には御眞影が御下賜となつた。

次に此の期に附記すべきは、福島師範學校卒業生の同窓會が創立されたことである。

福島師範卒業生齋藤政德氏等率先して明治十九年縣內師範卒業生の集會を圖り同窓會の規則方針を定めたが、二十一年一月四日福島高等小學校內に第一回總集會を開き、玆に同窓會が確立するに至つたのである。

又同窓會に關聯して教育會についても一言せねばならぬ。教育會に關しては明治十四年に郡教育會規

則が出來て各郡教育會の設立を見るに至つたが、十八年九月二十七日には福島縣教育會發會式が縣會議事堂で擧行され、各郡の私立教育會は之に合流することとなり、爾來教育會の活動は年を追ふて進展したが、遂に昭和九年には教育會館の落成を見るに至つた次第である。

次に明治二十三年には從來の小學校令を改正し、十月十六日勅令を以て新小學校令及び關係規定を公布されたが其の第一條に小學校教育の目的を明示した。二十三年十月二日には市町村立小學校教員退隱料及び遺族扶助料法が制定され二十四年十一月十七日には小學校教員檢定に關する規則が改正される等して、本縣教育も次第に内容充實するに至つた。加ふるに明治二十二年二日十一日には大日本帝國憲法を發布され、翌二十三年十月三十日には教育勅語を御下賜になり、我が立憲政治の大本確立すると共に教育方針は明確となつたのである。同年十一月よりは全國各學校に對し教育勅語の謄本が御下賜になつたので、本縣知事は勅語の聖意貫徹の件につき各郡に令達を發した。二十四年六月小學校祝日大祭日儀式規程を定められ、十月には御影並に勅語謄本安置の件について令せられ、本縣に於ても國民教育及び道德教育の貫徹に一層努力するの氣運に向つた。

當時教育學風に於ても漸く知的偏重を排して道德主義を主張するとともに、ヘルバルトの學說が鼓吹されて、所謂教育的教授、五段教授法等が流行した。

## 五、日清戰役以後の時代の教育

明治二十七八年戰役の結果は著して我が國民の自覺を高め、殊に此の戰捷は國民教育の道步が與り關するところ大であるとし、朝野の關心は教育上に注がれた。三十年には師範教育令が改正され、師範學校に尋常の二字を削り、女子部を獨立させ、三十二年には中學校令を改正し、各府縣に一校以上を設置すべきこととし、且つ私立中學校の設立をも許可し、又同年高等女學校令が發布された。三十三年には小學校令を改正して、義務教育年限を四箇年とし、又地方學事通則・小學校令・小學校令施行規則の三大法規が整備した。三十六年には小學校教科用圖書が國定となつたのである。

更に三十七八年戰役後は、社會萬般の事業概ね發展擴張の機運に向つたが、教育制度施設も之に伴ひ先づ四十年には小學校令及び同施行規則が改正され、義務年限は六箇年に延長され、又高等女學校令も改正となり、修業年限の延長を見四十三年には實科高等女學校を設くることを得るやうになつた。

飜て本縣教育を觀るに二十八年頃から中等學校入學志願者が激增し、殊に女子教育熱が盛になつた。先づ二十六年頃から私立會津女學校・福島町立高等女學校・小野新町裁縫專修學校・福島裁縫專門學校等が相次で設立されるに至つた。

一面本縣の實業教育も次第に盛となり、二十八年以後には若松に窯業徒弟學校が創立され、福島縣蠶

業學校が縣立となり、福島商業學校が設立され、次で漆器徒弟學校・會津技藝女學校・福島簿記學校等が續々起つた。

小學校の方は三十二年に五百餘校、生徒十二萬七千餘といふ數を示してゐる。

次に此の時代の初期に於ける社會教化は未だ進歩してゐなかつたが、それでも出版界では既存の福島新聞・福島民報の外に明治二十八年五月福島民友新聞の赤新聞が發行され、又他に隨時發行される小雜誌も二三あつた。更に二十六年には河邊圖書館が生れ、次で若松圖書館が開設され、其後金透圖書館が出來、古川社良氏の私設松塚圖書館等も生れた。かくて三十七八年以後は社會教化の方面も長足の進歩をなしたのである。

當時の教育學風を觀るに、個人的見地に立脚したヘルバルト派の教育說は衰へて、フイヒテ、シユライエルマツヘル等國家本位の教育學說が盛に歡迎され、又社會的教育學說・人格的教育學說も廣く傳へられた。加ふるに明治四十一年十月には戊申詔書の御下賜があり、教育者も聖旨を奉戴して勤勉力行の途に勵んだのである。

## 六、大正昭和時代の教育

大正六年九月二十日には臨時教育會議官制が公布されたが、此の臨時教育會は多年の懸案であつた小學校教育、高等普通教育、大學教育、專門教育、師範教育、女子教育、實業教育、通俗教育等について一年半に亘つて審議したが、是が大正教育制度の基調をなした。かくて教育費國庫負擔、中高等教育機關の大擴張、女子教育、社會教育、競技運動、軍事教育、國際教育等の諸問題が擡頭した。

本縣教育も之等の影響を受け各方面に進歩發展したのであるが、大正元年以降には若松商業學校・喜多方實科女學校の外三春圖書館・若松星野圖書館・近津山岡圖書館等が設立され、又通俗講演會、乃木祭、精神作興等の施設が盛に起つた。次で縣立白河農學校が設けられ、棚倉圖書館等が開館となり、又青年團處女會が奬勵されるやうになつた。五年には青少年團準則が編成されるし、翌年には川俣實科女學校が新設され、又此頃から生活改善、自由解放の聲が巷に滿ち、自學補導創造教育が盛となつた。八年に至れば近來實業教育奬勵の結果、須賀川に町立商業學校が建ち、坂下實科女學校・須賀川實科女學校・梁川實科女學校が設立を告げた。十一年には官立福島高等商業學校及び保原中學・白河中學が創立されたが、此の頃から政治・思想、經濟・社會の諸問題に關聯し、公民教育研究が盛になると共に、一面には精神檢査、學校調査、教育測定等が流行した。十二年以降には安達中學・田村中學・双葉中學が出來、又町立石川實科女學校が創立され、次で富岡實科高等女學校・棚倉實科女學校が創立されたが、一面行政整理、軍備縮小等の斷行があり、失業問題が起り、教育界も多難となつた。十四年頃から成人教育施設、青年團改造の議が盛に起り、各中等學校には兵式教練が課され、師範教育改善が叫ばれた。

昭和元年は教育制度の改正多く、先づ郡視學は縣視學に更まり學務部が獨立して其の中に學務課・視學課・社寺兵事課が分置された。小學校令に改正が行はれて實業科が加設され、手工が必須科となつたが、一面思想方面の取締も重要視されるに至つた。昭和三年頃からは三・一五事件、五・一五事件、血盟團事件等に鑑み、益々左傾右傾の防止に苦心すると共に、空理偏知の教育よりは、實業教育、生活指導、鄉土教育、社會教育等に努力し、農村振興の策を講ずることに苦心した。八年三月二十七日國際聯盟離脱の詔書煥發せられ、國民精神は益々緊張し、今や日本精神の發揚、國體觀念の明徵、公民教育の徹底、勤勞作爲の教育等は教育界努力の的となつた。

## 二一、本縣略史

皇威未だ洽ねからず、蝦夷の巢窟と目されて居た東北地方も崇神天皇の十年四道將軍の派遣によつて大彦命とその御子武渟川別命とが我が會津の地で相會し、親子の情を溫められてから漸く皇澤に霑ひ初め、次いで景行天皇が東西經營の大方針を樹立されると先づ武内宿禰を派して視察せしめられた。宿禰は蝦夷を招撫すれば大和民族發展の好適地であることを歸つて奏上し、ここに天皇の四十年日本武尊の御進發となつた。尊は本縣濱通を經て蝦夷の本據日高見國まで至つてよく之を招撫された。かくて成務天皇の御代に至りその効果が現れ、大和民族發展の爲め我が縣内にも行政機關の設置を見阿尺、染羽、浮田、信夫、白河、石背、石城の國造、應神天皇の御代には道奥菊田の國造が置かれた。奈良時代には律令の徹底と共に交通も開け、重要道路に沿ひ驛も置かれ驛馬、傳馬も配置され漸次都の人々にも紹介される樣になり、石城、石背の二國が陸奥國から分離したことさへあつた。黄金花咲く國の中の會津、安達太良、安積山等の風物は萬葉集にも詠ぜられた。

桓武天皇は平安遷都と共に東北開拓の完成を期せられ坂上田村麻呂をしてこの事に當らせた。田村麻呂經營大いに努め遂に延暦二十年その目的を達成した。この爲め中央の文化も本縣内に傳播し佛教も弘り、特に會津勝常寺に見られる樣な優れた佛像も安置される樣になつた。藤原氏全盛の頃地方政治は顧みられず東北地方も亂れ、安倍頼時及びその子貞任、宗任の跋扈となり源頼義は朝命を奉じて子義家と共に之を平定した。之が前九年の役である。この役の功により安倍氏の舊領を支配する樣になつた清原氏に内訌が起つたので陸奥守源義家は再び奥州に入り藤原清衡の助力を得て鎭定した。之を後三年の役といふ。この時義家は勿來の關を過ぎて「吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな」と詠じた。

源頼朝が鎌倉幕府を創設し武家政治の世となると、平泉の藤原氏の勢力は幕府の政策の障害となつた殊に義經が平泉の藤原秀衡にかくまれた事が知れると、頼朝は秀衡の亡後その子泰衡に强要して遂に義

經を殺させ、尙もあきたらず藤原氏征討の軍を奥州街道、濱街道、越後路の三道から進發させた。文治五年七月賴朝の自ら率ゐる本軍は早くも白河の關を通過した。從軍の梶原景時は初秋なので能因法師のことを思ひ出し「秋風に草木の露を拂はせて君が越ゆれば關守もなし」と雅懷を述べた。越えて八月那那坂の合戰には大鳥城を根據地として居た信夫庄司、佐藤元治は鎌倉方の常陸入道念西（中村朝宗）の爲に一敗地に塗れ、厚樫山の激戰には鎌倉方の勇將畠山重忠、結城朝光等の奮戰により泰衡方の重鎭西木戸國衡は討死し、次いで平泉も陷り奥州一圓源氏の白旗の翻る所となつた。石城郡白水の阿彌陀堂は平泉金色堂の影響を受けたもので當時の進んだ文化を物語つてゐる。

北條氏の失政は武家政治の瓦壞となり、建武中興による天皇親政は再び輝いた。この時後醍醐天皇は皇子義良親王を奥州に遣され北畠顯家は若年ながらも親王を奉じ、又父親房の補佐を得て多賀城に入つた。足利尊氏が叛旗をかゝげたので之が征討の爲親王及び顯家は上京したが尊氏の西走により再び奥州に御下向になつた。延元元年尊氏再擧し楠木正成を湊川に討死させて入京した。この時奥州にも尊氏に味方するものがあり多賀城も危險になつたので親王は我が靈山に移られた。本縣内の伊達氏、結城氏、田村氏等は皆忠誠を致した。吉野に還幸された後醍醐天皇からの御命令により親王は延元二年再び上京された。顯家をはじめ結城宗廣、伊達行朝等扈從し奉つた。延元三年五月顯家が石津で戰死してから守永親王（尊良親王の王子）が興國四年十一月常陸關城から本縣宇津峯城に入られるまで顯家の弟顯信は奥州の官軍を統率したが勢は漸次振はなくなつた。

足利幕府の末群雄割據の頃には會津の蘆名氏、伊達の伊達氏、白河の結城氏、磐城の石城氏、相馬の相馬氏等が割據したが中でも蘆名と伊達が勢を振つた。伊達氏に獨眼政宗が現はれると漸次領土を擴め信達地方はもとより相馬方面にまで勢力を及ぼした。天正十七年六月政宗は會洋の强豪蘆名義廣を磨上原に破つてから一層强大となつた。蒲生氏郷は小田原征伐の功により天正十八年會津に封ぜられ、黑川を若松と改稱したが慶長三年宇都宮に移り上杉景勝が代つて會津を領するに至つた。翌慶長四年秀吉が薨ずると景勝は石田三成と通じて德川家康に叛き會津の防備を嚴にした。この際に政宗は先に失つた信達地方を回復する爲進軍し大佛城（福島）に居た本莊繁長と松川に戰つて敗退した。關ヶ原の一戰は石田三成の大敗により天下はいよ〳〵德川に歸し、景勝も德川に降り慶長六年米澤へ轉じ會津には再び蒲生氏が封ぜられたが、次いで加藤氏を經て寛永二十年將軍德川家光の弟保科正之が封ぜられ藩政の刷新を行ひ獨特な藩風を樹立した。

德川時代元祿の文化華かに咲いたとき俳聖松尾芭蕉は杖を奥の細道に引き、白河から須賀川、二本松安達ヶ原、信夫文字摺、飯坂を經て大木戸を越し松島へ向つた。醫王寺を訪れて義經、辨慶を偲び「笈も太刀も五月にかざれ紙幟」の句を殘したのはこの時である。

賢相松平定信（樂翁公）が白河藩主となつたのは天明三年で八代將軍德川吉宗の孫であつたが、白河

松平家の養子となつたのである。殖産興業はもとより文教に至るまで鋭意藩政を整へ又幕府の老中に擢用されては天下の財政を整理し海防にも盡力した。

萬延元年井伊大老横死の後平藩主安藤信正は老中として内外多事の難局に處し、公武合體を唱へて和宮様の御降下に盡力し、尊王志士の恨を受け、文久二年正月板下御門外に要擊されて傷き職を辭した。

文久二年八月會津侯松平容保は血涙をのんで京都守護職の難職に就任した。この間に長州藩の參與した攘夷御親征の議を中止せしめるには薩桑二藩と智腦をしぼり元治の變に際しては蛤御門で會津武士の本領を發揮して長州勢を擊退し、京都の治安を維持する爲には浪士の取締に心を碎き、朝廷と幕府との融和の爲には日夜寢食を忘れて努力したので、畏くも孝明天皇の御信任を厚うし御勅書を兩度まで賜つた。世局は一變して大政奉還となり德川の葵はしほれ菊花輝く大御代となつたのに、勢の赴く所戊辰の役を惹起し我が縣内も戰禍に襲はれ二本松少年隊の奮戰あり、つゞいて會津は官軍の包圍を受け孤城より一ケ月を支へた。籠城中に於ける會津武士の奮鬪、殊には白虎隊士が雷の花と散つた壯烈なる最後は全く藩祖正之公以來培はれた精神を遺憾なく發揮したものである。

戰塵鎭り版籍奉還、廢藩置縣と明治の新政は着々進み明治四年十一月磐前縣、福島縣、若松縣は置かれた。九年八月にこの三縣を合せて現在の福島縣とした。

明治九年と十四年との兩度にわたり明治天皇の御巡幸を賜り、縣民等しく聖駕を拜し皇恩のありがたさにむせんだ。これを轉機として大御心に添ひ奉る爲縣内の產業、敎育その他諸般の文化が著しく活躍し出した。

明治五年の學制頒布以來敎育は普及し早くも明治九年には小學校數は千三十四校に達し徴兵制度が施行されると本縣壯丁は勇躍その義務に當り、地方自治制度が實施されると實に本縣は立憲思想の發源地の觀を呈し、明治二十二年帝國憲法の發布に至るまでに盡した努力は計り知れない程である。

明治五年早くも福島郵便局は設けられ、つゞいて爲替・電信・電話等各種の遞信事業は開始され、鐵道も明治二十年に開通した、東北本線を初めとして縣内各地に通じ、文化の進歩は目まぐるしい程であつた。

日清、日露の役は勿論滿洲事變等に於ける本縣出身兵士の活躍の目覺しさは萬人の等しく認める所である。昭和の新時代躍進の時に當り本縣の過去を回想すれば我等縣民の覺悟亦新なるものがある。（終）

## 二二、本縣の人物

奥羽の地由來南日本に比して人物輩出せず頗る遺憾とする。然し本縣は東北一帶よりながむるの時東奥の門戸たるの故を以つて文化の浸潤早く、古來傳ふべき人物の輩出も尠なくなかつたが、南方の如くその研究と紹介とを敢てせざりしため、特にその功名業績が隱れてゐたかの憾みもないではない。鄉土

人物研究の必要はまさに玆にある。かの本縣人の特殊氣質である倚尖剛健、特に勇悍を誇り志極めて潔白な美質は古來の本縣偉人傑士の間によく現されてゐる。今史を繙き人物を列擧せんとして決してその少きを歎ずるものではない。本篇は紙數の制限があるので主要人物を摘出する程度にとゞめてその概要を記すことゝした。

## ◎偉人小傳

### 結城宗廣

宗廣は祐廣の子で白河を距る里餘大沼村搦山に居城した。勤王の志厚く北畠顯家の鎭守府將軍に任せらるゝや其副となり各所に轉戰し、安濃津に客死した其子親光亦忠烈の士であつた。

### 大僧正天海

天海は會津高田の人、父は蘆名氏の臣、船木道光、幼にして僧となり隨風と稱し、後ち天海と改め日光廟及東叡山寛永寺を創成した。家康の覇業に參畫し慶安元年勅して慈眼大師の諡を賜つた。

### 保科正之

正之は德川秀忠の子家光の弟で慶長十六年江戸城に生れた。幼にして信濃國高遠城主保科正光の養子となり保科氏を冒し寛永十三年歳二十六で出羽國最上城に移り二十萬石を領し、尋で同二十年會津若松城に轉じ二十三萬石を領した。後年將軍家光の遺命を受け世子家綱を輔佐し天下を治ゐること二十年治績大に擧り、寛文十二年六十有二歳にして薨じた。

### 田中正玄

正玄幼名は右京後に三郎兵衛と稱した。父清右衛門玄重佐渡に至り野本氏を娶りて正玄を產んだ。正玄甫めて十五歳にて保科侯正之に仕へた。侯其武を異として恩眷日に厚く其の會津に移るや正玄を以て家老職の首となし管內の政を擧げて正玄に任じられた。正玄の事を見る公正にして意治に勵み大に藩政を革め、士民倚賴し皆其惠に懷くに至つた。寛文十二年五月病て卒す。信彥靈社と謚し磐梯山麓に葬られた。時に年六十六であつた。

### 山鹿素行

素行、通稱は甚五左衛門、名は高祐又義矩、字は子敬、素行は其號因山とも號した、會津の人で天資俊邁經書に深く又兵學に通じ所謂る山鹿流を大成した。性至誠にして世に阿らず其著聖敎要錄のため罪を獲後ち赦され晩節を全うした。

### 山崎闇齋

闇齋通稱嘉右衛門、名は敬義、闇齋と號した。元和四年京都に生れ、初め僧となり後髮を蓄へて儒に歸し寛文四年會津侯保科正之に聘せられた。

## 友松氏興

氏興の父を盛氏と云つた。土佐山内侯の臣であつた。氏興長じて京都に在り寛永十一年保科正之上洛の時土岐重元の推擧に依つて其小姓となる。寛文三年家老職に進み二千石を食んだ。藩主を輔けて治蹟があり田中正玄と並び稱せられた。

## 松平定信

定信は白河の城主で致仕の後樂翁と號した。田安宗武の第七子であるが松平定邦の嗣となつた幼名賢丸字は貞鄕旭峯と號し、寶曆八年江戸田安邸に生れ安永三年幕命により松平氏の養子となり、四年從五位下に叙し上總介と稱した。天明三年封を繼ぎ越中守と改め從四位下に進み文政十二年七十二歳にして薨じた。

## 亞歐堂田善

亞歐堂田善は通稱を永田善吉と云ふ。岩代國須賀川に生れ、父は五月幟を畫くを以て業とした田善幼にして畫を好み、長して父の業を繼ぎ後年僧月僊に就て學び領主松平定信の知遇を受け銅版鏤刻の法を創めた。

## 古河善兵衛

古河善兵衛重吉は信濃國更級郡鹽崎の人、來つて上杉候に仕へ其領陸奥國信夫伊達二郡の郡宰と爲り身を抛て水路を開き荒蕪を變して沃田と爲し後人惠に浴するもの多く治績頗る偉であつた。

## 澤村勘兵衛

勘兵衛勝爲は磐城平城主内藤義稠の臣で慶長十八年を以て生れ、長して郡宰となり小川渠を鑿ち水利の便を開いた、後人今に至るまで其德を稱してゐる。

## 松本重信

重信字は實甫め來藏と稱し、寒綠はその號である。會津藩保科侯の臣父祖共に儒官で江戸に出て昌平黌に學んだ。奇骨あり單身蝦夷に涉り又肥薩を極め邊境を憂へた。會々羽倉簡堂に從ふて伊豆の諸島を巡視したが颶風俄に起り船が覆つて歿した。天保九年閏四月享年五十であつた。

## 安積良齋

良齋通稱は祐助名は信字は恩順、良齋は其號である。儒を以て著れた寛政三年郡山に生れ萬延元年江戸に歿した、父は安藤親重と云ひ安積國造神社の祠官であつた。

## 池田胤直

胤直初の名は直常通稱を八右衛門後圖書と云つた、寛政三年正月八日相馬中村に生れ、俊才多智、識量儕輩に卓越した。文化八年二月相馬侯に仕へ使番役より進んで家老職郡代頭となり、衰政を改革して興國安民の法を行ひ、治蹟能く擧げ安政二年十月病んで歿した。享年六十五。

## 島田帶刀

帶刀は幕府の士であつたが、双葉郡廣野淺川陣屋の代官となり、後伊達郡桑折の代官となつた。清廉にして民を愛撫すること頗る深かつた。

## 熊川胤隆

胤隆通稱は兵庫代々相馬藩に仕へて一門の列に在り、文化十年相馬中村に生れた。奉重の第三子で出てで村田氏を襲いだが實兄皆死し遺子長祥尙幼少の故を以て藩主命して熊川家に復歸せしめ祥長の後見たらしめた。人と爲り俊邁弱冠にして既に闔藩の間に名をなした後相馬藩の郡代頭となり治績大に擧り慶應三年京師に客死した。享年五十四。

## 大僧正慈隆

慈隆の父は亀卦川東作と稱し陸奥國の人醫を以て業とした。其野州日光に在るとき慈隆を生んだ、慈隆幼にして倜儻不羈故なくして隣里の驕兒に辱められたるを怒り、刀を拔て之を斬つた、父は慈隆を日光山の佛門に投じた、時に文政八年年齒十三である。是に於て躍然志を改め深く儒佛の秘奥を窮め後年相馬藩の客鄕となり二宮尊德の仕法を贊し藩政の改革を冀し、勤王の大義を唱へ相馬藩をして將に倒れんとするを興復せしめた。

## 富田高慶

高慶は通稱久助相馬侯の世臣齋藤嘉隆の子文化十一年を以て相馬中村に生れ出でゝ同藩富田氏を繼いだ天明凶饉の後相馬藩領の衰憊其極に達し田園荒廢庶民離散するに當り、高慶慨然として之を救濟するの大志を抱き堅忍刻苦二宮尊德の教旨を奉じて能く之を實行し大に治績を擧げた。

## 平山省齋

省齋通稱謙次郎名は敬忠字は安民省齋はその號である。幕末に外國奉行となり海外事務に盡した。父は三春藩の人黑岡活圓齋と稱し擊劍を以て聞えた。

## 廣澤安任

安任は舊會津藩士である。幼にして健剛透純稍長ずるに及んで疎放小事に拘らず鄕黨私かに指目して曰く彼子疎大事業に堪へずと交友相語て曰ふ。彼れ小事に愚にして大事に智なりと、然し安任毀譽を以て心頭に置かなかつた。後學に學び業成るの後東西を遊歷し交を四方の名士に結び開港を唱へ國事に盡瘁した。戊辰の役起るや江戸に留り藩主の爲めに謝罪恭順に周旋したが成らず却て獄に投ぜられ纔に免かれて藩政に盡した。廢藩後產馬業に力を致し其成績大に見るべきものがあり。明治廿四年享年六十三で沒した。

（以上福島縣偉人事蹟に據る）

## 河野廣中

嘉永二年三春の鄕土廣可の三男に生れ、賢母リヨの教育に育ち、藩儒川前柴溪に就き學を修あた。戊

辰の戰役には藩意を官軍板垣參謀に披瀝するところがあり、後年自由民權を主張するの機因を作つた。長じて板垣と提携して民權自由を首唱し、國會開設請願運動に奔走した、福島縣會議長となり、福島事件に投獄し、第一回衆議院議員となり以來連續當選、或は副議長となり、農商務大臣となつた。大正十二年沒した。

## 新井石禪

元治元年十二月十九日伊達郡梁川町石井仙助の三男に生れた、幼名仙太郎、同町興國寺如禪師に從ひ十二歳にして得度し、峻然な指導を受け、十四歳嗣法し十九歳曹洞宗大學林學監兼教授を勤め、二十九歳新潟縣大榮寺雲洞庵に住職として專ら布教につとめ、再び本山に戻つて宗教學部長となり、名古屋に轉じ、小田原最乘寺に轉じ、大正九年總持寺貫首となつた。この年北米に渡り大統領に謁見した、昭和二年十二月七日六十四歳を以つて遷化した。大陽眞鑑大禪師、德行學識智德圓滿を以つて渴仰された。

## 野口英世

明治九年十一月九日、耶麻郡翁島村大字三和三城潟野口佐代之助の男として生れた、幼名清作三歳の時左手に大火傷を受けたが、博士の發奮の動機は玆に在ると言はれる。極貧の家に生れて神童の稱を受け、恩師小林榮の指導と援助によつて若松ドクトル渡邊鼎氏の塾に入り、獨逸カールデン原著の飜譯をした。明治二十九年には上京、間もなく醫術開業試驗に合格し、アメリカ丸船中に於てペストを發見し支那に招聘せられ、三十三年に愈々渡米ペンシルバニア大學に入つた、こゝで毒蛇の研究して青年野口の名を現し、研究費、學位を受け、歐洲留學血清學を研究し、時々世界の學界を驚かすの研究を發表し世界的醫學者の地位を確保し、日本よりは理學博士、帝國學士院賞を受け、エクアドル共和國から名譽陸軍大佐及名譽軍醫總監に任ぜられ、いろいろの大學の名譽教授に任ぜられた。昭和三年五月二十一日西亞弗利加西海岸アクラに於いて黃熱病研究中感染して萬里孤寥の境に不歸の客となつた。享年五十三勳二等に昇叙された。

## 大越中佐

石城郡內郷村大字白水大越重三郎の三男として慶應三年七月二十七日生れた。明治十八年陸軍教導團に入り爾後第四聯隊編入、明治二十七八年の戰役に出陣、三十五年には教育總監部出仕を仰付られた。越えて三十七年日露國交斷絶するや出征して金州、南山、得利寺の戰鬪に參與し步兵少佐に進み、更に大石橋、鞍山店、首山堡、遼陽、沙河黑溝台に奮鬪して感狀を得、三十八年三月七日李官堡の激戰に逢ふや、優勢なる敵軍の包圍に陥ち聯隊長は彈を蒙り、大隊長も傷ついた。氏はこの時既に敵彈を受けてゐたが、聯隊長に代つて聯絡を絶たれた旅團長に面してこの危急を救はんと包圍を突いたが、またも敵彈に倒れた、氏は傳令卒に命令を傳へ、携帶の書類を寸斷し御詔勅を嚥下し、徐ろに述懷書を記して從容拳銃もて自刄した。言々悲壯至誠溢れて全く橋中佐に次ぐの龜鑑と謳はれた。

## ◎善行者小傳

伊達郡掛田町　菅野平右衛門

資性温和篤實、殊に慈愛に富み、勤儉にして實業に勵精し、公共の利益を起すを以て樂みとした。家代々最も力を養蠶に致し、刻苦勉勵其飼養法を研究し、其蘊奥を極め大に發明改良する所があつた。

耶麻郡喜多方町　瓜生いわ

瓜生祐三の母で、人となり温柔質朴平素節儉を以て旨とし、且つ慈善の心に富んだ。十七歳の時瓜生家に嫁して一男三女をもうけたが、三十四歳の折、はかなくも夫を失つたので、それより寡居して固く貞操を守り、淑德の譽れいと高く、身を慈善に委ね、救濟所、育兒會を設け、貧困者を救濟し、かつ夙に墮胎の弊をかなしんで常にこれを矯めんとつとめた。

安積郡郡山町　今泉久三郎

久三郎は明治元年五月二本松藩廳より安積郡山宿檢斷役を命ぜられてから以後、守山藩笠間藩の取締又は白河縣管轄となつたが、依然勤續し、後明治五年副戸長となり、九年戸長となり二十二年町村制實施の際町長に擧げられた。任滿ちて再選せられた。人となり温厚品行方正よく町治を整理し、教育殖産興業衛生等に關し一として奮勵せざるはなかつた。

安積郡郡山町　阿部茂兵衛

茂兵衛は安積郡郡山町の紳商である。公同事業に盡瘁し、安積開墾及び安積疏水事業に勤めて、其の名鄕里の間に高かつた。文政十年同地に生れ明治十八年歿す。享年五十九歳であつた。

舊二本松藩士　中島淳

黄山は其號である、布衣より起り舊二本松藩の儒臣に擧げられ、勤王の志厚く、明治三十年九月新潟縣大屬に任し、同年十一月病んで歿した。享年五十六歳であつた。

舊二本松藩士　三浦義彰

義彰は舊二本松藩士で、文武を共に能くし尊王の義を唱へ、戊辰の役に藩命默し難く矢を折り王師を迎へ難に殉した。享年三十三であつた。

（以上福島縣善行小錄による）

### 本縣人御贈位者調

（大正四年以降　福島縣知事官房調査）

大正四年十一月十日　（大正天皇御大典）

贈從四位　故　安積祐助（良齊）
贈從五位　故　澤村勝爲
同　故　田中三郎兵衛（玄宰）
同　故　山本疊馬

同　　故　古河善兵衛
同　　故　佐藤新右衛門

大正七年十一月十八日　（陸軍特別大演習）

贈正二位　故正三位　紺野宗廣
贈從三位　故從四位　相馬光胤
同　　故正四位下　松平容頌
贈正四位　故　田村輝定
贈正五位　故　秋田昌臥
同　　故　橋本正茂
贈從五位　　田中三郎兵衛（正玄）

大正十三年　（皇太子殿下御結婚）

贈從三位　故正四位下　松平容敬
贈從五位　故　爪生いわ
同　　故　松井秀簡
同　　故　阿部茂兵衛

昭和三年十一月十日　（御大典）

贈正五位　故　佐藤豊助
贈從五位　故　中村善右衛門

## 名家氏族

本縣名家氏族領主諸侯にして本縣史上研究すべきもの鎌倉時代・南北朝時代・足利時代・德川時代に渉つて主なるものに左の諸家がある。鄉土教育上沒すべからざる人物がこの氏族から輩出してゐることは勿論である。

伊達氏、相馬氏、岩城氏、田村氏、河原田氏、山内氏、長江氏、石川氏、秋田氏、畠山氏、大内氏二階堂氏、結城氏、標葉氏、懸田氏、蘆名氏、佐原氏、猪苗代氏、金上氏、平田氏、蒲生氏、上杉氏、加藤氏、保科氏、安藤氏、丹羽氏、松平氏、本多氏、阿部氏、本莊氏、板倉氏、內藤氏、立花氏

## 小學校教材としての人物

小學校國史教育乃至鄉土教育上本縣關係人物として研究し置くべき前記後記以外の人物の主なるものを擧ぐれば左の如くであらう。各れも史籍の上に詳記されてゐるので略傳を省くことにした。

僧德一、岩城則道、佐藤基治、同繼信、忠信、佐原義連、伊達朝宗、同行朝、同輝宗、同政宗、畠山義繼、相馬師常、田村宗季、田村輝定、二階堂盛義、田村清顯、橋本正茂、蒲生氏鄉、加藤嘉明丹羽長重、本莊繁長、石川昭光、板倉重寛、松平容頌、安藤信正、松平頼升、相馬益胤、佐藤孟信

草野正辰、秋田靜臥、松平容保、松平容敬、寺西重次郎、山本覺馬、佐藤新右衛門、松井秀簡、祐天上人、本田忠籌、吉川惟足、白虎隊、二本松少年隊、會津戍役娘子軍、（近代人として）山川浩柴五郎、出羽重遠、南摩綱紀、山川健次郎、柴四郎。



## 藝文方面の人物

藝文方面の先人として左の人々の學問業績の研究は本縣文化の研究と關聯して大切な位置を持つものであらう。

### 信夫福島

儒者　石金宣明　武藤敬齋　山形順信　高橋恕南　中村以貞
書家　長谷川金龍　丹治淞江　松原甲賀　高橋遂堂
歌人　内池永年　木口訓重
俳人　一具庵　岡大費　鐸木四美　同馬巖
詩人　池田梧鳴　堀井半峰　小田藍州
國學者　佐藤神符麿　石金晉主　内池永年　木口弘記
畫家　清瀨白山　佐原玉山　金澤椿山
沙門　日達上人
文士　原抱一庵

### 伊達

儒者　熊坂臺州　同霸陵　同磐谷　中木好問　石幡貞
歌人　熊坂鷹子　菊田關雄　安藤野雁　奥山照子　菊田芳嵐　菊田和平　久保篤見　縣田訓平
畫家　熊坂適山　同蘭齋　菅野梁川　藤原涼竹　西山雲洞
俳人　佐藤馬耳　僧通阿　富田洋々亭　渡邊桑月
沙門　無能和尚　不能和尚　新井石禪　新井如禪
文士　野村隈畔
醫者　小野隆庵　桑島之立

### 安達

儒者　岩井田昨非　三谷愼齋　十河普齋　大谷士由　中島黃山　大鎭義鳴
歌人　小沼幸彥　安部井磐根　鈴木堯民　安部井春蔭　松本茂彥　熊谷鶴城
詩人　堀井半峰　竹内東仙　堀六石　田島久敬
書家　杉田肅軒　菊池亘澄　丹羽明齋　武田暎隨
俳人　鹽田冥々　菅野乙調　根本與人　服部文車　荻生兒川　日野尙我　今泉柳依　渡邊羅月
畫家　根本愚州　大原文林　白雲　山本雲山

### 安積

儒者　安積艮齋
書家　齋藤芳州
畫家　鮒澤耕山

### 岩瀨

俳人　相樂等躬　栗齋可伸　山邊清民　山邊曉窓　石井雨考　鹽田文起　市原多代女　内藤漸風　藤井（刀工）　古山陸奥之介　駿河安正直

普流　栗本壯山
畫家　亞歐堂田善　田驥
儒者　常松菊畦
佛師　吉田左門
歌人　服部躬治

東四白河

儒者　廣瀨典　成島錦江
歌人　松平定信　大屋裏住
畫家　蒲生羅漢　春木南溟　春木南湖　川驥隆古
史家　箭内亙

石川田村

儒者　平野金華　佐久間熊水　平山省齋　大内熊耳　山地厚載　熊田淑軒
詩人　河野廣中　千河岸貫一　松平頼寛
歌人　三浦守治　飛田昭規
文士　熊田葦城　鈴木如水　琴田岩松
俳人　三森幹雄　大方可宗　吉田乙路　佐久間法師
畫家　倉谷鹿山　德田研山　畫僧雪村　上遠野波岳
算家　佐久間庸軒
彫刻　伊藤光運

相馬

俳人　草野正辰　佐藤孟信



詩人　海東驥衡　井土靈山　氏家閑存
書家　能川孟信　齋藤高行
刀工　宇田國宗　慶心齋正直
歌人　田代滿清

双葉

詩人　錦織晚香　谷宗弘　馬場樂山　西植堂

石城

詩人　大須賀鶴軒
儒者　神林復所　同惺齋　鍋田晶山　室櫻關　朝日一貫齋　本多忠怒　本田忠馨
歌人　天田愚庵　吉田敦和
俳人　内藤露沾　安藤信友　飯塚浪鼓　梅月庵良德　大須賀乙字
沙門　祐天上人　良定上人　原旦山　鐵眼禪師
金工家　根本國虎　鈴木貞則　惠秀
畫家　青沼擣山　雪閑

會津

儒者詩人　服部尙由　秋月胤永　南摩綱紀　佐治爲秀　鹿野嚴々齋　秋月胤繼　佐原盛純　山鹿素行　山崎闇齋　安部井帽山　土屋壺閔　服部如黠　横田俊益　廣澤安任　高津淵川　橋爪晒齋　生駒直方
國學者及歌人　猪苗代兼栽　北原雅長　黑河内傳五郎　宮城三平　吉川惟足　小川清流　星野胤國　澤田名垂　野矢常方　友松氏興　宗川儀八郎　西郷頼母　諏訪方佑　中野理八郎　安田樂山　相川功
書家　垂　安部井冀園　星忠雅　無爲庵如默　星曉村
莊田膽齋　山内香雪　星研堂　佐瀨得所　武井柯亭　渡邊文龍　松本皐鶴　佐藤可林

畫家　佐野石峰　佐藤適圃　加藤遠澤　遠藤香邨　浦上春琴　佐竹永海　佐竹永湖　歌川國政　浦上秋琴　鹽田手渚　萩原磐山　田村觀潤　小田切克齋　永峰榮水　竹内賢松齋　竹内澤潤　遠藤雲岱

文章家　柴東海散史

沙門　天海僧正

刀工　三好長道　古河兼定　鈴木兼友　中條道辰　皆川宗壽

金工　下坂爲衛　小熊國安

俳人　豊島松圓　伊藤朶年　關本巨石　同如髮　玄々齋美都麿　壯齋文窓　荒川梅二　齋藤阜雄　山本梅龍

## 二三、名勝舊蹟

縣内名勝舊蹟、神祠佛閣、城趾、山川、古墳、古瓦等三百餘項を摘錄したが、これは所在を示した程度のものである。

### □文部省指定史蹟名勝並に天然記然物實地調

文部省指定及假指定の史蹟名勝天然記念物の本縣關係所在地左の如し（本縣社寺課ノ調査ニ據ル）

⊙指定史蹟

甲塚古墳　石城郡夏井村

南湖公園　四白河郡白河町

新地目塚手長明神社址　相馬郡新地村

藥師堂石佛附阿彌陀堂石佛　相馬郡福浦村

觀音堂石佛　同

宇津峰　石川郡小鹽江村、田村郡谷田川村、同二瀬村

泉崎横穴　四白河郡川崎村

靈山　伊達郡石戸村、靈山村、相馬郡玉野村

若松城址　若松市字鶴ヶ城

下鳥渡供養石塔　信夫郡鳥川村

石母田供養石塔　伊達郡藤田町

須釜東福寺舍利石塔　石川郡須釜村

二本松城戒石銘　安達郡二本松町

⊙明治天皇行幸關係地

明治天皇桑野行在所　郡山市

同　須賀川舊產馬會社　岩瀬郡須賀川町

同　大藏壇原御小休所及御野立所　安積郡大槻村

同　笹川御小休所　同　永盛村

同　笠石御小休所　岩瀬郡鏡石村

同　久來石御小休所附御膳水　同

同　白河安在所　四白河郡白河町

同　本宮行在所　安達郡本宮町

同　二本松御野立所　　同　二本松町
同　桑折御小休所　　伊達郡桑折町
同　大笹生御小休所　　信夫郡大笹生村
同　大瀧御小休所　　同　中野村
同　伏拜御野立所　　同　杉妻村
同　横森御野立所　　安積郡日和田町

◎假指定史蹟

夏井廢寺塔址　　石城郡夏井村
白虎隊自刄址　　北會津郡一箕村
一里塚　　岩瀬郡須賀川町
蝦夷塚古墳　　岩瀬郡濱田町

◎指定名勝

會津松平氏庭園　　若松市
須賀川牡丹園　　岩瀬郡須賀川町
開成山（櫻）　　郡山市

◎指定申請若クハ指定セントスル史蹟名勝地

白河關址　　西白河郡古關村
勿來關址　　石城郡勿來町
感忠銘磨崖碑　　西白河郡大沼村
日本武尊傳說地　　同　金山村
野口英世生宅　　耶麻郡翁島村



大越中佐生宅　　石城郡內郷村
舊奥州街道　　岩瀬郡鏡石村
同　　西白河郡矢吹町
產馬天覽之場所　　同　白河町

◎指定天然記念物

三春瀧櫻　　田村郡中郷村
吾妻山八重白石南自生地　　信夫郡庭坂村
赤井谷地沼野生植物群落　　北會津郡湊村
荒井の大やまもみぢ　　田村郡中妻村
大善寺の藤　　同　守山町
瀧根入水鍾乳洞　　同　瀧根　山根村
かもしか　　吾妻　飯豊　尾瀨地方
猪苗代湖ミズスギゴケ群落　　耶麻郡翁島村南眞行地內

◎假指定天然記念物

平伏沼「モリアヲカヘル」繁殖地　　双葉郡川內村
赤津の大桂　　安積郡赤津村
中野垂栗　　同　中野村
高瀨の大欅　　北會津郡神指村
玉ノ井の馬塲櫻　　安達郡玉ノ井村

◎指定申請中のもの

杉澤の大杉　　安達郡新殿村

日中の藤　耶麻郡熱塩村
押釜の一本松　相馬郡石神村
甲塚の松　石城郡夏井村
關岡の大杉　東白川郡高城村
諏訪神社翁媼杉　田村郡夏井村
枝垂イチエ　大沼郡旭村
富田村の櫸　安積郡富田村
仁井田の根上り櫸　岩瀬郡鏡石村

## 古墳群所在地　□その他の名勝舊蹟

古墳

本縣の古墳分布は主として中央阿武隈川の本支流、會津阿賀川本支流、鮫川以北、各河川の沖積地帶及海岸方面に多く、概ね圓墳、横穴墳にして中には泉崎古墳の如き荒田目甲塚、濱田兜塚、山崎古墳の出土品の如き學界に寄與すること多き貴重なるものもあり。尙この外に貝塚少なくなし。

泉崎横穴　西白河郡川崎村泉崎、四注式の玄室にて朱色を以つて渦卷、丸、平行線騎馬、人物、女性等を描畫しある珍らしき古墳史蹟地に指定さる。

夏井甲塚　石城郡夏井村大字荒田目にある夏井川の畔に模式的の威容を示す。

山崎古墳　耶麻郡慶德村字山崎にあり、發掘品多く昭和九年金山より發掘したる石櫃鑄銅經筒五鈷鈴獨鈷杵は學界に稗益する所が多い。

古墳群　本縣古墳中群をなして存在するものゝ中有名なる地名を抄記す。

海岸地方　石城郡＝勿來町(横穴、圓墳)錦、植田、泉、渡邊、玉川、磐崎、鹿島

江名、高久、飯野、夏井、好間、平窪、大野、大浦(横穴群)
大野、平窪、好間、江名、磐崎、(圓墳群)
双葉郡＝木戸、龍田、富岡、新山、長塚、幾世橋、(横穴群)龍田、熊田
新山、浪江、幾世橋(圓墳群)
相馬郡＝福浦、小高、大甕、太田、石神、眞野、上眞野、八澤、八幡、
飯豊、中村、松ヶ江、駒ヶ嶺、新地、(横穴群)小高、福田、新
地、大野、八幡、上眞野、眞野、原町、太田、(圓墳群)

中通地方　東白川郡＝近津(横穴、圓墳群)
西白河郡＝白河、大沼、小野田、三神、川崎、(横穴群)、金山、古關、五箇
釜子、吉子川、三神、(圓墳群)
石川郡＝澤田、淺川、泉、川東、小鹽江、(圓墳群)小鹽江、泉(横穴群)
岩瀬郡＝濱田、稻田、(横穴群)
田村郡＝守山、(圓墳群)高瀬、(横穴群)
安積郡＝大槻、(圓墳群)
安達郡＝本宮、大山、玉ノ井、(圓墳群)大山(横穴群)
信夫郡＝岡山、瀬上、杉妻、鎌田(圓墳群)
伊達郡＝上保原、森江野、太田、保原(圓墳群)藤田(横穴群)

會津地方　耶麻郡＝慶德、(横穴群)駒形、岩月(圓墳群)
河沼郡＝川西、廣瀬、八幡、(圓墳群)

## 古瓦出土地

泉長者舊蹟

虎丸長者蹟

杉田長者宮

福篦長社址

奈良平安時代古瓦出土地

大沼郡＝新鶴（圓墳群）

北會津郡＝門田、一箕、（圓墳群）

相馬郡高平村泉地方一町ばかり古瓦燒米等を出土し、長者傳說の口碑がある。

郡山市上台、源義家東征の頃虎丸といふ長者の住居址と云ひ傳ふ、古瓦燒末裝身具を出土す。

安達郡杉田村郡山臺、同樣の傳說地にして古丸、土器燒米出土

岩瀨郡白江村畑田、往古長者あり黃金千杯朱千杯漆千杯を埋むと西袋村にも同傳說がある。この他長者傳說を伴はざるも寺院址若しくは役所址と疊しき場所より出土する奈良期より平安朝初期までに屬する古瓦の出土地左の通りである

相馬郡中村町中野　熊野堂

同　高平村新田　新田廢寺

同　泉館前　館ノ前

同　大甕村　雫京塚澤

双葉郡新山町郡山　五番廢寺

石城郡夏井村　下大越廢寺

東白川郡近津村　堂平廢寺

西白河郡五箇村　借宿廢寺

福島市驛濱　腰潛富



## 神社

村社白河神社

縣社鹿島神社

國幣中社郡々古別神社

縣社桙衝神社

縣社安積國造神社

縣社開成山大神宮

縣社磐椅神社

縣社靈靈國神社

國幣中社伊佐須美神社

郷社心清水八幡神社

伊達郡穗江　觀音寺

西白河郡古關村白河關址にある所謂關の明神にて延喜式内である、境内に一町佛存す。

西白河郡大沼村、舊白河總社と稱し歷世藩主の崇敬する所、社に後醍醐天皇、結城宗廣に賜ふ節刀を藏してゐる。

東白川郡棚倉町と同郡近津村の兩所に在り、慕政の頃八槻の社は二百石棚倉の社は百五十石の靈地を有した。延喜式内大社。

岩瀨郡桙衝村延喜式内社、社域六町喬木が多い、祭神御雷神日本武尊。

安積郡郡山市阿尺國造阿賀岐山に勸請し天和中今の地に徙すと、境内安積艮齋の撰文の碑がある。

安積郡桑郡村、明治九年伊勢神宮の分靈を勸請す、安積開墾に際し神靈の加護を蒙ひしたのである。岩倉右大臣伊藤内務卿當時報賽してゐる。

耶麻郡磐瀨村、延喜式内、葦名、蒲生、上杉、保科、各藩歷世の國守之を崇敬した

若松市靈櫻町、延喜式内、社記に弘仁二年創立すと記す。

大沼郡高田町、延喜式内大社、明治六年國幣中社に列せらる、初め御神樂嶽に在り、後博士山に移り又神明嶽に轉じ、欽明帝の御宇今の地に移れりと、明治三十年八月炎上、明治三十二年九月新宮造營成る。

河沼郡塔寺村、天喜中源頼義創建、後義家之を葺補祈願を祈ると云ふ、昔時殿宇宏壯政宗、葦名を攻むるや之れを保護し保科正之崇敬祀田を奉る。

縣社隱津島神社

官祭信夫山招魂社

縣社黑沼神社

小社機織神社

別格官幣靈山神社

縣社飯野八幡神社

本縣延喜式內社

此社に本社創始以來毎年の豊囚治亂災異等を祀せる、所謂塔寺長帳珍藏さる。

安達郡木幡村俗に木幡の辨天樣と稱す、延喜式內、社域二十六町餘喬木森立殿宇宏麗、源頼義父子東征刈田嶽に敗れて此に祈りしに、滿山の樹木白旗と變じて賊に見え勝を獲との傳說である。

福島市信夫山、明治十二年創建、戊辰役、丁丑の役、明治二十七八、三十七八年戰後以降滿洲事變に至る迄の戰死者の靈を祀つてある。

福島市信夫山、延喜內式社、古木像二軀を藏す、鳥海三郎夫妻の像といひ源義家の安置せしものと云ひ傳へられてゐる。

伊達郡飯坂村小手姫社と稱し、桑蠶機織の人々の信仰が多い。

伊達郡靈山村北畠親房、同顯家、同顯信、同守親の四公をまつる。岩倉右大臣奉納の戊辰征討の際揭ぐる所の錦旗一幅を藏してゐる。

石城郡平町源頼義東征の時男山八幡宮の分靈を勸請すといふ、祠官飯野氏に鎌倉時代古文書二百通を藏してゐる。

右の外延喜式內にして有名なる神社左の通り

小社磐戸別神社(西白、古關村)村社永倉神社(西白、西郷村)村社飯豊比賣神社(西白、小田川村)八溝嶽神社、郷社都々古別神社(石川郡石川町)村社飯豊和氣神社(安積三和村)郷社宇奈己呂別神社(安積穗積村式內大社)村社鹿島神社(信夫郡大笹生村)村社東屋沼神社(信夫郡平野村式內大社)村社冠嶽神社(相馬上眞野村)郷社子眉嶽神社(相馬郡駒嶽村式內大社)郷社鹿島御子神社(相馬鹿島町)



村社御刀神社(相馬鹿島町)村社押雄神社(相馬石神)郷社高坐神社(相馬石神村)郷社日祭神社(相馬大甕村)郷社多珂神社(相馬太田村式內大社)郷社益多嶽神社(相馬小高町)縣社若野神社(双葉請戸村)縣社子鍬倉神社(石城平町)郷社鹿島神社(同鹿島村)郷社住吉神社(同玉川村)郷社佐麻久嶽神社(同飯野村)縣社大國魂神社(同夏井村)郷社二俣神社(石城郡小川村)郷社溫泉神社(同湯本村)

倘田村郡七郷村王子神社本殿は特別保護建造物である。

倘大祭として參拜者の多いものに(伊達郡長岡)天王祭(信夫山)羽黑神社(泉崎)鳥峠稻荷祭(新鶴)立行事稻荷祭(松川)篠葉澤稻荷祭(川俣)春日祭(宮代)山王祭(小平潟)天滿宮祭(本郷)廣瀨祭(郡山)國造神社祭(二本松)八幡神社祭(中村)相馬神社祭(上三寄)金峯神社祭(野澤)大山神社祭(福島)稻荷祭(草野)花園神社祭(本宮)安達太良神社祭(浪江)出羽神社祭等がある。

若松市榮町、弘安中歸化僧大圓禪師創建、本朝十刹の一に列し寺域方八町なりしも戊辰の兵燹に蕩盡舊觀を存しない。

河沼郡柳津村、圓藏寺之を管し、大同中空海創建、本朝三虛空藏の一、今の堂宇は文政中の建立、古書畫を藏し、遠近の寒者が多い。

辨天堂奥の院は特別保護建造物である。

河沼郡堂島村、會津の高野山と稱し、空也上人の創立、天正年間伊達政宗に焚かれ、阿彌陀堂は足利時代の建造にて特別保護建造物である。

寺

興院德寺

御津虛空藏堂

八葉寺阿彌陀堂

立木觀音　河沼郡堂寺村、國寶の條に別記する。
地藏堂　同　日橋村、同前藤倉二階堂ともいふ。
勝常寺　同　勝常村、同前
田子藥師堂　大沼郡新鶴村、同前
藥王寺　信夫郡清水村信夫山、明治二十九年寺後の叢林中より弘仁年間その他の銅牌五枚を掘出し現存してゐる。
天王寺　信夫郡飯坂町天王寺、古寺にして經筒を發掘珍藏してゐる。
醫王寺　信夫郡平野村、境内佐藤元治夫妻、繼信忠信の墓があり、關係遺物數種を藏してゐる。
靈山寺　伊達郡靈山村、往時靈山の頂にありしも慶長中此の地にうつる延元の亂に足利勢に燒かれた。
波立寺　雙葉郡久之濱、西行法師の詠「陸奥のこのみの濱に一夜ねてあすや拜まむ波立の寺」を以つて有名である。
藥王寺　石城郡大野村、國寶文珠菩薩騎獅像絹本彌勒菩薩一幅を藏してゐる。
地藏堂　石城郡大浦、國寶地藏菩薩木像一軀を藏してゐる。
赤井嶽藥師堂　石城郡赤井嶽にあり、德一大師の建立、石城三藥師の一、龍燈の奇觀がある
白水阿彌陀堂　石城郡內郷村大字白水、特別保護建造物にして國寶である。
其の他　右の外國寶を有する寺院(福島市)眞淨院　若松市)宗英寺(耶麻郡關柴)藥師堂(河沼郡廣瀨村)淨泉寺(河沼郡上野尻村)西光寺(大沼郡高田町)龍興寺(東白川棚倉町)都々古別神社(石城郡夏井村)如來寺(同大浦村)長隆寺(同大野村)長隆寺(耶麻郡上三宮)願成寺(大沼郡高田町)法幢寺あり、尙參詣者の多い寺院に(新鶴)中田觀音(西若松)北山藥師(本郷)良堂不動尊(黑岩)虛空藏(高田)文珠堂(岩角)岩角の辨天參り等がある。



## 古戰場

人取橋古戰場　安達郡青田村青田川の邊、天正十六年伊達氏と蘆名、佐竹等と玆に戰ふ
栗の須古戰場　橋東松林一堆の塚を功士壇と云つてゐる。
　安達郡石井村、天正十三年十月七日二本城主畠山義纒、伊達輝宗を拉し去らんとした、政宗之を聞き攻めて義纒輝宗を害し自殺し部下二十三騎戰死した。
石那坂古戰場　信夫郡平田村、文治五年源頼朝藤原泰衡を討つ、泰衡の將佐藤元治、伊賀良目高重等之を防ぐ、元治は戰死した。
磨上原古戰場　耶麻郡翁島村、字磨上の附近一二里の間を云ふ。天正十七年六月伊達政宗黑川城主芦名義廣を攻むるや、義廣の將猪苗代盛國、政宗に應ず、義廣、富田將盛をして磨上原に向はしむ。義廣の臣佐瀨種常、佐瀨常雄、金上盛備雄に殉ず、三忠碑はこの三勇士の芳烈を傳ひしものである。
長澤古戰場　双葉郡木戸村の南金剛川を前にする險所、大永五年磐城左京太夫常隆、相馬讃岐守顯胤の兵と戰ひて敗れた所である。
勝負澤　河沼郡川西村、大同年間の頃か惠白寺と惠隆寺に寺領の爭ひ生じ戰ふの地と云つてゐる。
戊辰の古戰場　耶麻郡熊倉村、山都村館ノ原、北會津郡門田村、一ノ堰、北會津郡門田村飯寺河原等會津戰爭の古戰場として有名である。
厚樫山古戰場　伊達郡大木戸村、文治年間藤原泰衡、源頼朝の大軍を此に防ぐ、二重堀定

## 城

**松川古戰址**

かに其の形跡を遺す、幅五間乃至七間深さ一丈に達する個所がある。
福島市　伊達政宗　本莊繁長と戰ふの所である。

**福島城址**

福島市、天正十九年木村伊勢守重次、大森城よりうつりて此に居り福島城と稱し、本莊、本多、堀田、板倉の各氏の居城となつた。

**伊賀良目館**

福島市五十邊、文治年間藤原秀衡の臣伊賀良目七郎高重玆に居つた。

**國府臺址**

信夫郡鎌田村、餘目村の境、源頼義東征の時、新羅三郎義光此に生ると傳へられてゐる。

**大鳥城址**

信夫郡飯坂町館ノ山、保元年間佐藤基治の居城、今飯坂町の公園鵬公園と稱してゐる。

**大森城址**

信夫郡大森村、城山天文年間伊達左京太夫朝宗以下之れに居た。

**長倉館**

伊達郡長岡村、阿部貞任、源頼義の大軍を拒きしの砦と云ひ傳へられてゐる。

**鶴岡城址**

伊達郡梁川町、文治年間中村常陸介朝宗以下の居る所、今公園小學校の敷地となつてゐる。

**靈山城址**

伊達郡石戸村、靈山頂上にあり北畠顯家、義良親王を奉じて據るのところ今國司館と稱してゐる。

**若松城址**

若松市、鶴ケ城と稱し天正十八年蒲生氏郷の入城するに及び、文禄年間之を築城し、上杉、蒲生、加藤、松平の居城となつた。

**猪苗代城址**

耶麻郡猪苗代町、若松城の枝城にして龜ケ城と稱す。佐原經連以下の居りしところ、蒲生以來明治に至るまで城代を置いた。

**青山城址**

耶麻郡上三宮、佐原氏(加納殿)の居る所といふ。

**新宮城址**

耶麻郡慶德村、新宮氏居城の址。

**神指城址**

北會津郡神指村、上杉景勝奉行直江山城守をして築かしめたるも故ありて果さずといはれてゐる。

**岩谷城址**

大沼郡原谷村、明德の頃葦名の臣井上某居住すと。

**玉繩城址**

同　川口村、天文の頃横田俊甫之を築くと。

**中丸城址**

同　横田村、文治年間首藤秀基築くと。

**中山城址**

同　大瀧村、建仁年間横田氏築くと。

**鳴山城址**

南會津郡田島町、源義經の臣長沼家政なる者築いたと。

**久川城址**

同　伊南村、文治年間河原田盛長築くと。

**岩岐山城址**

大沼郡本郷町、永禄中葦名盛氏築くと。

**中村城址**

相馬郡中村町、馬陵城大夫館と云ふ慶長年間の築城相馬氏の居城である。

**小高城址**

同　小高町、一名紅梅山浮船城といひ、建武の築城、相馬氏中村に移るまでの居城であつた。

**牛越城址**

同　石神村、文安年間には牛越上總介定綱が住した。

**田中城址**

同　鹿島町、桑折氏の居城なりしも天正年間より相馬郷胤の居城となつた

**富岡城址**

双葉郡富岡町、岩城氏の築くところ常に城代を置く。

**高倉城址**

同　廣野村、岩城氏の部將猪狩築後守隆清の據る所。

**木戸城址**

同　木戸村、同前

**新山城址**

同　新山町、元弘建武の頃標葉持隆の築く所である。

**郡山城址**

同郡新山町、標葉氏の分城標葉隆秀居つた。

平城址　石城郡平町、一名飯野城、鳥居左京亮忠政の築くところ、内藤、井上、安藤の諸藩の居城であつた。

湯長谷城址　同　磐崎村、内藤忠興其三男、遠山政亮を此地に築きて住ましめた。

中柴外城址　同　赤井村、小川刑部入道義綱がこゝに住んだ。

泉城址　同　泉村、岩城判官政氏此所に住して以降、丹羽の領となり内藤、板倉、本多の領となる。

本宮城址　安達郡本宮町、氏江・遊佐・鹿子田・三家の居城である。

高田城址　安達郡石井村、四本松氏の將平石甲斐守武頼の居城。

四本松城址　安達郡小濱町、興國年間吉良貞家以降宇都宮・斯波・石橋・白石等之れに居た。

百目木城址　安達郡旭村、石川氏累代の城址。

小峰城址　西白河郡白河町、興國年中結城親朝之を築き丹羽長重改築松平氏が之に居る。

須賀川城址　岩瀬郡須賀川町、二階堂爲氏の族臣治部大輔の築くところ、伊達政宗に陷された。

長沼城址　同　長沼町、文應年長沼隆時築くと言傳ふ。

峰ヶ城址　同　濱田村、須田氏の古墟なりといふ。

白岩城址　同　白方村、文安年間二階堂氏の一族之を築く。

守山城址　田村郡守山村、田村麿の築きしものにて代々田村氏の所領となると言傳へてゐる。

鳥ヶ城址　田村郡三春町、田村義顯の築くところ片倉・田丸・津川・加藤・松下・秋田の各氏が之に居つた。

星ヶ城址　同　守山村、田村麿の築きしもの御代田・須田氏之に居たといふ。

家川内城址　同　瀧根村、田村清顯の臣熊谷伊賀守眞盛の居城。

船引城址　同　片根村、天正年間築くところ、田村氏重臣が之に居た。

朝日城址　同郡常葉村、明德年間赤松顯則、天正に常磐貞之住んだといふ。

雲水峰城址　石川郡小鹽江村、南朝の遺蹟興國年間北畠顯信が守永親王を奉じて十數年間籠りしの所、正平八年吉良、相川、石川等の賊勢に陷された。

大寺城址　石川郡須釜村、承保元年藤田太郎光祐之を築くといひ、往時は藤田鳴の城と稱し後に大寺城と呼んだ。

細桙城址　同　郡小鹽江村、舊名松山城、源義家の臣源有光が築いたと云傳へてゐる。

高御城址　石川郡泉村、平將門の一旅小高六郎の居城と云ひ傳。

## 古墓

伊達晴宗墓　福島市代町、寶積寺、五輪塔がある。

世良修藏墓　同　縣社稲荷神社境内、修藏は明治戊辰の役の奥羽鎭撫總督參謀で、仙臺藩のために福島の客舍に切れた。

戊辰役官軍戰死者墳墓　西白河郡白河町、本町長壽院にある。薩、高知、大垣、館林、佐土原、山口、二本松諸藩士九十三人を葬つた。

結城宗廣、親朝、親光墓　同　白河町、關川寺に在り五輪塔三基あり、天正中關川寺と共に改葬されしものといふ。

保科正之墓　耶麻郡磐保村、見橋山にあり高一丈二尺、表面に土津神墳鎭石と題す、墓

南土津神社あり、正之を祭る、山崎闇齋撰する高一丈八尺の土津靈神碑がある。

**德一大師墓** 耶麻郡磐梯村、大同年中空海、惠日寺を創立し、三年にして德一に讓りて京都に歸る、後德一常州筑波に死し、弟子金爛屍の一部をこゝに改葬したと。

**知藏尼墳** 同 磐梯村、平將門の三女、將門誅後尼となりて、こゝに庵住し葬られたと云ふ。

**乘丹坊墓** 同 磐梯村、惠日寺の僧なり、壽永年中四郡の兵を率ひて平氏を助け、信州に戰死し屍を此地に葬つたといふ。

**戊辰官軍墓** 若松市大町、融通寺、軍監牧野茂敬以下高知、鹿兒島、岡山、大垣、大村越前、館林、山口、三春、二本松等の諸藩百四十九人を葬つた。

**蒲生氏鄉墓** 若松市榮町、興德寺、墓碑五輪、文祿四年二月京師に葬られしを子秀行が此地に改葬した。

**蒲生秀行墓** 此會津郡門田村、弘眞院に在り、墓碑五輪塔

**葦名盛高盛氏盛隆墓** 北會津門田村、黑岩にあり、葦名八世堂地但し盛信の墓は東山村天寧寺にある。

**白虎隊十九士墓** 北會津郡一箕村大字八幡飯盛山にある。

**佐原義連墓** 耶麻郡加納村、義連、源頼朝の東征に從ひ文治年中功を以つて會津に封ぜられ、後世葦名氏と稱す、五輪塔十基、元祿中山崎闇齋の撰文の碑を建てた。

**切支丹塚** 若松市藥師堂河原寛永十二年殉教の遺蹟である。

**城長茂夫人墓** 河沼郡川西村、城長茂の別墅ありし地にて夫人を葬つたと。

**瓜生岩女墓** 耶麻郡熱鹽村示現寺にある。

**畠山義繼墓** 安達郡石井村文字讀むべからず、天正中二本松城に居り伊達輝宗を殺し政宗の爲めに破られ自刄す、此地俗呼んで生害塲と云つてゐる。

**佐藤兀治夫妻繼信忠信墓** 信夫郡平野村醫王寺、墓碑皆文字漫漶讀むべからず、芭蕉此寺を弔うて一句を殘す、句碑がある。

**伊達朝宗墓** 伊達郡睦合村萬正寺、伊達氏の祖文治五年源頼朝の東征に從ひ後伊達郡に居り此地に葬られた。

**學英僧都墓** 伊達郡睦合村松原にあり、葛の松原の詠を以つて有名である。

**伊達成宗墓** 伊達郡小坂村、持宗の子、正長中奥羽探題となつた。

**相馬義胤墓** 相馬郡小高町、天正中小高城に居り伊達輝宗父子と戰つて武名があつた。

**その他** この他傳說地として信夫文字摺虎女の墓(信夫郡岡山村山口)僧文覺の墓(同大森村)兒塚(同杉妻村)錦木塚(伊達郡伊達崎村)小町塚(河沼郡新鄉村)金賣吉六墓(北會津郡神指村)泰衡首塚(大沼郡藤川村)吉治兄弟墓(四白河郡白坂村)勾當內侍墓(東白川郡富岡)采女墳(安積郡片平村)小六塚(岩瀨郡穗積村)等あり、尙遺髮を葬りしといふ近藤勇墓(北會津東山村)河井繼之助墓(北會津門田村)も有名である。

## 碑碣

**宗祇戻碑** 西白河郡白河町、櫻町文政中白河藩儒廣瀨典撰文、宗祇一萬句會に白河に來り一老女の才に驚いて戻つたといふ。

戊辰後官軍戦死者碑　同町本町長壽院にあり、重野安繹撰文、秋元子爵書の巨碑がある。
百五十一才翁碑　同金屋町妙關寺百五十一才の長壽者林利左衛門の墓碑である。
感忠銘　西白河郡大沼村搦目、結城宗廣の居城址、結城の舊臣内山重濃絶壁に宗廣父子の勤王の蹟を刻す。白河樂翁無忠銘の三字を賜ふ。高二丈五尺巾九尺廣瀬典の撰文。
寛成親王碑　東白川郡近津村大字中山本にあり、長慶天皇の御陵と云ひ傳ふ、長慶天皇の墓碑に關係ありと稱するもの、石川郡母畑村泉村等にもある。
伊東重信碑　安積郡富久山村久保田、伊達家の名臣天正十六年此地に戰死すと、磨城讀み難き所が多い。
曼陀羅碑　安積郡郡山市、阿邪訶根神社境内梵字を刻す、高六尺源頼義祈願の碑とも
切支丹碑　平忠通の靈碑とも言傳へてゐる。
正嘉の古碑　同郡山市如實寺にあり、五梵字戒名あれども十字章を冠してゐる。
宮城の古碑　信夫郡大森村北館の東にある供養碑正嘉二年の文字が見える。
建武古碑　信夫郡餘目村宮代、弘安年間の供養碑である。
ムツソリニー記念碑　集古十種に載せてある。
三忠碑　伊達郡川俣町中島、建武甲戌十五日仙海と刻す、此碑より東北二十間に嘉暦の古碑がある。
飯盛山にあり、ローマの石柱にファシスタ黨章の鉞を飾る、昭和三年十二月除幕式。
耶麻郡翁島村、三ッ和高一丈二尺幅六尺、磨上役三忠士の事蹟を刻す。松平容敬篆額高津泰撰文、山内晋、顔眞卿の書を集めて揮毫したといふ。

山鹿素行誕生碑　若松市桑町、日新館址の東北約二町東郷元帥の筆。
奈與竹碑　北會津郡門田村青木、松平保男子爵の書、戊辰戰爭家老西郷頼母一家自刄せるもの二十一人、婦女子多し、その忠烈を記念してゐる。
野口英世誕生碑　耶麻郡翁島村三城潟、野口英世生家にあり、同博士筆蹟の碑も並び建てらる。
島田帶刀碑　双葉郡廣野村、郷社八幡神社、帶刀小名濱代官として窮民救濟に努む、郷人恩惠に感じ墮涙碑と呼ぶ。名代官の碑にして殘れるもの、伊達郡桑折町無能寺寺西代官碑、東白川郡塙村の寺西代官誕育塚碑がある。
一町佛　西白河郡古關村、藤原清衡白河關より外ケ濱邊一町毎に建てしものと云ふ郡山市、本宮、信夫郡餘目村、同平野村、伊達郡長岡村等にこの系統のものが現在する。
平太佛　岩瀬郡稻田村、建保年間和田平太胤長の墓碑なりと言傳ふ、常松菊畦が世に紹介した。
弘安の古碑　田村郡嚴江村上鉾木、梵字のみの供養塔里人弘安の碑と云ひ傳へてゐる
同　石城郡中谷村形見、弘安七年の文字が見えてゐる。
一休歌碑　同　大森田村雨田、醫王寺に一休の歌碑と稱する歌碑がある。
開山碑　同　泉村、碑高さ一丈、傳云文保年間空谷禪師北條時頼と共に行脚してこの地に來りて此地に止まると。
その他　この他古碑塔として史蹟名勝指定になりし信夫郡鳥川村の下鳥渡供養石塔伊達郡石母田の寧一山書の供養石塔、石城郡須釜東福寺の舍利石塔、二本松町二本松城戒石銘等がある。又弘安時代前後の古碑も他に多い。

# 歌枕と傳說地

萬葉及勅撰集に見ゆる主なるもの

逢隈川　西白河郡西方旭嶽に發し宮城縣荒濱に入る。

逢瀨川　安積川と云ひて郡山の北方を流れ逢隈川に入る。

安積沼　說あり、安積郡山野井村東勝寺後の耕地であると言傳へる安積潟、安積浦の名跡あれども其他は詳でない。

安積山　說あり、安積郡河內村今の額取山といはれる。

山の井　同山西麓片平林にある小池であると。

安達原　說あり、大平村に在りといふ、古へ吾田太良眞弓安達駒を產する。

黑塚址　同地にあり、鬼女傳說を以つて有名。

安達太良山　安達耶麻兩郡の境なり、古祠安多太良神社あり、安達岳、二本松嶽、安達山の別名がある。

信夫里　信夫原ともいひ、信夫平野を云ふか、信夫岡、信夫浦、信夫森等歌枕の地がある。

信夫山　福島市北方の山、三峯隆起三山及招魂社を祭る。

袖渡　信夫郡渡利村と福島の間の渡ならんともいはれる。

毛知摺石　信夫郡岡山村山口、毛知摺觀音堂の前にあり、河原左大臣の歌と虎女の傳說及文知摺石を以つて有名である。

十綱橋　飯坂湯野兩溫泉の間摺上川に架す。往時藤綱十條を以つて釣橋となしたるよりこの名があると。

阿武松原　伊達郡伏黑村箱崎、本邦三松原の一といはれる。



下紐關　伊達郡大木戸村、厚樫山の麓、古の關址。

磐梯山　磐梯山のこと。

會津山　石城郡窪田村、和銅年間の設置、源義家の詠を以つて世に

勿來關　現はれてゐる。

野田玉川　石城郡玉川村野田、源を湯の嶽に發す、日本六玉川の一といはれてゐる。

結絕橋　野田の玉川に架す、宮城縣に同名の川と橋あり、いづれも說が多い。

三函湯　古名佐波古湯、石城郡湯本村、西南の山を湯嶽一名三函といふ、飯坂溫泉にも鯖湖湯がある。

磐城山　石城郡平窪村の東、石森山といふ。形富士山に似たり。磐城富士ともいはれてゐる。

眞野萱原　相馬郡眞野、上眞野、鹿島町地方なりといふ、宮城縣にも說がある。

白河關址　西白河古關村旗宿關の森、東西凡八十間、南北百門、古祠說

波立寺　白河神社一名關の明神あり、古關趾の碑は松平定信の建立

標葉堺　双葉郡久之濱村、波立藥師のあるところ。

子鶴地　同郡大堀村酒井にある。

松川浦（ひさなつかし）　相馬郡太田村降谷にあり、祠がある。

人不忘山　相馬郡松江、飯豊、磯部の三村に屬す、十二景の稱がある

西白河郡五箇村借宿、親地山といふ。

和集物語に見ゆるもの丶中

轉寢森　西白河郡大沼村、源義家假寢せしといふより地名が起ると

乙字瀧　龍崎、瀧布とも云ひ石川郡泉村にあり、幅五十間乙字形をなす逢隈川斷崖の瀑布である。

岩瀬森　岩瀬郡須賀川森宿、鎌足神社がある。

安積の里　安積郡、山之井、富久山、富田、片平、安子島一帶の古名であらう。

耳語橋（ヤヂ）　安積郡と福島市二個所あり、前者は源頼義の歌を以つて名がある。

片平越　安積郡大槻村帷子山にある。

峯越山　安達郡峯越村にある。

石井、清水　安達郡青田村にある。

憂思山　吾妻山の古名、憂思山は燃山の義か。

阿武隈山　伊達郡上保原村高子にあるといふ。

葛松原　伊達郡睦合村松原本邦三松原の一ともいはれる。

御藤松　伊達郡桑折町無能寺にある。明治九年　明治天皇御巡幸の際名を賜はる

腰掛松　伊達郡藤田町大字石母田、源義經奥州下向の時腰掛けしよりこの名が出だと。

會津里　今の會津地方か、宮城縣栗原郡にもある。

會津海　猪苗代湖のこと。

會津川　日橋川の古名。

日本武尊通過地　西白河郡金山村、日本武尊この地を通過されたと云ふ。

鏡沼　岩瀬郡鏡石村、建暦中、和田胤長同義盛此地に謫せられ妻を慕ふて此地に到りて入水すと云ふ。

難波池　河沼郡日橋村、義經を慕ふて鬼一法眼の娘此池に投じて死んだ。

兒塚　信夫郡杉妻村大平寺、塚野目光臣の男白菊丸、相州江の島兒ヶ淵に投じて死す、遺骨を此に歸葬したと。

天の羽衣舊蹟　相馬郡太田村、往昔三浦左近國清妻なきを悲しみ不動に祈りて羽衣を得て天女を娶るといふ傳說地。

駒ヶ池　信夫郡平田村平石、宇治川先陣の磨墨はこの地より出たと

辨慶硯石　伊達郡藤田町、頼朝東征の時辨慶この石に墨を磨して軍簿を記すと。

この他義家に關する石の傳說地に安達郡岳下村の鐙摺石、耶麻郡翁村の駒石、大沼郡旭村の義家腰掛石等である。田村麻呂に關しては田村郡高瀬村の馬上石、同郡御舘村の鶴石、奇石としては田村郡中妻村の黃金石、片曾根村の二奇石七郷村の三奇石等がある。

## その他

### 名橋堰

兒橋　岩瀬郡牧本村下松本鎌足公此地に巡遊せし傳說あり。

宮城野橋　田村郡守山村權現壇、歌枕仙臺宮城野橋はこれより移したといふ。

月抜橋　石川郡川東村、源頼義義宗この橋を渉り日天月天の供養塔なりしを知ると

奥州くるか橋　いふ傳說がある。

私語橋　伊達郡山舟生村にある。

十綱　福島市杉妻町大杉傳說によつて有名。

戸ノ口十六橋　何者かいかなる事をさゝやきて　橋はあたなる名を殘しける

琵琶橋　信夫郡飯坂町と伊達郡湯野村の間を流るゝ摺上川に架す、此橋十綱橋と呼びて歌枕となりしが、明治五年盲人伊達市の獻金によりて架橋二回の改橋ありて現在の鐵橋となつた。

緒絶橋　耶麻郡翁島村、戸ノ口川に架す鐵橋あるが、天明六年石橋を架し、明治十

尼子橋　六年安積疏水の成るや十六の眼鏡の石橋を作りしを以つて有名である。

里屋橋　相馬郡小高町小高川の下流にあり、相馬重胤の頃聲者玉都大蛇の秘密を侯に告げしの傳說を以つて人口に膾炙してゐる。

小川江堰　石城郡志摩にある歌枕の橋。

古河堰　石城郡平町にあり、長さ百間岩城則道の室德姫、尼となり永暦年間之を架したと。

石城郡堂島村、三輪傳說の系統をひけるお里といふ女の力によりて架したと云ふ。

石城郡下小川村地内より夏井川を堰す七里餘、平藩内藤家臣澤村勝爲の開鑿するところ草野村に澤村神社として祭られてゐる。

伊達郡湯野村より摺上川を堰す、水路兩渠七里餘逢隈川に入る(上堰)一は三里(下堰)、元和慶長間上杉の臣古河重吉代官たる時開鑿した。今湯野村に西根神社として祭られてゐる。

名清水

岩井清水　安達郡青田村古歌にある岩井清水なりと考證せしは文化の頃本宮町の國學者小沼幸彦である。

山の井　安積郡片平村、安積山と共に歌枕の地として古來有名である。

強清水　河沼郡日橋村、「親は諸白子は清水」と稱せられし名泉。

鹽井　耶麻郡大鹽村、弘仁中空海此地に鹽なきをあはれみ、岩中より湧出せしむると往昔この水より鹽を採つたといふ。

產清水　北會津郡一箕村八幡宮にある御賜水。

高瀨清水　双葉郡浪江町、西行の古歌にて有名。

化粧の井　西白河郡古關村、和泉式部が使用したといふ。

梅田白清水　岩瀨郡白方村往昔石背國造、田村麻呂等の使用せしと相傳へる。

堀越五ヶ清水　田村郡七郷村、黃金清水、岩井清水、長者清水、矢の根清水、龍清水。

生產水　田村郡濕根村、小野窯この地にて女子を設け生湯に之を使用したと。

峠

勢至堂峠　岩瀨郡長沼町勢至堂、安積郡三代村との境界會津地方出入の門戸、天文年間芦名盛氏勢至堂佛を此に創建す。

七折坂　河沼郡八幡村、大澤より氣多宮に通ずる十六七町の坂、元七曲りありしよりかく云つてゐる。

東松峠　河沼郡片門村、越後に通ず三株の老松あり相拘束してゐるやうだ。

車峠　河沼町群岡村、越後街道、鶴城修理の際巨材を車にて出したのでこの名が

暮成峠　起つたと。
永玉峠　石筵峠ともいふ、耶麻郡吾妻村、戊辰戰後の戰場となつた所。
美女峠　大沼郡川路村、大内峠ともいふ口碑がある。
八十里越　大沼郡野尻村西川村に通ずる峠、平家落人に關する憐れなる口碑である。
滝澤峠　南會津越後蒲原郡界岩越國境の大峠である。
　　北會津郡滝澤會津よりの白河街道として古來有名、寛永九年加藤明成修理し、明治戊辰戰爭の戰場となつた。
　　この他小坂峠、栗子峠、檜原峠、大峠、鳥井峠、尾瀬峠、鳥峠、御在所峠等の難所が多い。

## 名櫻

寶仙寺の大櫻　双葉郡上岡村寶仙寺境内、一本の幹に二種の花が開く、周圍五米。
中丸の枝垂櫻　岩瀬郡須賀川町、周圍三米、樹齢千年といはれてゐる。
三春滝の櫻　田村郡中野村、樹齢六百年高さ二十米周圍十米餘紅枝垂といはれ、天然記念物指定
大鹿櫻　耶麻郡猪苗代町、磐崎神社境内花芯より二葉を生ずる奇觀を呈してゐる。
種蒔櫻　耶麻郡磐梯村磐梯神社裏乘丹櫻木挿櫻ともいふ、周圍五米乘丹坊か接木したといふ。
太夫櫻　北會津郡一箕村、寛永の昔遊女齋太夫の墓印に植えたといふ、周圍七米。
石部櫻　北會津一箕村字滝澤、石部治部大輔刈邸の遺樹と云はれる、周圍十三米。
峰張櫻　若松市蠶養町、蠶養神社境内樹齢九百年と稱される。

薄墨櫻　大沼郡高田町、國幣中社伊佐須美神社左方の神木、淡紅色にて淡墨を含む一重八重を混じて咲く。
文珠堂の姥櫻　大沼郡高田町、文珠堂境内樹齢五百八十年、周圍六米。
神代櫻　大沼郡高田町、伊佐須美神社境内周圍四米。
種蒔櫻　大沼郡新鶴村地頭富塚伊賀守が千歳といふ一婦人の死を惜しんで植えたといふ。
糸櫻　河沼郡八幡村藥王寺境内枝垂櫻。
細八姥櫻　河沼郡柳津村周圍九米。
上野姥櫻　同　柳津村樹齢千年といふ。
種苗櫻　北會津郡大戸村、稻豫神社境内周圍五米。

## 紅葉名所

裏磐梯　川桁驛から約十粁、川上溫泉より三湖附近をめぐる一帶。
東山溫泉附近　湯川を挾みたる一帶。
靈山　伊達郡靈山全山一帶、國司館を中心として山麓に及ぶ一帶。
摺上峽と穴原溫泉附近　伊達郡穴原溫泉より摺上川に添ふて十五町の間紅葉地帶である。
夏井川溪谷　石城郡川前驛を中心として上下約五里の間とす。
矢祭山　東白川郡高城村久慈川の溪谷、矢祭山八景がある。

## 櫻の名所

開成山公園　櫻樹五百七十餘本樹齢五十餘年山櫻と染井、吉野、四月競馬會が行はれる

南湖公園　白河町周回一里寛政中白河樂翁開鑿、十七景があり、芳野の櫻、嵐山の紅葉を移植したといふ。

蛇の鼻公園　安達郡本宮驛より二粁、吉野と八重約四百本樹齢二十八年。

安達原公園　二本松驛より二粁、三十年を經し吉野、染井約四百本。

夜の森公園　常磐線、双葉郡夜の森驛より五百米、吉野櫻約七百本、樹齢二十五年より四十年に及ぶといふ。

信夫山公園　福島驛より二粁、三十年より五十年經過したる染井、吉野江戸彼岸八重の各種約五百本。

中村公園　相馬中村驛より一粁七、吉野山櫻合せて四百本、樹齢二十年乃至四十年。

亀ヶ城址　耶麻郡猪苗町、染井、吉野、牡丹合せて約一千本、樹齢三十年、五月上旬滿開。

柳津虚空藏　會津柳津驛より一粁、松杉の間に雜る櫻樹千二百本、主として吉野多し樹齢二十五年より五十年に及ぶ、五月上旬滿開。

鶴ヶ城址　若松驛より二粁、舊城址内約五百本、樹齢二十年より三十年、吉野、八重櫻が多い。

その他二本松お城山　平町松ヶ岡公園、伊達郡掛田町茶臼山公園、同郡栗野村向河原、同郡梁川公園、湯野愛宕山公園等が有名である。

## 牡丹名所

須賀川牡丹園　岩瀬郡須賀川町東洋一と稱せられ、明和三年同町伊藤祐倫なるもの大阪より十二種の苗木を持ち歸り移植したるに始まると云ふ。面積二千餘坪、株



數三千二百、二百年以上に達する老樹があり、指定名勝地である。

蛇の鼻牡丹園　安達郡本宮町より四南二粁、伊藤氏の公園源義家、安倍貞任を滅ぼし泥を隔てゝ一矢を放つたといふ傳說がある。

## 松杉名所

ひろぎの松　岩瀬郡濱田村源義家手植といふ。

千株松　安達郡石井村大久保渡邊氏宅前靈松記の刻碑がある。

杉澤大杉　安達郡新殿村杉澤周圍四丈高十八丈餘、天然記念物、杉の靈化して伊勢參宮せしの口碑がある。

義經腰掛松　伊達郡藤田町石母田源義經金賣吉次と此地を通りし時腰掛けし松といふ舊木は東西十九間南北十八間と史に見えてゐる。

御蔭松　伊達郡桑折町無量寺、別揭。

金上松　耶麻郡磐梯村、周十尺高五十尺、金上盛備の墓に伊達政宗植えさせたと言傳へる。

六本杉　同郡豊川村、々國大樹の八位と農大林學科は調査す、周五十五尺、高さ百尺。

奥州日の出の松　双葉郡廣野村、岩城常陸介正道の妻海賊に子を奪はれて此地に奮死したるときの墓標の松であると。

飯籠松　相馬郡上眞野村、並木に植樹せし苗木を盗みて飯籠に入れて此地に植えたものだといふ。

七本松　石城郡鹿島村、田村麻呂の植樹と言傳ふ、戊辰の役官軍を防ぎしの所、樹

幹彈痕がある。

西白河郡古關村、古關蹟にあり、從二位宗隆卿手植と言傳へる。

從二位杉　岩瀨郡大屋村、藤原鎌足この松を訪ひ來り和歌を詠ずと、白河藩主の詠と併せて建碑してある。

二木の松

この他大木若しくは植物として稀有なるものは前記本縣天然記念物の中に記してあるから參照されたい。

# 二四、本縣と文學

## □序說

### 一　日本文學と福島縣との關係

東奥の大縣であつて奥羽の關門を占める我が福島縣は、日本文學史上から見ても重要なる地位を占有してゐるのである。有史以前は姑く言はない。有史以來二千六百年、この長年月の間に於て福島縣が日本文學の上に如何に資料を人物を提供して、そして如何なる影響を與へたか、またこの福島縣が日本文學から如何なる資料を人物を提供せられて、そして如何なる影響を蒙つたか、それ等の點について左に考察して見ようと思ふのである。

勿論こゝではその詳細を論ずる時日と紙數との餘裕を持たないから、本論文に於ては福島縣文學史の極めて概略を叙述するのみとし、その大成は他日を期することゝしたいと思ふ。

### 二　福島縣文學史の區劃

叙述の便宜上、福島縣の文學史を左の五期に分つて考察することゝする。

1　大和時代
2　平安時代
3　鎌倉室町時代
4　江戸時代
5　東京時代

## □大和時代

一　概說　大和時代の前期は、傳承文學時代に屬するので、本縣文學に於ても、それが日本文學に於てさうであるが如く、文獻として存在するものはない。併し後期の奈良朝を中心とする記錄文學時代に入ると既に文獻上に福島縣の文學を見出すことの出來るのは愉快である。即ち韻文に於ては萬葉集、散文に於ては古事記・日本書紀等に福島縣關係の文學が表れて來るのである。

二　韻文

萬葉集　上代文學の精髓であり、又日本文學中でも重要文獻であつて、卷數二十、歌數四千百九十六、

首の一大歌集である。この中で福島縣に關係あるのは卷十四の東歌を中心として約十首ばかり見出されるのである。

陸奥の眞野の萱原遠けども面影にして見ゆと言ふものを（相馬郡眞野村）　卷三

陸奥の安達太郎眞弓弦はけて引かばか人の吾を事なさむ　卷七

時まちて落つる時雨の雨やみてあさかの山の紅葉しぬらむ　卷八

磐城山たゞ越え來ませ磯崎のこぬみの濱に吾立ち待たむ　卷十二

會津嶺の國をさ遠み會はなはゞ偲びにせむと紐結ばさね　卷十四

筑紫なる匂ふ子故に陸奥のかとり處女の結ひし紐とく（磐城郡片依村）　卷十四

あたゝらの嶺に臥す鹿のありつゝもあれは至らん寢處な去りそね　卷十四

みちのくの安達太郎眞弓はじきおきてせらしめきなば弦はかめかも　卷十四

安積山影さへ見ゆる山の井のあさき心を我が思はなくに　卷十六

三　散文

古事記　上代文獻中、最も重要なるものゝ一つで、それは日本の文學であると同時に日本の歴史でもあり、神話でもあり、又日本の言語、風俗資料でもある。和銅五年正月二十八日、太朝臣安麿の撰進で三卷ある。その中には「會津」の地名傳說をはじめとして「石城國造」其他の語彙が見える。

かれ大毘古命は先の命の隨に高志國に罷り行かしき。こゝに東の方より任けし建沼河別、その父大毘古と共に相津に往き遇ひたまひき。かれ其の地を相津と謂ふ。

日本書紀・古語拾遺　兩書共に地名件名として福島縣關係のものが數個所ある。

## □　平安時代

一　概說　此の時代に於ける福島縣は、詩の國・歌の國として、中央人の憧憬するところとなりつゝあつた。和歌に於ける歌枕として福島縣にあつた。信夫山・信夫浦・安積山・安達太郎山・會津嶺・白河關・逢隈河等はその中心をなすものであつた。そして、それ等の地名は、勅選各集の歌枕としても重要なる位置を占め、他方には物語・隨筆・叢話等にまでその影響を及ぼすことゝなつた。

二　和歌

古今集　醍醐天皇延喜五年に紀貫之等四人に勅して撰進せしめ給うたもの。卷數二十、萬葉以後の和歌凡そ千百十一首を撰してある。

福島縣關係の和歌も數首あるが、何れも人々に膾炙される名歌である。

陸奥のしのぶ文知摺誰ゆゑに亂れんと思ふ我ならなくに　河原左大臣

逢隈に霧立ちわたり明けぬとも君をばやらじ待てばすべなし　大歌所御歌

陸奥のあさかの沼の花かつみかつ見る人に戀や渡らん　同

陸奥の安達の眞弓我が引かば末さへより來しのびくに　同

後撰集以下の六集　後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞華・千載の各勅撰集は古今集と新古今集とを結ぶ上に於て和歌史展開の上に意義がある。福島縣關係の和歌は時代の下ると共にその數が多くなつて來る傾向があるのは、上方へ福島縣の歌枕が知れわたつた證據である。その中には人口に膾炙された和歌も多い。

みちのくの安達が原の黑塚に鬼こもれりといふはまことか　平兼盛（拾遺）

都をば霞とゝもに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關　能因法師（後拾遺）

吹く風をなこその關と思へども道も狹に散る山櫻かな　源義家（千載）

三　物語

伊勢物語　物語の祖と言はれ、在五中將物語とも言はれる。こゝには福島縣關係のものが次のやうにある。初段は信夫摺に關して「春日野の若紫の摺衣しのぶのみだれ限り知られず」の歌が見え、なほかの河原左大臣の歌も見えてゐる。又十五段には「信夫山しのびて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」の和歌に關して一說話が入つてゐる。

大和物語　伊勢物語と共に、歌物語として並稱されたもの。かの平兼盛の「みちのくの安達の原の黑鬼こもれりと言ふはまことか」の名歌を中心として說話があり、又陸奥の將軍に下向の時平忠文の「みちのくの安達の山ももろともに越えば別れの悲しからじを」の和歌を中心として說話があり、又「安積山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふものかは」の名歌を中心として戀愛談が入つてゐるのが目につく。

源氏物語　全篇五十四帖は、我が國文學史上の至寶であるが、若紫の卷には「安積山あさくも人を思はぬになど山の井のかけはなるらん」の和歌が見えてその答歌も「くみそめてくやしときゝし山の井の淺きながらや影を見すべき」と入つてゐるから、著者紫式部も福島縣の歌枕に執心のあつたことがわかるのである。

堤中納言物語　平安時代後期の物語で、十篇の短篇から成る特異な說話集であるが、その中「逢坂越えぬ權中納言」の條には歌合に「なべてのと誰か見るべき菖蒲草淺香の沼の根にこそありけれ」と出て居り、これを中心にして物語が展開されてゐるのである。

今昔物語　平安後期に於ける叢話文學の尤なるものとして、大いに尊重すべき傳說資料を藏してゐる物語で、宇治大納言源隆國の作と稱せられてゐるものである。福島縣關係のものでは、安積山傳說や田村麿傳說をはじめ數箇の說話が入つてゐる。

枕草子　源氏物語と共に、平安時代の國文學の雙璧と稱せられるもの、その九十五段には「關は」に「くきたの關」「白川の關」「よしなよしなの關」（勿來關）等の名が見え、また九十六段の「森は」には「しのびの森」（信夫郡）「きくたの森」「岩瀬の森」「常磐の森」「うたゝねの森」（西白河郡河鹿社附近）等福島縣に關係した名が多く見えるから當時の都人士に福島縣の歌枕が如何に重んぜられたかを知ることが出來る

## □鎌倉室町時代

一　概說　平安時代までは、歌枕としてのみ憧憬さるゝ傾向のあつた福島縣は、武士の興起によつて上方地方との交通の盛になつたことによつて、中央文學と岩磐文學とは大いに接觸し、緊密性を增して來た。特に吉野朝時代には、北畠顯家に從つて西上した岩磐の將士は十萬と稱せられて居る程であつたから、文學に於ても中央と影響し合つた關係は、前代より一層緊密性が增して來たものである。

二　和歌

新古今集　後鳥羽院が、藤原定家等五人に撰進せしめたもので、元久二年に完成した。よく鎌倉初期の技巧的な歌風を代表した歌集であつて、卷數は二十歌數は凡そ二千首ある。その中で福島縣關係の和歌も、十數首に及んで居り、本歌取其他新古今特有の技巧形式を見ることが出來るが、又眞情の溢るゝものもないではない。

行く末に逢隈川のなかりせば如何にかせまし今日の別れを　高階經重

消えねたゞしのぶの山の嶺の雪かゝる心の跡もなきまで　藤原雅經

みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬかきつくしてよ壺の石碑　源頼朝

十三代集　所謂十三代集は新勅撰集から以下十三代集で最後は新續古今集であつて永享十年まで及んだ。併し多くは新古今の糟粕を嘗めるに過ぎないものであつて、和歌には却つて勅選以外の新葉集其の他に見るべきものがあつた時代である。撰集を中心としての各家集にも福島縣關係の和歌が非常に多い

三　歌人・俳人

頓阿法師　俗名は二階堂貞宗、二條爲世に學び、當時歌壇の隨一とせられ兼好・慶運・淨辨等と共に四天王と稱せられた。歌學の方では井蛙抄、水蛙眼目があり、家集の草庵集は二條派の模範となつた。吉野朝時代、父光貞は本縣須賀川に居住せるものらしく、頓阿は若年を同地に過したもの〻やうである後考を俟つ。元中元年三月歿。年八十四。

老いぬれば何故落つる涙とも我さへ知らでぬる〻袖かな。

行くまゝにいや遠ざかる故郷の山さへ今は雲がくれつゝ。

百舌のなく尾花が末の夕日かげ殘るもさびし秋の山里。

猪苗代兼載　連歌を飯尾宗祇について學び、後「花の下」の稱を許された。父は三浦義明二十三世の